
Seeker -探求者-

坂戸半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seeker - 探求者 -

【Nコード】

N5904M

【作者名】

坂戸半

【あらすじ】

テロ事件に巻き込まれた一人の青年。気がつけば自分の社会的存在が消えていた。失ったものは大きい。だが彼は失っただけではなく、代わりに不思議な力を手に入れた。

彼は周囲で起こる様々な出来事に巻き込まれながらも、手にした不思議な力を使い、全ての答えを探し求める。

はじまり(前書き)

初投稿です。文章力が無く、問題点もかなりあると思います。何か意見やアドバイス等ありましたらぜひ書き込んで下さい。参考にさせて頂きます。よろしく願いします。

はじまり

第一章 はじまり

2093年 7月7日 午前11時27分

『…飛行場で発生した大型旅客機爆破事件の続報です。大型旅客機内で発生した爆発による負傷者の救助および火災の消火作業が続けられています。現場と中継がつながっています。山本さん、そちらの状況はどうですか？』

『はい。依然として旅客機は滑走路内で炎上を続けており、救助活動も難航しています。中にはまだ数名が取り残されているとの情報も入って…』

炎上していた旅客機が一段と大きな炎を上げた。と、同時に「逃げる！爆発するぞ！」

消防士の叫びが聞こえる。直後に大きな音をたて、旅客機の中央部を砕き、どす黒い煙と炎が噴出した。中に取り残された者のうち生存者数が0であることは誰もが分かった。

『た…たった今再び旅客機が爆発しました…』

レポーターはその言葉を発して立ち尽くした。

死んだ存在（前書き）

章によってかなり長さ変わってしまうと思いますがご了承ください。
何かお気づきの点がありましたらご指摘、アドバイス等して下さい。
よろしく願います。

死んだ存在

白い壁、白い天井、白い蛍光灯…目を覚ますとその風景が目飛び込んできた。

辺りを見回すと隣のベッドには心配そうな顔で自分を見つめている老婆がいた。

「目が覚めたのね。うなされているものだから心配したわ。」
「……」

頭がぼんやりする。話しかけた老婆は優しく微笑みながらこちらを見つめている。徐々に覚醒し、体の痛みを改めて感じてきた。痛み体を何とか起こす。

「すみません。五月蠅かったでしょうか？」

「いいのよ。気にしなくて。それより無理して起き上がらないほうがいいわよ」

「大丈夫です…まあ少々、ではなくかなり痛みはしますが死にはしませんよ」

「そうですね、では私の質問に答えて頂けますか？」

突然の男の声に驚き、振り返るとそこには医師らしき男が立っていた。

「お話を聞きたいが、構いませんか？」

「あ、はい。なんででしょう？」

「まず自己紹介をしましょう。私は矢口。君の担当医師です。気分はどうですか？」

「まだ少し頭の中がボーっとしていますけど、問題は無いと思います」

安心したように矢口は頷いた。

「……君はここに運ばれてくる以前の事は覚えていますか？」

「運ばれてくる前、ですか？」

表情が強張る。頭に思い浮かんだのは数多くの人間の悲鳴、激し

い衝撃、熱風。改めて自分の体を見る。全身に巻かれた包帯や数箇所に取り付けられたギブスから自分のイメージは現実のものであったと確認した。

「……テロ事件に巻き込まれた。…そう、ですね？」
矢口に静かに告げる。

「そう。君はあの事故で救出された人間のうちの一人。ですが……」
迷いがあるのか矢口は躊躇った。

「君は本当にあの飛行機に乗っていたのですか？」
「……はい。」

医者の質問に首をかしげる。

「では、君は一体誰ですか？名前を教えてください」

力強く尋ねる矢口に気圧される。2047年からすべての国内で出生された者はDNA登録されることが義務付けられていた。たとえ意識の無い急患であろうと直に本人確認はできるために、その質問には疑問を感じずにはいられない。

「…え？志井 鍵矢、ですけど」

矢口は手にしていた書類を確認した。

「彼は死亡しています。もちろんDNAの確認も取れています」

「は？」

「もう一度言います。志井鍵矢さんは死亡しています。それに君のDNAに該当する人物は国内に存在しません。もしや海外でお生まれになりましたか？」

「そんなはずは…。俺が生まれたときの写真やビデオを見せてもらったことがありますがあれば間違いなく国内でした。DNA登録の様子も確かに録画されていましたし…」

「ですが君のDNAは存在しないのです」

沈黙が続く。

（え？何故？旅行前に病院で検査した時DNAは確かに一致していた…）

「…鏡を持ってきてください」

「これでいいかな。」

慌てて自分の顔を確認する。包帯などで所々隠されてはいるが確認くらいはできる。

(間違いない。俺自身だ。他に何か無いか…自分を証明できるものは…)

だが、彼は何も持っていない。救助されたときには財布、携帯、自宅の鍵のいずれも所持していなかったという話だ。

「俺の自宅に案内します。そこならば写真があるはずです」
「分かりました。車を用意するのでついてきて下さい」

病院から約1時間。家に到着した。が、家は柱を数本残して完全に焼け落ちていた。

「なんで…なんでなんだ…」

当然ながら身分を証明できるものなど何一つ見つけれはしない。崩れ落ちた鍵矢を矢口は何とか車に乗せ、病院へ戻った。

「…俺は…本当に志井、鍵矢…なのか？」

生存者

病室に戻った力ない鍵矢の姿を見て隣のベッドの老婆は言葉を失った。

「……………」

「先生、何かあったのですか？」

「彼の個人情報に関するので本人の了承を得ないとお話できません」
老婆は鍵矢に心配そうな表情を向けた。鍵矢は無理に笑顔を作つて老婆に声をかけた。

「ありがとうございます。僕は大丈夫です……………」

「無理しないで下さい。とにかく話の続きはまた明日しましょう」
「……………はい……………」

その夜、眠りにつけない鍵矢は暗くなった病室の天井を見つめていた。昼間とは異なり、気持ちが落ち着いたため頭は十分に回っている。

（何かおかしい…俺は確かに志井鍵矢だ。しかし今はそれを証明できないだつて？まあ誰か証人がいれば問題ないはず。俺がこうして無事だつたんだから俺の家族も…つつ！）

頭に鋭い痛みが走る。

（家族！…どうして俺は今まで家族のことを忘れていた？父さん、母さん、理紗…）

「え、顔が……………分からない……………」
（…どうして顔だけ…？）

翌朝、矢口が鍵矢の病室へやって来た。

「おはようございます、昨日はよく眠れ…たはずがありませんね」
目の下のクマを見れば誰でも想像がつく。矢口は表情を曇らせる。

「……先生！俺の家族はどこですか？父さんは？母さんは？理紗は？」

矢口は一度目を閉じてから静かに告げた。

「志井鍵矢さんのご家族はお亡くなりになりました。」

「嘘をつくな！！」

これまでどんな質問にも冷静に答えていた鍵矢が矢口に掴みかかった。矢口は何も言うことなく、鍵矢の目を見つめた。

「……本当なんです。父さん、母さん、理紗……」

「お聞きしたいのですが……理紗……さん、とはどなたですか？」

「妹ですよ。3つ下の。志井鍵矢の家族は調べたんでしょう？」

「調べはしましたが……妙ですね。『志井鍵矢』には妹はいませんよ。少なくとも記録上は。それに航空機の乗客リストにも『志井理紗』の名前はありませんよ。」

「……え？」

（自分は存在しない人間で、妹と思って接してきたはずの人間までも存在しない？ますます自分の存在が分からない。俺の頭はおかしくなってしまったのか？）

「……大丈夫ですか？」

「え？あ、はい……。あの、俺以外に無事だった人は……？」

「あの事件で救出された人間は君を含めて僅か3名しかいません。飛行機が最初の爆発と最後の大爆発の間は僅か30分程。その間に救出されたのは3名だけでしたから。」

「それだけ時間があつてどうしてたったの3人しか……」

「詳しいことは今度新聞等で読んでもらえたほうが早いですよ。」

「そうですか。それよりもその2人に会わせてもらえませんか？」

「2人ともこの病院にいますが、1人は面会謝絶です。もう1人はその…事故のせいで心を閉ざしてしまっています。話しかけたとしても返事があるとは限りませんよ。」

「構いません。会わせて下さい。」

「分かりました。ですが私もその場に立ち合わせてもらいますよ。」

生存者（後書き）

先日、日焼け止めを塗らずに外出しました。腕時計の後がハッキリ残る日焼けをしてしまいました。皮膚が痛いです。

大塚みこと

4F最北端の個室に救助されたうちの一人はいた。大塚みこと。彼女はCAとして最も近い出口に座っていたために最初に救出された、という話だ。

「初めは君と同じように相部屋でしたが、彼女と同室だった方から苦情が来まして。」

「どんな苦情だったんですか？」

「すみません。それはお答えできません。…着きました。開けますよ?。」

軽くノックをしてから矢口は扉を開けた。

「……」

黒く長い髪の女性が外を眺めている。病室に入った二人を気にも留めずに外を眺めている。

「みことさん。今日の体調はいかがですか？」

「……」

矢口に声をかけられ、みことはゆっくりと振り返り、小さく頷く。視線を矢口から鍵矢に緩やかに移動させる。みことと目が合った鍵矢は慌てて自己紹介をした。

「あ、俺は志井鍵矢つていいいます。あなたと同じ航空機の事件の生存者です」

「……」

相変わらずみことは何も話さない。だが、鍵矢の言葉を聞き、みこととの表情は少し硬くなったように感じる。僅かな変化であるため、矢口は気が付いていない。

(……あれ?なんだこの人、まさか……。だとすると、矢口先生の前で話すのはまずいな……)

「話を变えましょう。俺の出身は……」

鍵矢は返事のないみことを相手に自分の話をしばらく続けた。

「そろそろ戻りましょう。私も午後の診察の準備をしなくてはなりませんから」

黙って様子を見ていた矢口の一言で二人は話を切り上げ退室した。「みことさん、また来ますね」

部屋を出る際に鍵矢はそう告げた。

「先生の言ったとおり返事してもらえませんでしたね」

「ええ、ですが君の話を聞くことで少しずつでも心を開いてくれるようになるかもしれません。ですからこれから時々彼女の部屋に行ってあげてくださいね」

「分かりました」

（やはり先生は気付いていないみたいだな。）

その夜、消灯後に鍵矢は一人静かにみことの病室へ向かう。四階に到着した瞬間、鍵矢はどこかから流れってくる負の感情を感じ取った。

（暗い感情……いや、黒い感情というべきか……）

原因は分かっていた。みことの部屋へと急ぐ。部屋に入ると目に飛び込んできたのは昼間と変わらず外を眺めるみことの姿だった。

「……」

ゆっくりと振り返るみこと。その様子は昼間とまったく変わらない。

「今は俺しかいませんよ。もうその演技やめたらどうですか？」

みことの反応が変わった。

「……医師やカウンセラーも騙せていたというのに。どこで気付いたの？」

「今日の昼間。『事件』で言葉に少し反応していた。矢口先生は気付かなかったようだが。」

「表情には出てないはずよ。あの注意深い矢口先生が見逃すはず無いわ。」

（……俺ってそんなに鋭かったか？）

「まあそれはいいとして、どうしてこんな演技していたんですか？」

何をかくしているんですか？」

「あなたには関係ないことよ」

「……すべて復讐のため、ですね。あの事件の」

「犯人が憎いと思わない？殺してやりたいと思わない？死んだ人たちの無念を晴らしたいとは思わない？あの日からそう思っただけで毎日過ごしてきたわ」

彼女が発する黒い感情が針のように鍵矢の頭を突き刺す。苦痛に顔を歪め、頭を抑える。

「そんなことばかり考えてたからかねえ？こんな『力』が手に入つたのは」

掌を上に向け意識を集中させると、みことの掌には赤い炎がゆらゆらとゆれている。

「な……？」

「あなたになんで見せたか分かるかい？演技のことを知られたから当然口封じはしなくちゃならない。それとここでの生活中に訓練したこの『力』がどのくらい使いこなせるか確かめておく必要があるからさ」

「本当に復讐で頭が一杯みたいですね。俺はまだ死ぬ訳にはいかなんで抵抗させてもらいますよ」

そう言うと鍵矢は右足のスリッパを飛ばすと同時に振り返り、病室の扉めがけて駆け出した。

（この部屋さえ出られれば……）

「単純ね。分かりやすすぎるわよ」

みことは自分に飛んでくるスリッパを避けながら掌の炎を病室の扉に向けて投げつけた。炎は扉を赤く燃やし、変形させた。熱さをこらえて鍵矢は扉を必死に動かそうとするが、まったく動かない。

「だれか！ 助けてくれ！」

「大声出しても無駄よ。ここはナースステーションからもつとも遠いうえに4Fにいるのは心に病を持った患者ばかり。助けなんて来ないわ」

(どうする……どうすればいい……)

「火災報知機も無駄よ。何度も火を使つて作動させていたら困り果てた看護師達を取り外してしまつたみたいだからね。ほら」

炎を天井に投げつける。変化は何も無い。

「同室だつたの人の苦情の原因もそれか。でもこの扉見たら誰でもおかしいと思うだろ」

「朝までには直すわよ。この『力』を使ってね。だから……もう燃えてしまいなさい！」

鍵矢に炎を投げつける。

「やばっ……！」

兆候

「あつぶね！」

間一髪。鍵矢目掛けて飛んだ炎が床を黒く焦がす。

「へえ、なかなかうまくかわすじゃないか」

笑いながらみことはテンポよく鍵矢に向け炎を投げ続ける。投げつけられた炎の一つが鍵矢の左腕を包にこんだ。強烈な痛みで床に倒れこむ。

「ぐああああ！」

「やつと当たったよ。動局的がこんなに難しいとはね」

(痛い！ 熱い！)

「すぐに楽にしてやるから動かないでね」

みことが手にした炎は刀へと形を変えた。ゆっくり歩み寄るみこととを前に、鍵矢は恐必死に後ずさる。部屋の端まで追いつめられ、恐怖し、目をつぶる。

(俺は死ぬのか……こんなところで……死?)

「何か言い残しておきたいことはあるかしら？あるならハッキリ言ってみなさい」

死を意識した途端、鍵矢は自分の中で何か変化が起こるのを感じる。

「……分かる」

顔を上げた鍵矢の目は先程とは明らかに違う。みことは足を止めた。だが鍵矢は片腕が使い物にならない只の一般人、みことは『力』を持つ人間。自分の優位さを再確認し、みことは再び鍵矢に歩み寄る。

「じゃあ私を倒すしかないねっ！」

炎の刀は空を切る。鍵矢は左手を抑えたままみことの真横に立っている。

「……え？」

動きが完全に見切られている。鍵矢の目が先程より冷たい。その目を見たまひことは奇妙な感覚を感じた。

「…分かる…」

再び呟く鍵矢の一言が更にみことの恐怖を駆り立てる。咄嗟に鍵矢から離れ、炎を数発打ち出す。鍵矢は動じることなく緩やか、しかし的確に避けながら歩く。

(なに……これ……)

その様子に焦り、無我夢中で炎を鍵矢に向かって投げ続ける。だが、一つとして鍵矢に当たるとは無かった。

「な、なんなのよコイツ、うつ……」

投げながら言葉を発したその時だった。今まさに投げようとした炎が掌から消え、同時にみことは意識を失った。

「エネルギーの使いすぎか……。ん……ぐっ？」

鍵矢が普段の自分の感覚に戻るのを感じる。感覚が戻るのに伴い、先程まで消えていた左腕の痛みと急激な疲労が鍵矢を襲う。

(俺にも疲労が……？早くこの部屋から出ないと。いつ目を覚ますか……)

「……って扉が！ そうだった……」

鍵矢は部屋を見渡す。焦げだらけの部屋の中で無事なのはベッド周辺の物くらいなものだ。ベッド脇の窓から下を見る。飛び降りたら無事では済まない高さであることは明白だった。

(……これしかないか)

鍵矢はシートとカーテンを結び始めた。さらにシートの先をベッドの足に結びつける。それだけでは到底地上には届かないが三階の窓と同じ高さ程度には届いた。火傷した左腕をかばい、何とか右腕だけで三階の高さにたどり着いたものの窓には鍵がかかっていた。

(窓際にベッドは……ない。よし割って入るか)

反動をつけようと窓を軽く蹴る。だが窓を蹴った瞬間、シートが音を立てて破れた。

(うつそ。マジ……かよ?)

鍵矢は地面に激突することを覚悟したが、幸運にも大木の枝に体が引つかかる。

(た、助かった……)

何とか無事に地上へ降り、病室へ戻ることはできた。病室へたどり着いた途端、左腕の痛みがあるにも関わらず鍵矢は自分のベッドに倒れこみ、意識を失った。

会話

「……ん……んあ……」

目を覚ました鍵矢の左腕は包帯が巻きつけられていた。

「え」と……あれ？」

何が起こったのか頭の中を整理する。

(確か俺は大塚さんの部屋へ行つて……炎を……)

冷や汗が流れる。咄嗟に前後左右を確認するが危険は無い。あるのは矢口から鍵矢に向けられた、冷たい視線だけであつた。思わず目を逸らす。テレビで現在時刻が午前九時であることを確認してから引きつった笑顔で話しかける。

「お、おはよう、ございます？」

「……」

「あ、あの……先生？」

「何ですか？」

「え」と、その。う、腕の治療ありがとうございます」

「本当に恩を感じているなら本当のことを話してもらえますか？」
呆れ気味の矢口はため息混じりに尋ねる。

「その火傷、大塚さんと関係がありますね？」

鍵矢の表情が硬くなる。

「は……話す前に大塚さんが今どうしているか教えてもらえませんか？」

「あんな状態の部屋が出来上がる理由も含めて色々お聞きしたいのですが……今も眠り続けています。丸1日経過しても目覚めません。だから話も口々に聞けないんです」

焼け焦げた部屋を想像し、殺されかけたことを思い出す。眠り続けていることを聞き少し安心すると同時に矢口の言葉に驚いた。

「丸1日？え？」

「君は丁度30時間程ですね。時々は見に来ましたが常にうなされ

ていましたよ。大塚さんもそうでしたが、かなり疲労が溜まっていたようですね」

（体力よりも精神的に疲弊したんだろうな。無理もないか）

「それで？何があったんですか？」

「あゝ、分かってますよ。話します。だから顔あまり近づけないで下さい」

険しい顔で迫る矢口を押し返し、鍵矢は一昨日の夜の話を話した。鍵矢の話を聞いていた矢口は終始黙り込み、ただ頷くだけであった。

「なるほど……まさか大塚さんが。そんなことを……」

「こんな話なんか信じられないですよね？」

「その、手から炎……でしたっけ？未だにそちらは信じられません」

「……ですよ。立場が逆なら俺も信じちゃいないと思いますよ」
肩を落とす鍵矢。

「ただ、ありそうな話だとは思いますが」

矢口の思いもよらない言葉に顔を上げる。

「今回のテロのように奇跡的に助かった人間が、普通の人間が持たない特殊な力を手に入れる、というのは耳にしたことがありますか？」

鍵矢が胡散臭そうに尋ねる。

「先生は医師ですよ？医学的に見て、そんなことあるんですか？」

「立証はされていませんので今の段階ではない、と言わざるを得ませんが……」

短い沈黙が生まれる。

「……まあそこは信じなくても構いませんけど、とにかく大塚さんには注意してください。それと、大塚さんが目を覚ましたら俺にも教えてもらえませんか？」

鍵矢は改めて矢口にそれだけを伝えた。

「わかりました。ただし、これ以上私に隠し事はしないで下さい。」

いいですね？」

素晴らしい残して矢口は部屋を出た。

病院から遠く離れたビルの屋上で一人の男が双眼鏡を覗いている。懐に入れた電話が鳴る。

「……もしもし、俺だ。……いや、まだ眠っている。……了解した。」

電話を切り改めて双眼鏡を覗く。

「……まだ変化なし、か。」

会話（後書き）

『ヤツらを解放せよ。』
『を見に行きたいです。』

失踪

みことに殺されかけてから三日目の朝。鍵矢は目を覚まし、テレビを見ていた。

『8月10日。今日最もいい運勢なのは……』

「そうか。もう8月に入っていたんだな……」

左腕に巻かれた包帯を見て鍵矢はため息をつく。

（テロ事件からもう一月か……。そう言えば志井鍵矢は死んでいるんだっけ？それに理紗はいないとか何とかも言われたな。早く色々調べないと……）

考えながら外を眺めていると、眼鏡をかけた見慣れない看護師が焦った様子で鍵矢の病室の戸を勢いよく開ける。

「ハア、ハア……大塚さんを知りませんか？」

「え？いえ、知りませんけど」

鍵矢の返事を聞き、今度は隣の老婆の方を見る。

「それは、どんな方ですか？」

簡単な特徴を述べた看護師に老婆は大きく頷く。

「ああ、その方でしたら昨日の夜この部屋に来ていましたよ」

その言葉を聞いた鍵矢は背筋が凍る思いだった。老婆によると、鍵矢が用を足しに部屋を出た直後、みことが部屋に来たらしい。さらに、

「いない……まさかここに来ることが読まれた？仕方ない。脱出がするしか……」

そう呟いて、そのまま窓から出て行ったそうだ。

（脱出が優先、ということとはまた俺を狙ってくる可能性も……）

「聞いての通りです。大塚みことさんが失踪しました。それも含めて少しお話があります」

いつの間にか部屋にいた矢口が鍵矢に告げる。

「内容が重そうですね」

「はい。ここでは少し……。場所を移してからお話しましょう」

言われるがまま鍵矢は院長室へ連れられた。矢口が院長ということに驚きはしたが、矢口の深刻な顔に何も言うことはできなかった。「君はこの病院では志井鍵矢とは別の人間として扱っていた。少なくともデータ上では」

「それは、志井鍵矢という人間が死亡しているから。ですね？」

「はい。話は変わりますが、先程の話から君が大塚さんに狙われていることも分かりました。おそらくその理由は……」

「『力』を直に見た、でしょう」

「はい、君は本当に頭の回転が速いですね。」

矢口は先を言われたことに苦笑しながらも言葉を続けた。

「……どうやら彼女は本当に『力』を持っていてるようですね」

「はい？」

突然の言葉に鍵矢は目を丸くする。

「彼女が君だけを狙い、その他の人間に手を出すことなく姿を消した。それは我々を消す必要がないと判断したのでしょうか。おそらく仮に君が我々に話したとしても我々がそのような話を信じることは無いと思った、つてところでしょう」

矢口の話聞き、鍵矢は理解して付け加えた。

「そのために他の人間に見られないよう夜中に俺を殺しに来た。だが、結果的に俺を殺すことは出来なかった。だから計画を変更し、目が覚めたことに気付かれないうちに病院を抜け出して『力』について隠そうとした、ですね？」

「はい。ですが君を狙っていたところを目撃されてしまった。それを聞いて彼女が『力』を持ち、同時に隠そうとしていると確信しました。君はこれから先も彼女に狙われると思います。ですが、対抗しようにもいい案が思いつきません」

鍵矢が黙り、考えた。思いつくのはたった一つ。

「……抵抗が無理なら俺が見つからないよう隠れて生活する……」
矢口は驚かず、複雑な顔をする。

「抵抗でないとするなら私にも1つ案があります。君の案と少し似てはいますが…君が別の人間に生まれ変わる、というものです」

「別の……人間？」

「私は医師であり、同時にここの院長でもあります。その2つの権限があるので私には多少の顔が利きますし、データ管理も僅かながらしています。おそらく私が案の方が隠れた生活を送るより確実に思います」

「詳しく聞かせてもらえませんか……？」

「もちろんです。そのためにこの部屋に移動したのですから」

失踪（後書き）

ストーリーが無理やり感丸出しで申し訳ないです。

提案

志井鍵矢という人間はテロ事件で死亡している。そのためこれまで鍵矢の簡易的な入院記録やカルテ等のデータは矢口が勝手に作り上げた架空の人物、石井健也として登録していた。矢口の案というのは『石井健也はすでに退院し、帰ったことにする。それと同時に鍵矢本人は別の名前を使い、DNA申請を含めた正式な登録を行うことで新たな人間に生まれ変わる。』というものである。

「強要はしません。ですがこのままでは君も危険ですし、この先我々も安全とは言えなくなるかもしれません」

鍵矢は黙って聞いている。

「病院外で何らかの登録や申請を行うときにも融通が利くようになりますよ」

「分かってます」

鍵矢は口を閉ざして悩む。しばらく黙った後、静かに口を開く。

「それでも、俺は志井鍵矢なんです。やはり自分自身を捨てるのは抵抗があります……」

「もつともです。ただ、それは『社会的に』の話です。実際に名前を変えることで君自身が変わるわけではないのでしょうか？君が自分で志井鍵矢であることを認めてさえいれば何の問題も無いでしょう？」

真顔で話す矢口の言葉には説得力があった。

「いや、でも……そうですね。先生の提案通りにします」

納得はしなくなかった。だがこの方法を取ることが一番だと自分に言い聞かせ、矢口の提案を受け入れることを決意した。

「分かりました。すぐにも登録してしまいたいので新しい名前を教えてください」

「今ですか？」

「今です」

「……」

「……………」

腕を組み、考え込む。長くなる気配を察知して矢口は、

「仕方ないですね。登録は明日にしますので今日1日じっくり考えて下さい」

そう言い、立ち上がる。鍵矢が部屋を出る直前、矢口は確認した。「当然ですがこのことは他言無用でお願いします。病院関係者にも、です」

「分かってますよ」

部屋を出た鍵矢は自分の病室へは戻らず、そのまま病院の外へ出た。

(俺は……志井、鍵矢だ……でも……)

空を見上げて立ち尽くす。夏日の快晴。空が蒼い。

(俺は、どうなるんだろうな。これから何をしていくんだろう……)

「何をしているのかしら？」

鍵矢を見つけた同室の老婆が近づき、声をかける。老婆と病室以外の場所で言葉を交わすのは初めてだ。

「今検査が終わって部屋に戻るところだったのよ。でもあなたがいるのを見つけて連れてきてもらったのよ」

老婆は車椅子に乗っていた。普段ベッドにいるところしか見えない上に、常に元気そうに微笑んでいるために、老婆が足を病んでいたことをいつい忘れかけてしまう。

「そうですか」

鍵矢も老婆に笑顔で応える。後ろで車椅子を押していた看護師に『同室だから後で部屋まで連れて行く』と告げ、老婆と二人、入り口のすぐ外に残った。

「何か悩んでいるみたいね。私でよければ相談に乗るわよ」

「ありがとうございます……少し、退院した後について考えてい

ました」

言いながら再び空を見上げる。

「俺は……これから何をすればいいのかなって」

「若いんだから何でも出来るわよ。まだ20代でしょ？したいことをすればいいの」

「22です。したいことですか。それはそれで難しいですね。」

視線を自分の影に落とし、難しい顔をして老婆に尋ねる。

「……もし、自分の家族が殺されたとしたら、その家族は無念を晴らしてもらいたいと思うでしょうか？」

「そうね。私があなただのご両親だったら無念でたまらないと思うわ。でも無念を晴らす、っていうのは多分あなたが考えていることとは少し違うかもしれないわね。」

そう言いながら老婆は鍵矢から空へと視線を移す。

「少し、長い話をしてもいいかしら？」

「はい、構いません。ただ……あの木陰に移動してからにしましょう」

「そうね。今日はいい天気でも暑いものね」

老婆の車椅子を押し、鍵矢は少し離れた木陰へ移動した。

提案（後書き）

展開が遅くてすみません。

病院滞在はあと2話くらいで終わりにするつもりです。

だんだんキャラが壊れていきそうなので不安を感じています。

決意

「実は私ね、あなたくらい年の頃に父を殺されたのよ」

老婆は何気なく笑顔で語り始めたが、その内容に鍵矢は驚いた。

「父は銀行に勤めていたのよ。毎日決まった時間に起きて決まった時間に家を出て、決まった時間に帰ってきてお酒を飲む、って生活していたの」

他人に自分の思い出話をするのが久しく、老婆は楽しそうに話す。

「でもその日はね、いつもの時間に父は帰ってこなかったの」

「何があつたんですか？」

「家でテレビを見ながら帰りの遅い父を待っていたら、ニュースで父の勤めていた銀行が出ていたの。どうしたのかと思って見ていたら銀行強盗が立てこもっていたの。じつとなんてしてられなかったから慌てて母と私は父の仕事先まで行つたわ」

「……………」

老婆の声が少し寂しげなものに変わる。

「私たちが着いたときには、人質はみんな解放されていたわ。犯人が銃を乱射したらしくて怪我してる人がたくさんいたわ。でもその中で父だけが意識が無くて……………」

「それで、お父さんは……………」

「そのまま亡くなつたわ。それに犯人には逃げられてしまったの。

その時の私はね、恨むことで頭が一杯だったわ。父を殺した犯人もそれを捕まえられない警察も憎く思えて」

「誰だつてそう思うはずです」

これまでも冷静ではいたが、鍵矢は自分の中に怒りと悲しみがあ
ることは理解していた。

「でもね、葬儀のときに同僚の方からお話を聞いたの。私たちの到着前に、まだかろうじて意識のあつた父が『死人のために生きるな。自分が満足して誇れるよう生き方をしろ』と私に伝えてくれて」

「……立派な方ですね」

「ありがとう。私は父の残した最後の言葉を聞いて、自分が情けなく思っちゃったわ」

「情けない？どうしてですか？」

「人間だから悲しくなったり怒ったり、恨んだりもするのは当たり前でしょ。でもそのせいで前に進まないのはいけないことだと思うわ。その言葉を聞けなかったら私は父の死にとらわれ続けることになっていたと思うわ。」

老婆の話聞いていた鍵矢は、自分の父を思い浮かべる。顔は相変わらず思い出せないが、幼い頃に言葉通りとしか思えなかった父の言葉は思い出すことができた。

『前を向いて歩け、鍵矢。だが時には後ろを振り返れ。見えるものもあるかもしれないぞ。』

「前に……進む？」

「これも言われたことなのだけど、父が無念だったのは死ぬことじやなくて、自分の死が私に悪い感情を植えつけてしまったことだつて」

鍵矢は自分の胸の中にも『黒』の感情があることを改めて理解し、複雑な顔をする。

「この気持ちは持ちすぎちゃいけないもの、ってことですね」

「そう。でもね、忘れてしまっただけじゃいい訳じゃないの。ただ、悲しい気持ちや悔しい気持ちにとらわれ続けなくて生きていかなきゃ駄目よ」

老婆の言葉の意味が父のものと重なり、鍵矢は幼い頃に聞いた言葉の全てを理解した。

「そうか……父さんもこれが言いたかったんだな……」

「え？」

突拍子もない鍵矢の一言に老婆は目を丸くする。

「いえ、なんでもありません。少しだけ昔を思い出したんです」

「そう。あなたのお父さんも立派な方だったみたいね」

笑顔で告げる老婆の一言に照れながら鍵矢は頭をかいた。

(前を向いて、そしていつか自分が誇れるように。か……)

「悩み事はもうよさそうね」

鍵矢の目を見て老婆は安心したように話す。

「はい。ありがとうございました。気持ちが悪くなりました」

(もちろん復讐じゃない。過ぎたことを追いかけて続けるんじゃない。全ては前に進むため。あの日『志井鍵矢』に起こった全ての事を知らなきゃならない。)

鍵矢は手を固く手を握り締め、青い空をもう一度見上げた。

決意（後書き）

次回で病院での話は終わりにします。

内容とは関係ありませんが、個人的な都合により1週間は投稿ができません。読んで下さっている方には申し訳ありませんがしばらくお待ちください。

退院

矢口の提案を聞いてから一夜が明けた。

「名前は決まりましたか？」

「はい。『崎見 総矢』にします」

「……普通ですね。と言つても普通じゃなければリスクが上がるだけですが」

矢口は鍵矢の新たな名前を入力していく。

「後でまとめて確認してもらつとして、残りは……生年月日ですね。どうします？」

「生年月日は2071年7月7日して下さい」

鍵矢は即答する。初めから決めていたことであった。

「事件の日ですか。分かりました……これで登録データは完成です。確認してもらえますか？」

矢口は電子ボードを差し出す。上から順に確認をし、住所欄に目を留める。

「この住所は、どこなんですか？」

「私の知人の自宅です。ここを出たらまずその住所に行ってください。力になってくれると思います」

行き先に少し不安を感じつつも鍵矢は了承した。

「問題なければ一番下の『登録』を押して下さい」

「はい」

迷いなく鍵矢は『登録』を押す。その直後、院長室に置いてある機器の一つからカードが出てくる。矢口は鍵矢にそのカードを手渡す。

「これが新しい君のIDカードです。総矢君」

「……どうも」

受け取ったカードを眺めるが何の変哲もないIDカードだ。

「少し危険ではありませんでしたが、君のIDカードのレベルは少し高い

ものにしておきました」

「IDカードのレベル？」

「民間人が関わることはあまりないので表沙汰にはされていませんが、機密情報にはいくつかのレベルに分けられています。その情報はIDカードのレベルに対応して取得が可能となります。全部でレベルは5段階ありますが、一般の方のレベルは0です。何か功績を挙げたりすることでレベルは上げられます。君の新しいIDレベルは1です」

「1ですか。貴重な情報を手に入れるためにはそれに応じるIDカードのレベルが必要ってことですね？」

矢口は頷き、

「ちなみに私のIDレベルは3です。IDレベルが3を超えると、一部ではありますがその地域の人間のデータ管理する権限が与えられるのです」

「だから俺のデータを……」

「当然政府の人間に知られるとレベルは1になってしまいます。それと、7月7日の事件については私のIDレベルでは一般情報しか得られませんでした」

「あの事件は本当に何もないか、高レベルの機密情報ということですかね？」

（レベル3で……機密情報だとしたらこれを調べるだけで全て分かりそうだな）

鍵矢が考えていると、疑問が浮かぶ。

「ん？でもIDレベルを上げるのは大変なことじゃないんですか？」

「そうです。まっとうな手段であればレベルを1上げるのに普通10年はかかります」

驚くべき年数に思わず鍵矢は噴き出す。

「ですから、そのためにも必ず最初に先程お伝えした住所に向かって下さい。詳しくは向こうで話を聞いた方が早いと思います」

「分かりました。色々とお世話に……」

言いかける鍵矢に矢口はメモを手渡す。

「私の連絡先です。何かあったら病院ではなく直接ここに連絡を入れて下さい」

鍵矢は受け取り、改めて礼を言う。

「お世話になりました。」

「全てが分かったら、私にも話してもらいますよ」

「内容次第、ですよ」

鍵矢は振り返ることなく病院を出て行った。その背中に矢口は一言呟く。

「退院、おめでとう……」

退院（後書き）

病院編これにて終了です。

数少ない読者の皆様、投稿が遅くなり申し訳ありませんでした。
可能な限り早く、と思っておりますが投稿が遅くなることもしばしばあるのでご了承ください。

レイルの店（前書き）

退院した総矢（鍵矢）は医師の矢口に言われた住所へと向かう。

この先、基本的には主人公の名前を『総矢』と書いていきます。

レイルの店

「ここか」

矢口に言われたとおりの住所へたどり着く。入り口の戸には『open』と書かれた看板がかかっているだけのごく普通の喫茶店である。そつと窓から中を覗く。客はいない。カウンター内で新聞を広げている者がいる。無人ではないことを確認し、総矢は店内へと入る。

「ん、いらつしゃい」

店内に入ると同時に、新聞で隠されていた顔が見える。清潔な感じの三十代半ば位の男性だ。

「中央病院の矢口先生に……」

「ああ、君がアイツの紹介者か。俺はレイル。本名ではないがこれで十分だろ？」

矢口という名にすばやく反応した男に総矢は言葉を遮られた。

「俺は志……崎見総矢です。あの、『アイツ』って矢口先生のことですよ？」

「おう、そだ。そうは見えないかもしれないが俺達は同い年だぞ」
総矢には矢口が四十代半ば程度に見えていたために信じられなかった

「その顔は信じてねえな。俺もアイツも43だ、ホントだからな」

「は、はあ。そうなんですか。レイルさんが若く見えたので……」

意外なレイルの年齢に対して本気で言った言葉だったがレイルにはお世辞に聞こえたのか、苦笑している。

「ありがとよ。それでえーと、お前は何がほしいんだ？」

総矢は慌ててカウンターの席に座り、メニューを見て答える。

「今日は暑いし……それじゃレモンティーお願いします」

「違っただろ」

総矢は理解が追いつかず、首をかしげる。

「あんた新人だろ？武器だよ、武器。なけりや仕事なんかできないだろ？」

「新人？仕事？……いや、それより武器って何ですか？」

レイルはその返答を聞いて目を丸くし、言葉を失った。

「おまえ、何も聞いてないのか？」

「詳しいことはココで聞けと言われたんですが」

目をそらし、舌打ちをしたレイルは大きくため息をついた。

「分かった。今お前に文句を言っても仕方がないから、説明してやる。少し待ってな」

「はあ……」

レイルは店の入り口の戸にかけられた看板を『close』に裏返し、鍵をかける。

「一雨きそうだな」

空を見てそう呟き、店のカーテンを閉めていく。いつの間にか雲が空を覆い始めていた。

「お店、閉めちゃっていいんですか？」

「大丈夫だ。俺の気分がのらねえからな」

簡単に言い切るレイルを見て総矢は啞然とする。

「よつし、そんじやついてきな」

レイルに言われ、店のカウンターの中に総矢は入る。案内された部屋はこの店の休憩室のようだ。ソファとテーブル、机と椅子がそれぞれ一つずつ置かれただけの部屋だ。

「狭くて悪いな、座ってくれ」

総矢はソファに、レイルは奥の机に備え付けられた椅子に腰掛ける。

「この店は、表向きは見たとおりただの喫茶店。だが裏の顔も持っていてだな、その裏の顔つてのが『秘密任務紹介店』ってところかな」

「……映画の見すぎですか？」

疑いの眼差しを向ける総矢を無視してレイルは話を進める。

「ここには様々な依頼が来ている。依頼内容も依頼者も様々だ。一

一般人から政府や相当な権力者まで依頼者は幅広くいる」

つい先程まで疑っていたが、思いがけず耳に入ったキーワードに反応する。

「政府の人間の、依頼……そうか。その報酬が」

「そ、もう気付いているみたいだが、そういう方の依頼を成功させることで『IDレベル』を上げるために必要なポイントが手に入る。ま、依頼者がそうでない場合の報酬は大体『金』だな。」

「ポイント？」

「ああ、『P』^{ポイント}を溜めることで自分のIDレベルを上げられるんだ」
「なるほど、ならその政府の方の依頼を紹介してください！」

身を乗り出してレイルに頼む総矢。だがレイルはそんな総矢を見て薄く笑い静かに告げる。

「断る」

レイルの店（後書き）

色々設定増やしていくので『分かりにくい』や『読みづらい』等何かあれば訂正いたします。何かあれば感想やメッセージで教えてください。ただけるとありがたいです。

諸事情により投稿ペースが遅くなります。週一程度になります。数少ない読者の皆様、ご了承下さい。すみません。

武器と転送装置

「断るって、どういうことですか？」

「言葉通り紹介を断るってことだ」

「理由を聞いています。なぜ断るのかを」
身を乗り出し、総矢はレイルに迫る。

「落ち着けて。政府関係の人間の依頼は大抵向こう側からご指名があるんだよ。そんな重要な仕事をどこの誰とも知らない奴に頼むほど馬鹿じゃないからな」

「……どうすれば政府の方々に自分を売り込めるんですか？」

レイルがにやりと笑う。

「そりゃまあ、仕事重ねて名を売っていかないと。最初は誰でも簡単な仕事から始まるもんさ、何でもそうだがな」

「それしか、ないんですね」

「ま、簡単とは言っても結構ヤバイのもあるけどな。仕事中には何かあるか分からないから皆武器を携帯している」

「でも、武器なんて持っていたら目立ちませんか？仕事内容によってはばれるとまずいものもあるんじゃないか……」

「だから大体のヤツはコイツを使っている」

レイルが総矢に腕時計を見せる。当然ながら総矢は首をかしげる。
「腕時計……ですよね？それが武器ですか？」

「まあ見てな」

そう言うとレイルは腕時計についているボタンを押した。と同時に腕時計から光が溢れる。光はレイルの持つ腕時計の上方を照らしている。

「それは一体……」

言いかけた総矢は目を丸くする。光の先から一本の刀が落下し、レイルの手に収まった。

「とまあこういう感じで……」

「説明してください。今のは一体何ですか？」

「簡単に言うと転送装置だ。コイツは超小型化したものなんで武器一つ分で精一杯だな」

「こんなものがあるなんて……」

レイルに手渡された転送装置をじっくりと眺める。

「知らないのは当然だ。これを持っているのはごく一部の人間だけだからな。それにこの装置に関することでさえ情報レベルは1だ。」

「情報レベルが1、ですか」

驚き、手元の腕時計を見つめる。

「まあそういうことだ。下のボタンを押してくれ」

レイルに言われるがまま指示されたボタンを押す。レイルが持っていた刀が先転送装置から発せられた光へとゆっくり進み、総矢達の前から完全に姿を消した。

「という訳で、転送装置を1つやる。いずれ代金は頂くがな。よし、それじゃこつち来な」

総矢はレイルの後をついてゆく。入ってきたドアと別方向のドアを開けると地下へと続く階段が顔を出す。階段を下りながら総矢が口を開く。

「あの、俺は武器なんて今まで何も使ったことないんですけど」

「皆そんなもんさ。色々試して自分にじっくりくるのをここで選ぶんだ」

階段を下りきると大きな部屋に出た。

「まずはコレ使ってみろ」

地下に到着するとレイルは総矢に別の腕時計を渡した。レイルの指示通りに総矢は上のボタンを押し、手元に木製の長い棒を転送させた。

「よつし、それじゃいくぞ」

同様に棒を転送させたレイルが突然総矢に襲い掛かる。

「いくぞって、うわっ！」

レイルの振るった棒が総矢の鼻をかすめる。勢い余って後ろに倒

れる総矢に対し、レイルは笑いながら続けて拳を繰り出す。

「オラ、のんびりしていると怪我だらけになっちまうぞ！」

かわしきれず、レイルの拳が総矢の右頬に当たった。

最初の依頼人

二人は地下から出て、店でコーヒを飲んでいた。時刻は三時過ぎだが外は激しい雨が降っているために薄暗い。

「総矢、お前昔から武器とか使ったことないって言っていたが本当なのか？」

「そうですね。武器が必要な生活なんて考えたことすらなかったんですから」

レイルに殴られた右頬に手を当てながら答える総矢にレイルは疑問を感じていた。

「今までのスポーツとか格闘技の経験は？」

「陸上くらいですね。どうしてですか？」

「いや、それにしても武器の扱いが上手いと思っただけ」

総矢は地下で棒の他に、木刀、トンファーに加えて銃も試していた。銃以外のいずれの武器もかなりのレベルで扱っていた。銃に限っては人型の端を掠めることしかできなかった。銃以外の武器で『訓練』と言われレイルと軽く手合わせを試みたところ、総矢がレイルの攻撃をほぼ全て受けること無く捌いたことにはレイルも驚いていた。思い出すたびにレイルの頭に疑問が浮かぶ。

(戦闘の素人があんなに正確に攻撃を捌けるもんかな……?)

「それで、俺にはどの武器が一番合っていたと思いますか？」

総矢はレイルに尋ねる。

「自分の感覚が大事だったの。他人が見たって分からない感覚もあるし、お前の場合は特にどれがいいとか一概には言い切れないしな」
レイルの返答に納得する。総矢は目を閉じ、地下での武器を使っていた時の事を思い浮かべる。

(一番動きやすかったのはトンファーだな。でも攻撃が考えていたよりうまくできなかつたな。逆に木刀は防御に問題があつたな。とすると……)

「『棒』ですね。今の俺には『棒』が一番あっていていると思います」
「そうか。なら……コイツをやるよ。大事にしてくれよ。」

レイルは総矢に向かってポケットから取り出した腕時計を投げた。総矢は受け取るとすぐに上部のボタンを押し、手元に出してみる。

「え、これ……軽い？」

手にした棒は先程使っていたものと比較すると驚くほど軽い。白く輝く金属の棒は総矢の手にしっくりとくる。初めて手にした自分の武器に見とれている間にレイルはペンを片手に書類を作成していた。書類の記入とデータの入力を終えたレイルは総矢に言葉をかけた。

「ギリギリだった合格だ。これでお前は俺の店の名簿に登録完了だ」

突然の合格宣言に総矢は目を丸くし、動きを止める。

「さっきまでの武器選択って名目上のお前のテストだったんだよ。判断材料は強さと人間性だ。強さはもちろんだが、俺は戦うことで人間性の善し悪しくらいはなんとなく分かるからな」

「強さと、人間性ですか？」

「ああ。強さについては問題なさそうなんだが……人間性に関しては少し不安があるな」

（人間性？俺が？そんなに危険な人間じゃ……）

「人間性って言っても一般的な観点で言う不安ではないからな」

総矢の微妙な表情を見て察したレイルが言った。

「お前は、少し甘すぎるんだ。仕事内容によっては非情にならないこともあるからな……」

「そういうことですか」

総矢は少し安心する。

「じゃあさっそく最初の仕事を紹介して……」

レイルは入り口の窓に映る影に気付き、言葉を止める。カウンタ―を出てドアを開けると一人の少女が立っていた。外は大雨が降り続いていたので、傘を持たない少女は濡れた。

「こんな雨の中どうしたんだ？」

「……がい……けて」

雨で言葉が聞き取れない。レイルは顔を近づけ尋ねる。

「どうした？何だった？」

少女は弱々しく答える。顔は雨で濡れていたが泣いていることはハッキリ分かる。

「……お願い。パパを助けて」

最初の依頼人（後書き）

前回の話の終わりでレイルと戦い始めた感じにしましたが、その部分が異常に長くなってしまいそうだったので省略させていただきました。

投稿ペースが無茶苦茶で申し訳ありません。先まで書いていますが、話の繋がりがからやむを得ず書き直している部分があるので投稿の間にはらつきが出てしまっています。問題ない部分は極力早く投稿します。

少女の頼み

雨に打たれ、少女の着ていたワンピースからは水が滴り、短い黒髪は頭に張り付いて先端から水滴を流し続けている。小学五、六年生くらいの少女は目を硬く閉じ、泣いている。

「とにかく、中へ入りな」

レイルは店の中に少女を引き入れようとしたが、少女はレイルに抱きつき、悲鳴をあげるかのように叫ぶ。

「お願い！パパを助けて！お金なら私のお小遣い全部出すから、だからお願い！」

尋常ではない少女の様子にレイルも総矢も言葉を失った。

「……え〜と……詳しく話してもらえるかな？それだけだと何をどうすればいいのか俺達には……」

レイルにしがみついたまま少女は事情を説明する。

「パパはこの町の遺伝子研究所でお仕事してたの。でもさっき電話が来て……」

『優衣か？パパだ！今研究所にいるんだが……』

そう告げた直後に大きな物音と悲鳴が聞こえ、電話は切れた。何かあったことは明白であったためにすぐに警察に連絡した。が、警察は通話記録を聞かせても取り合ってさえくれなかった。少女の説明を聞いた総矢が当然の疑問を口にする。

「何ですかね？これ聞いたら何かあったってことくらい分かりそうなのに」

「総矢、お前のIDちょいと貸せ」

少女を何とかなだめて店の中に入れたレイルは唐突に総矢に向かって言った。レイルが総矢からIDカードを受け取る。受け取ったレイルはすぐにカウンターの中心にあるPCに接続し、調べ始める。

「やっぱりか。警察は取り合わないんじゃない。取り合えないんだ」
そう言いながら総矢と少女に画面を見せる。

「遺伝子研究所における異常発生について

午後2時12分：実験動物が暴走を開始したと報告を受ける

午後2時17分：全ての動物を一匹ずつ駆除するのは困難且つ危険と判断。

爆撃により施設ごと駆除を行うことを決定

午後2時20分：バリケード作成、付近の住民の避難誘導の開始を通達

尚、本件については、警察は政府直轄の特殊部隊の指示に従い、爆撃開始まで付近の安全確保のみを行わせることとする」

「なるほど、そういうことですか。でも、いくら数が多いからと言っても銃を使えば簡単に鎮圧できるんじゃない……」

「1匹逃がしただけでも大問題だからな。この方法が手っ取り早くていいと判断したんだろ」

レイルはすぐに名簿を開く。事件の深刻さに、少女はまた泣きそうになる。

「優衣ちゃん……だっけか？少し待つてな。すぐに人を呼ぶ。大丈夫、君のお父さんはきつと助かる。……よし、コイツなら……」

携帯を取り出し、名簿のうちの一人に連絡を取る。

「緊急の仕事を頼みたいが……そうか、今そんなところにいるのか。なら他をあたる」

通話が終わる。その後も数人に連絡をとるものの都合よく適役は見つからないようだ。

「クソツ……間に合いそうな奴がいねえ」

苛立ちを隠せなくなってきたレイルに総矢が声をかける。

「時間がないですよね？俺に行かせてください」

「あ？寝言は寝て言え。未経験のお前なんかじゃ死ぬぞ」

「無駄に時間を減らすよりはいいんじゃない……」

「無駄に命を減らす必要の方がねえだろう」

名簿を見ながら話すレイルに対し、総矢は引き下がらなかつた。「間に合わなかつたらば元も子もないだろ！俺に行かせてください！」

強く言う総矢をレイルは睨みつける。正面からその視線を受け、総矢は睨み返す。

「……なんですか？」

「死ぬ覚悟でもあるっていいいたいのか？」

「そんなものありませんよ。生きて帰る覚悟しかありませんよ」

数秒の沈黙。レイルと総矢が睨み合う状況に少女はどうしていいのか分からずに二人を交互に見ている。総矢の目を見ていたレイルはため息をつき、頭をかきながら諦めたように言う。

「分かった。それじゃこの仕事はお前に任せてみる。……ただし、死ぬなよ」

「ありがとうございます。それで場所はどこです？」

「ここから車で大体15分程だ。緊急事態の上、少し遠いから車出してやる、少し待ってな。それと、コレも持って行け。あと、譲りやんはここにいろ」

レイルは総矢に先程使っていたものとは別の携帯を投げ渡す。総矢は慌てながら受け取り、少女は小さく返事をした。

「気をつけて……」

店の外へ向かう総矢に少女が弱々しく言うと、総矢は笑顔で頷いた。

初仕事？

激しい雨の振る中、レイルは車を走らせる。

「俺は店に戻って情報を集める。IDは借りておくぞ。使えそうな情報があれば連絡入れるからな」

「分かりました」

レイルは尋ねる。

「今更だが怖くはないのか？」

「怖いですよ。でも何もしないであの子の前で父親を見殺しにすることを考えるより怖くはないです」

「ご立派だな。本当にそれが本心か？」

「はい」

雨はますます酷くなっていた。

「着いたぞ。こっから先はお前1人だ」

「ありがとうございます。それじゃ行つてきます」

とは言ったものの塀は高い。正面門では警察がバリケードを作っていたために入ることができなかった。仕方なく塀を越えることにしたが、高さ約五メートルかつ手をかける場所もない金属製の塀を上るのは困難であった。だが、総矢は棒を手元に転送させると、棒を踏み台にし、高く跳んだ。何とか塀に手をかけてよじ登る。塀の下に落ちた棒を再度手元に転送してから塀の内側へと飛び降りる。

（雨で視界が悪いな。これじゃ何かいたとしても先に見つけるのは大変だな。）

総矢は雨の中を走り始めた。建物沿いに走っているとすぐに入口が総矢の視界に現れた。念のため周囲を確認すると、入口の脇に『G棟』と大きく書かれた看板が立っている。取りあえず中に入ろうとした総矢は入口のガラスが派手に破壊されていることによく気がつく。そしてその側には頭から血を流し恐怖で引きつった表情のまま死んでいる研究員が倒れていた。研究員の男性の腕や足が無理

に折られたことが容易に想像できるほど妙な角度になっていることから相当な力を持った『何か』がいることがうかがえる。

(これだけの力もつヤツが多くいたら厄介だな。)

総矢は研究員の目を閉じ、黙祷する。黙祷を終えると建物の内部へと入っていった。内部は酷く荒らされ、明かりはほとんどない状況だった。そのため、総矢が先に『何か』を見つけたのは偶然に他ならない。

(アイツらは一体何をして……)

部屋のうちの一つに三匹の巨大なゴリラが集まっていた。部屋の外からそつと様子を伺っていたが気付かれた様子はない。獲物が隠れていると思つてか部屋を荒らしている。

ピリリリリ

「っ!?!」

携帯が突然鳴り響く。だがそれは総矢のものではなく、部屋の中から聞こえたものであった。三匹のゴリラは動きを止めて音の鳴るほうを凝視する。音はすぐに聞こえなくなったが、ゴリラたちは音の鳴っていたロツカーに向かいゆっくり歩み寄る。先頭の一匹が大きく吼え、ロツカーを思い切り殴る。大きな音を立てて変形するロツカー。と、その時

「うわあああああ!」

中から男の悲鳴が聞こえる。誰かがロツカーに隠れていたようだ。部屋の中の三匹は皆ロツカーに夢中だった。故に総矢の一番近くの巨体の後頭部に一撃を入れて倒れこませるまで、ゴリラたちは総矢の存在に気付くことはなかった。

「っよし!まず一匹!」

振り返った瞬間、二匹目の顔面にも思い切り振るつた棒が当たる。

「二匹目!次!」

残りの一匹が怒り狂い総矢に飛びかかる。冷静さを欠いた猛獣の攻撃は速さはあるものの単調であるために総矢は容易にかわし、力ウンターで顔面を思い切り棒で打ちぬいた。三匹は倒れ、動かなく

なった。頭部を思い切り殴られ、死んではいないのかもしれないが当分は襲ってこないと思われる。酷く変形したロツカーを軽くノックする。

「もう大丈夫です。コイツらは当分目を覚ましませんよ」

総矢の言葉を聞き、ゆつくりとロツカーの扉が開かれた。中から出てきたのは中年のメガネをかけた男であった。

「助かった。誰だか知らないが感謝するよ。早く何とかここから脱出しないと……」

男性は総矢に簡単な礼を言うと部屋を見回し、そのまま立ち去ろうとする。

「待つてください。教えてもらいたいことがあるんです」

「そんなこと外に出てからでいいだろう。とにかく早く外に……」

怯えて混乱する中年男性。総矢は彼の腕を掴む。男はしばらく抵抗していたが、総矢の手は振りほどけなかった。総矢から逃れることを観念した男に再び言葉をかける。

「落ち着いてください。俺は色々知りたいことがあるんです」

初仕事？

「そうですか。つまりはよく分からないということですね？」

「すまない。情報がなくて……」

男は知りうることを話した。だが最終的に動物達が暴走した原因は『分からない』という結論に達していた。

「この施設で人が残っていたいそうな場所に心当たりは？」

「動物を実際に扱っていたのはここ『G棟』の他には『H、I棟』がある。その2箇所はもう……」

途中で言葉が途切れる。

「この騒動の中心はことあと2箇所つてことですか。その他はまだ無事かもしれませんね」

「ああ。だがもう建物から出て暴れまわっていることも考えられる。それにこのゴリラのように他の動物達も大きかったり、素早かったりするから『G、H、I棟』以外でもかなり危険だ」

目の前に倒れている動物はゴリラにしてはかなり大きい。

「相当でかい、ですよ？……それと、この建物の入口は既に破壊されていました」

それを聞いた男は困った表情をする。総矢はさらに話を進める。

「この施設の地図、あるいは全体図とかないですか？」

男性は社員証を裏返す。裏のボタンの一つを押すと立体図が浮かび上がる。

「あ、ああ。これが全体図だ、内部も見られる。ただし建物だけだな」

総矢は大まかに自分の位置、他の建物の位置を頭に入れる。全体を見ていると端に何も書いていない建物が一つあるのがある。気にかかり、男に尋ねる。

「ここ？ここはこの施設全体の管理システムのある場所だ。社員でそこに行く方はほとんどいないはず。研究施設と関係がないから特

にアルファベットも書かれていないんだ」

総矢の携帯が鳴る。

『もしもし、レイルだ。総矢、無事か？今やっと店に戻った。あの子の父親の顔写真のデータをそっちに送る。確認しておいてくれ』
「分かりました。何か分かったこととかないですか？」

『そこにいる動物は大きさ、力、素早さなど皆普通の動物に比べて危険度が高い。様々な動物の遺伝子をいじって強力にしたり、知性を高めたりする研究も行われていたらしい』

横で聞いていた研究員は倒れている化物を見て、総矢に話す。

「遺伝子操作で筋肉の弱体化、脳の問題を抑えるための研究をして
いたんだ……」

『そこにいるのはその施設の研究員か？暴走の原因は一体……』

「それはさつき俺が聞きました。この人は知らないようです」

総矢はレイルから送られた画像データを確認する。そしてそこに写っている男性を、横にいる男に見せて尋ねる。

「この方を知りませんか？それとどこで働いていたかも分かりませんか？」

男は画像を見ると、ハツとして答える。

「有馬？私の同期だ。アイツは植物系の実験担当のハズ……確か『D棟』だ。ってまさか行くつもりか？」

「はい。随分奥の方ですね。でも植物系ってことは生存の可能性は十分ありますね」

「本気か？……どうしても行くなら脱出の際はここにある裏口から……」

男が言い切る前に電話口からレイルの声が聞こえる。

『裏口からの脱出は無理だ。裏口付近のバリケードはもう完成している。脱出口はもう正面門しかない。そこはまだ武装した警官隊が守備しているだけだ。とは言っても正面門もバリケードが完成するまでそんなに時間は無いがな。』

レイルの発言に少し焦りを覚えつつ、総矢は尋ねた。

「完成までどれくらいですか？」

『このペースなら1時間つてとこかな。バリケードが出来次第、爆撃開始だよ』

横で聞いていた男が通信に割り込む。

「ま、ま、待ってくれ。バリケードつてなんだ？爆撃つて一体？」

総矢は簡単に状況を説明する。

「何てことだ………だったら一刻も早くここを出なければならぬじゃないか！ここからなら正面門の方が近い。こっちだ、ついてきなさい」

男は建物の外へ向かって歩き出す。だが総矢は男の後に続こうとはしなかった。

「いえ、俺は予定通り『D棟』に向かいます」

初仕事？

「何を言っている？時間が無いんだ。爆撃に巻き込まれるぞ！」

「大丈夫です。間に合います」

もちろん根拠はない。だがそう言い切る総矢の真剣な表情を見て、男は総矢を止めることを諦めて社員証を差し出す。

「使いなさい。私がついて行っても邪魔になるだけだ。正面門はここからそう遠くない。私は1人でも脱出できるから……」

「ありがとうございます。気をつけてください」

社員証を受け取り、総矢は建物の入口で男と別れ、施設の奥へと向かう。相変わらず激しい雨が降り続けているため視界は悪い。その中を『D棟』へと向かい走り出した。

その頃、レイルは店とある人物と、連絡を取っていた。

『何？私今寝てただけど』

「緊急で入った仕事を新人が1人でやってる。だがどうにも状況がよくない。サポートに回ってくれないか？」

『私の専門分野は戦闘じゃないのよ。他を当たってよ』

「どいつもこいつも今は無理だった。だから仕方なくここにいた新人に行かせた」

『……それ、おかしくない？いくらなんでも全員が対応できないなんて……』

レイルは相手のその言葉で初めて気付いた。

「……確かに妙だな。慌てすぎて気が付かなかったな」

『まあいいわ。行ってあげるわ。なんだかコレのテストには丁度良さそうだし』

「……分かった。無理言つてすまない……」

『それで場所はどこ？』

「遺伝子研究所だ。リミットまで大体だが1時間切ってるから急い

「でくれよ」

そう言つとレイルは電話を切り、首を傾げる。

「これで、まあ大丈夫だろ……。それにしても、どういふことだ……」

「あつた。『D棟』、ここだ」

総矢は男に貰つた社員証の地図のおかげで迷ふことなく目的地に到着した。入口は先程目にした『G棟』と同様にガラスが破壊されている。だが、入口付近で防火シャッターが下ろされ、外からの進入ができなくなっている。何とか入ろうとシャッターに攻撃を加え続ける二つの巨体が入口の外からでも確認できる。

「今度は熊かよ……とんでもない動物園だな……」

文句を言いながら熊に気付かれないよう建物に沿って歩く。一周するが中に入れるような場所は見当たらない。窓にも格子が張られて入れそうにない。困つた総矢は再度地図を確認し、中に入る方法が無いか調べる。

(……これは？ケーブル整備用のトンネルか！ん？結構いろんなこと繋がつてる。なんだ、最初からコレ使えばよかつたな)

建物内部から地下に伸びた通路のようなものがあり、それは総矢がいる所から近くにある全ての棟だけでなく、正面門に近い『A棟』の方にも伸びている。すぐに近くにあり、シャッターの閉まつていない『I棟』に入り、地下へ続く階段へと向かつた。地図でもう一度内部に繋がつていることを確認し、総矢は扉を開けて階段を下りる。社員証がカードキーとなつていたために、貸してもらつた男に心の中で感謝を告げる。

「急がないとな……」

総矢は慎重にはしごを降りる。下から漏れる弱々しい明かりは総矢の降りるはしごまでは届かないため、手探りで何とか下まで降りた。弱々しい明かりが総矢の目の前の太い配管やケーブルの束を照らしている。

(もう少し明かりがあってもいいもんじゃないのか?)

などと不満を感じつつ、総矢は先へと向かう。建物の内部へ続く扉がすぐに総矢の目の前に現れる。扉の鍵は『I棟』と同様に社員証で問題なく開錠できた。出口を見つけ、静かに扉に近づく。そつと扉を押し開け、向こう側の様子を伺う。

(何もいない……誰もいない、か)

扉を一度閉じて地図を取り出す。現在置と屋内の部屋の位置を確認し、総矢は人がいそうな場所に目星を付ける。

(暴走が始まった時間から考えると大体の人間は1階の植物のある部屋か2階の研究室にいたはず。そこから逃げ出すとしたらこの階段を使うだろうから……)

状況を想定し、順に研究者達の足取りを推測する。

(3階の会議室か4階の休憩所。……いや、扉の造りからして会議室が妥当か)

総矢はそう結論付けると三階へ上がる階段へと向かう。

初仕事？

建物の内部には爪で引っかいたような傷や所々赤いシミがあった。だが、倒れている研究者の姿はなかった。

(……ここに死者はいないのかな？皆ただの怪我だけで何とか逃げられたのか？)

ふと疑問に感じた直後、総矢の前方に白衣を赤く染め、曲がり角の壁にもたれかかっている女性を見つけた。総矢は急いで駆け寄り声をかける。

「大丈夫ですか？しっかりしてください！」

肩に手をかけ女性の顔を覗き込んだ。その瞬間、女性は既に死んでいることに気付く。驚いた総矢は思わず後ろに飛び退く。飛び退くと同時に黒い物体が物凄いスピードで総矢の鼻先を掠めた。黒い物体は総矢の目の前を通り過ぎ、大きな音を立てて壁にぶつかる。

「え？」

壁の方を向くと起き上がった黒い犬が口から血を流しながらをこちらを睨んでいる。口元の血は人間を襲ったときに付着した血液と見て間違いない。

(コイツ、隠れていたのか？罠を使ったのか、まるで狩りだな)

襲われた直後なのに冷静でいられる自分に感心しつつ、もう一つの可能性に気付き思わず後ろを見る。

(さてよ、単独とは限らな……)

総矢のCANは当たっていた。振り返った瞬間、もう一匹の犬の大きく開けた口が総矢の目の前に迫っていた。思い切り体を捻ることで何とか避ける。だがバランスを崩し、総矢はその場に倒れた。

「しまっ……」

今度は先程正面にいた犬が総矢に迫る。倒れた総矢は当然逃げることはできなかった。総矢の右肩に牙が深く突き刺さる。鋭い痛みで総矢は表情を歪める。犬は頭に喰いつこうとしたが、体を無理に

起こすことで総矢は頭への傷を何とか避けていた。

（まずい！これじゃ……）

総矢は慌てて左手で犬を殴りつける。このままでは肩を喰いちぎられるという恐怖を感じながら必死に抵抗する。総矢の拳は偶然にも犬の目に強く当たった。犬は悲鳴を上げ、総矢の肩から離れ、距離をとる。

（やばい！右手に力が……これじゃ殺される……）

立ち上がり右肩を抑える。総矢は身の危険を感じつつも以前に感じたことのある感覚が自分に目覚め始めていることに気付く。犬の一匹が勢いよく飛び掛る。正面から突撃してくる犬に対し、総矢は棒を突き出す。しかし犬は素早く総矢の突きを避け通路の壁に足をかけ、反動を利用して飛び掛る。

「分かつてる。この突きはただの罠だ」

呟きながら犬の動きを先読みしていた総矢は突いた棒をそのまま横へ振るう。大きく開いた犬の口に見事に直撃し、その一撃で犬の牙はほぼ全て折れた。犬は倒れながらも、痛みに苦しみ暴れていた。もう一匹は総矢の危険さを嗅ぎ分けたのか既に逃げ出していた。

（起き上がって襲ってくる前に逃げておかないと）

総矢はすぐに会議室に向かって再び走り出した。その後、会議室までは何事もなく辿り着けた。いつの間にか先程の感覚は消え、痛む右肩を左手で抑えていた。扉には総矢が通ってきた通路と同様に傷がいくつか付いている。動物達が中に入ろうとしていたのだろう。（つまり、この中には人がいるはず……）

総矢はノックをして、中に呼びかける。

「中に誰かいますか？今ここには動物達はいません。中に入れてください」

中で物音がした後、扉が開いた。

「早く入ってください」

初仕事？

総矢が中に入ると、二人の男性がすぐに扉を閉め、複数の机を扉の前に移動させる。

「怪我しているじゃないですか？早く手当てを」

「すみません、ありがとうございます」

会議室に避難していた人間は全部で七人。その中の一人が総矢に応急処置を施す。応急処置を受けながら避難者達の顔を順に見る。避難者達の中に画像データで見た顔の男性を見つけ話しかける。

「有馬さん、ですね？あなたの娘さんの依頼で助けに来ました」

避難者達は総矢の発言に驚き、目を丸くする。総矢は何とか生き延びてきた避難者の一人と思われるのだ。

「助けにつて、一人で？」

「怪我しているじゃないか？」

「無理よ。外には危険な奴らがたくさんいるのよ！逃げられないわ！」

生存者達は次々と総矢に悲観的な言葉をぶつける。負傷して辿り着いた総矢を見ると不安が更に高まる。

「時間がないんです。早くここから脱出しないと時間が……」

言いかけて総矢は言葉を止める。

（これ以上パニックになるとどうしようもなくなる。ここで言う訳にはいかないな）

総矢はレイルすぐに連絡を取る。

「レイル？聞こえるか？目的の人物を見つけた」

『おお、そうか！で、その人は無事か？』

「無事です。ただ、ここに辿り着くまでに俺が結構怪我しました。その上生存者が7人いて、俺1人じゃ護衛しながらここ脱出するのは正直厳しいんですが……」

『そんなことだろうと思ってそつちに1人送った。多分それで大丈夫

夫だ」

「どんな人です？」

『女だ。特徴は……多分ジーンズはいている』

電話越しに聞こえるレイルの言葉に質問を返す。

「ジーンズ？いや、そういうのじゃなくて人としての特徴は……」

『特徴って言われてもな……見れば分かると思うぞ。店を出る前に俺が渡した携帯でアイツにはお前の居場所は分かるから合流は問題ないはずだ。それまでに少しでも正面門に近づいておけ。……それと、バリケード完成までもうホントに時間がないからな』

レイルはそう告げ、電話を切った。通話を終えた総矢は生存者達に呼びかけた。

「すぐにもう1人来ます。正面門に向かうの一番近いルートを教えてください。合流するまでに少しでも正面門に近づきましょう」

「もつとちゃんとした助けが来るまでココに籠城した方がいいんじゃないのか？」

画像で確認した少女の父、有馬が総矢に尋ねる。

「……ここには長くいられないんです。待っていても助からないんです。……詳しくは話せませんが本当に早く脱出しないと駄目なんです」

パニックを恐れて言いだせない。

「それだけでは納得できないな。何か理由があるようだが、内容を話してくれないと我々だって……」

(ここで黙っていると、皆会議室から動いてくれそうにもないな。

……仕方ないか)

総矢は諦めて事情を説明した。始めは誰もが動揺していたがパニックにはならなかった。総矢が言葉を続ける。

「皆さんは何としても俺が守りますから、信用してください。行きましょう」

そうは言うものの総矢の傷を見て、不安は高まる。だが会議室に残ることは絶望的なことをよく理解できたために、生存者達は正面

門に向かうことを決意した。

(何とか全員無事に脱出しないと……)

頭で考えながら扉に向かい総矢は歩き始めた。その時だった。

(本当に大丈夫なのか?)

(やっぱり外に出るのは危険じゃ……)

(怖いなあ。何か来るんじゃないのか。いや、もう外に何かいるかも……)

総矢は後ろを振り返る。生存者達の不安そうな顔が窺える。もちろん誰も声は出していない。

(……何だ?今のは?ん……これは、外に何かいる?)

感じた疑問をすぐに忘れ、扉の向こうに注意を向ける。

初仕事？（後書き）

おまけ

通話後

レイル

「特徴か……目立った特長ないんだよなアイツ」

優衣

「髪型とか何かないの？」

レイル

「最後に直接会ったのがいつか分からないから……今どっなってんだろ」

優衣

「性格は？」

レイル

「普通」

優衣

「……レイルさん……」

レイル

「そんな冷たい目をしないでくれ……」

初仕事？

総矢は会議室の扉に近づくと、静かに押し開け外の様子を窺う。僅かに開けた隙間から外には先程総矢から逃げ出した黒犬が待ち構えていた。どうやら総矢の流した血の跡を追ってきたようだ。さらに、その隣には仲間の二匹がいる。

（いや……三匹じゃない。さっきと同じように……今だ！）

総矢は勢いよく扉を押し開けた。扉が反対側に隠れていた犬にぶつかる。扉にぶつかって怯んだ犬に対し会議室を飛び出た総矢は思い切り手にした棒を振り下ろす。頭の骨が砕ける鈍い音と共に犬は倒れた。

「よし。鍵を掛けて下さい！」

残りの三匹に向き直る前に総矢は会議室の扉を閉め、中から鍵を閉めるように指示する。三匹の犬は既に総矢に向かって突進してきた。後ろを向いている状態の総矢には攻撃ができないと考えてのことであった。

「……仲間さえ囿に使うのか。頭がよすぎるのも問題だな……」

振り向きざまに振るった棒が先頭の犬を打つ。総矢の狙い通り、殴られた犬は隣の犬とぶつかった。向かってくる残りの一匹に対し、回し蹴りを放った。犬は体制を低くして回し蹴りを避け、総矢に噛み付く。だが、総矢にその鋭い歯が届くことは無かった。先程振るった棒の反対側の先端が犬の口に深々と突き刺さっていた。総矢が手にしている長い棒の先端は尖ってはいるが、硬い物質でできているために力技で押し込めば生物の体を破壊することは困難ではない。

「悪いな、そうすることも分かっていた」

動かない犬に対して静かに言うと、突き刺さった棒を引き抜いた。体勢を整え、再び襲い掛かる二匹に、今度は総矢自身も突っ込む。

一匹は正面から噛み付こうと口を開け、もう一匹は方向を変え、真

横へ回り込む。

「はっ！」

総矢は正面に棒を突き出す。突き出した棒が先程同様犬の口に突き刺さる。直後に、総矢は棒を思い切り引き抜く。横から飛び掛る犬の攻撃をしゃがんで避けると、犬の後ろ足を掴んだ。総矢は、足を掴まれて体勢を崩した犬の首に一撃を加えた。

「……これで、大丈夫かな」

辺りを見回し、何もいないことを確認する。

「もう大丈夫です。出口に向かいますよ」

総矢達は、会議室を出た後は何事も無く『D棟』の一階に辿り着いた。途中、総矢は入口のシャッターの外には巨大な熊がいたことや、地下のケーブル整備用のトンネルを通ってきた事を話し、その出口からの最短脱出ルートを尋ねていた。

「それなら、地下のケーブル整備用のトンネルを使って正面門に近い『A棟』まで向かうのが一番いいでしょう。地下には何もいなかったんですよね？」

「はい。……とは言っても俺が通ってきた部分に限りますが」

地下に入り込んでいた動物は今の総矢達にとって大した脅威になるものはいなかった。通風孔から入り込んだと思われるマウスは総矢達を見つけると逃げ出してしまっていた。一般のものに比べて大きさは確かにあるが、それでも人間を恐れているようだ。総矢達は薄暗い地下のケーブル整備用の通路を足早に『A棟へ』向かう。

「少し離れて待っていて下さい」

総矢達は『A棟』の一階に辿り着いた。地下ケーブル整備用トンネルへの階段に続く唯一の扉を総矢は静かに少しだけ開け、様子を窺う。

（……何もいない。気配も感じはしない。だが、何か嫌な感じがする……）

総矢は自分の直感を信じ、静かに扉を閉めた。

「少し待っていてくれませんか？」

待機していた研究者達に静かに告げた。

初仕事？

総矢は次に扉を閉めたまま耳を押し当てる。しかし、しばらくしても何も聞こえない。思い過ごしかと思いい、総矢はもう一度静かに扉を開けて目を凝らす。

(やはり何もいない。……気のせい、だよな……)

念のため総矢は一人で扉の先を偵察することにした。『A棟』は総矢がこれまで見てきた建物と違い、入口が壊されることも無く、中には傷付いた研究者達もいない。

(入口に近いからか？動物達の気配がまるで無いな……)

だが、総矢は『A棟』の入口の脇で一人の男性の亡骸を見つける。その男性は総矢が『G棟』で出会い、社員証を借りた中年男性であった。思わず歯を食いしばる。

(何てことだ……クソッ！……ん？何だ……何かおかしい)

男性の遺体は後頭部を殴られた跡しかなかった。普通、動物に殺されたのであればもっと様々な箇所打撲や出血が見られるはずだが男性に見られる外傷は頭のだけであった。疑問に感じつつも周囲に何もいないことから安全と判断し、総矢はすぐに一行の下へと戻った。皆を連れ、出口に向かう。激しい雨が降り続いてはいるが、『A棟』からは正面門が何とか視認できた。

「あそこだ。もう少しで我々は助かるぞ」

「ここまでくれば何とかなるわ」

「ありがとう。君のおかげだよ」

口々に喜びを口にする生存者達。総矢が最初に出会ったときに比べ、その表情はとても明るい。

「はい、もう少しです。では向かいますよ……」

言いかけた総矢は背筋が凍るような寒気を感じる。冷たく、真っ黒なその意志は『A棟』の中から総矢達に向けられていた。

「走れ！正面門に向かって思いっきり走れ！」

叫ぶと同時に総矢は正面門に背を向けて、武器を構える。慌てる総矢の様子から、危険が迫っていることを理解した生存者達は全力で駆け出した。

（なんだ？なんなんだ？この感覚、普通じゃない……何が来る？）

『A棟』の四階の窓ガラスが割れ、総矢の正面に落ちる。落ちたのはガラスだけではない。内側に取り付けられた金属製の格子が大きく変形した状態で共に落下した。壊れた窓のところに人影が見える。人影は壊れた窓から総矢を見下ろしている。

「もう残ってるヤツは全員死んだと思っていたけど、まだいたのか」
呟くと、四階からその人影は飛び降りた。もちろん総矢にはそんな呟きは聞こえない。

（人か……？そんな高さから飛び降りたらいくらなんでも……）

思わず総矢は心配した。だが、壊れたのは地面の方であった。大きな衝撃と共に、アスファルトは揺れ、人影が飛び降りた場所は少し陥没し、周囲にはヒビが入っている。飛び降りた人影の正体は、若い茶髪の男性であった。背は高く、体つきも総矢よりしつかりしている。だが、どう見ても普通の人間だ。とてもじゃないが金属製の格子を破壊できるようには見えない。男性は立ち上がると総矢に話しかける。

「あんた、さっきこの研究者達と一緒にいただろ……ああ、アレか」

総矢の背後で正面門に向かって走る生存者達を見つけ、目が鋭くなる。側に落ちているガラスの破片を拾い、走る生存者達の一人に狙いを定める。

「逃がしてたまるかよっ！」

掛け声と共に男性は破片を思い切り投げる。破片はまっすぐ飛び、男の足に直撃。するはずだった。だが、男に当たる遙か手前でガラス片は総矢が左手で持った棒に直撃し、砕けていた。

「邪魔すんなよ。お前はここ人間じゃなさそうだから殺さずにいてやるつてのに」

総矢を睨む目がさらに鋭くなる。恐れることなく総矢は男性に向
かって告げた。
「俺には、あの人たちを守るって約束があるんだ」

初仕事？（後書き）

予定していたより『初仕事』の部分が長引いてしまいました。

初仕事？

「先に言っておくが、ここは爆撃される。時間が無いからあんたも早く逃げたほうがいい」

総矢は男性に告げる。男性は驚きもせず、笑い出した。

「ハハハハッ！なるほど、まあそりゃそうか……」

息を整えると男性は総矢を睨むと今度は真面目な顔で話す。

「俺ア死ぬ気はねえぞ。奴らを逃がすつもりもねえ。邪魔するんならお前も殺すしかねえよな」

「勝手なことを言うな。俺も死ぬ気は無いし、あの人たちを死なせる気も無い」

総矢は武器を構える。

「俺に逃げろと言いながら戦う気満々じゃねえか」

「そうでもしないとあの人たちを殺すつもりなんだろ？」

「分かってるじゃねえか。けどこうすりゃ防ぎようがねえだろ」

男性は強く地面を蹴り、七、八メートル程跳び上がり、手にした数個のガラス片を生存者達に向かい全て投げつける。

(アイツ、ホントに人間か？ってしまった！これじゃ……)

総矢は振り返り、生存者達に向かって叫ぶがその声は必死に走る生存者達には届かない。ガラス片が生存者達に迫る。思わず総矢は顔を背ける。男性は無表情のまま生存者を見つめながら着地した。生存者達は正面に自分達の方に銃を向けている女性が現れ、思わず足を止める。女性は生存者達を撃つことはなく一言だけ告げた。

「伏せてっ！」

生存者達が伏せると同時に、数発の銃声が鳴り響く。

「なかなかいい出来ね。思った以上に反動が小さくできたわ」

女性は右手に持った銃を感じしながら見つめる。生存者達はゆっくり顔を上げる。

「ホラ、もう平気よ。速く立って、行きなさい。ちよっとばかりバ

リケード壊しちゃったから今なら出れるわよ」

総矢は銃声のした方向に顔を向け、そっと目を開ける。一人の女性足早に駆けてくるのが見える。

「なんだ？アレはお前のお仲間か？また邪魔しやがって……」

総矢の背後から男性の声が聞こえる。男性も総矢に攻撃せず、女性を見ている。

「さて、間に合ったみたいね。あなたがレイルに仕事任された新人さん？」

総矢に話しかけたその女性は背が高く、GパンにTシャツという男勝りな格好をしていた。だが、短い髪を左手でかき上げる姿はどこか気品を感じさせる。

「はい。崎見総矢です」

「自己紹介は後。来るわよっ！」

男性に背を向けたままの総矢を横に突き飛ばす。男性が二人の間に脚を振り下ろす。

「おい、ねーちゃんよお。人の邪魔しやがって。あんたもコイツの仲間だな？」

「そうね。そういうことになるわね」

「ならテメエもだっ！」

男性は総矢ではなく女性のほうへ突っ込む。四階から飛び降りても無事な強さを持った脚力は、男性に尋常ではないスピードでの移動を可能にしていた。先程の蹴りを避けた女性を軽々と先回りしている。

「これで……終わりだ！」

思い切り脚を振りぬく。だが、男性の脚は何にも当たりはしない。見事な反応で男性の蹴りを伏せて避けた女性は男性の額めがけて右手の銃を撃つ。男性も素早く腕で銃弾を弾き飛ばし、身を守った。総矢はそれを見て『A棟』入口で死んでいた男性を思い出す。

（銃弾を防ぐほど硬い腕……？あの人の頭部の傷……殺したのはコイツか？）

「結構な速さと硬さね。それはここで行われた人体実験の成果かしら？」

女性は再び総矢の隣に立つ。女性の言葉を耳にした男性は激怒して女性に叫ぶ。

「お前、この一員か？手を貸したりしていたのか？」

「その反応からして、人体実験って本当なのね」

女性は顔を曇らせる。総矢は二人の会話を聞いて目を丸くしていた。

「……人体、実験……？」

「カマかけやがったな。まあいい、なら教えてやるよ。俺は無理矢理体をいじられた化物だ。そしてここでの実験で唯一成功した人間だ」

「やっぱり、被験者はあなただけじゃないのね」

「当たり前だ！それからな、この動物達が人を襲う理由は俺と同じだと思うぜ。野生の本能だけじゃねえ！恨んでるんだよ、人間を！自分達のいいように使って、試して、殺して……そんなことされりやどいつもコイツも人間を恨むに決まってるだろうが！」

総矢は男性の叫びを呆然と聞いていた。今の総矢にはそうすることしかできなかった。

初仕事？

男性の叫びを聞き、総矢の隣に立っていた女性が静かに話す。

「あなたは動物達の代弁者になったつもり？ 自分も実験台にされたからって……」

「俺は俺自身の復讐しているだけだ。俺は実験に成功した、成功して力を手に入れた。だが……」

言葉が途切れる。男性は歯を食いしばり目を見開く。

「命を何とも思ってもいねえこの奴ら何ぞ、生きてる価値なんかねえんだよ！」

男性の話を黙って聞いていた総矢が口を開く。

「だからってどんな理由があってもお前が人を殺していいことにはならないだろ……」

「分かってんだよ！俺はこの連中と同じで命を簡単に奪う極悪人いずれ地獄に落ちてやる。だがこの人間には俺が地獄に落としてやらなきゃ気が済まねえ！」

男性は目に涙を浮かべている。総矢の隣にいた女性が総矢に一言告げた。

「あなたが決めなさい。どうするのか。私はあなたのサポートに来たの」

総矢は一步前に踏み出し、うつむきながら答える。

「分かってる、アンタは手を出さないでくれ。……俺が、やる……」

総矢は棒を構えてゆっくりと男性に歩み寄る。男性は身構えると、地面を思い切り蹴る。

（ごめんな、こんな兄貴で。お前の命を奪った奴らと同じ人殺しになっちまった。お前は天国に行ったんだろうが、俺はそっちには行けない。でもその分、お前を苦しめた奴らは苦しめて苦しめてそれから地獄に送っておいてやるからな）

男性の考えが、総矢の頭に流れ込む。

「んなことしても……お前の弟が喜ぶわけねえだろうがっ！」

叫びながら総矢は棒を振るう。自身のスピードが速すぎたため、男性は先読みした総矢の攻撃を避けることが出来なかった。左手で防御する。実験で強化された男性の腕は堅く、総矢の攻撃は弾かれた。それと同時に男性は右手で総矢の脇腹を殴る。既に傷ついていた箇所だっただけに総矢へのダメージは大きい。だが総矢は倒れることなく再び武器を構える。

（何だ？弟なんて口にはしてないはずだ。コイツ、俺の頭ん中が分かるのか？）

「お前は、お前がやらなきゃいけないかったことは……そんなことじゃないだろうっ！」

再び襲い掛かる動きの早い男性に対し、再び総矢は先読みして攻撃を繰り出す。先程同様避けることが出来ず、左手で総矢の攻撃を防ぐ。

「いちいちうるせえ」

言いながら男性も先程と同じ箇所を今度は鋭く蹴った。総矢の口から血が溢れる。それでも総矢は地面に膝すら着けずに再び武器を構える。

（復習なんてしてもアイツは生き返りはしねえさ。けどよ、怒りを、悔しさを、悲しみを、どこかにぶつけなきゃやってられなかったんだよ！もう、止まれねえんだよ！）

「本当はもう、気付いているんじゃないか……そうだよ。こんなことしたって、誰も……」

口元の血を左手で拭いながら総矢は話す。総矢も相当傷は深い。言葉は切れ切れだった。総矢の言葉を無視して、男性は総矢へと突っ込んだ。

（死んでしか止まれないってのかよ……バカ野郎……）

総矢は歯を食いしばり、思い切り棒を横に振りぬく。三度目には総矢は叫ぶことも出来ず、頭の中にその一言を思い浮かべるだけで精一杯だった。再び左手で防ごうとしたが、男性の左腕は総矢の三

度目の打撃で砕かれた。そのまま男性の側頭部に総矢の攻撃が当たる。

「ガアッ……………」

声にならない叫びを上げながら男性は倒れた。男性は白目を向いたまま動かない。総矢もすぐにその場に倒れ、そのまま気を失った。気を失った総矢に歩み寄ると女性は優しく声をかけ、頭を撫でる。

「お疲れ様、新人さん。悪くない仕事ぶりだったよ」

総矢は気絶しながらも歯を食いしばり、涙を流していた。

「……………急がなきゃね。完成前のバリケードは壊しやすかったけど……………間に合うかな……………」

右手に持った銃を転送すると、ポケットから取り出した少し大きめの転送装置を取り出す。取り出した転送装置を使い、女性は自分の脇に大型のバイクを転送させた。タイヤの付いていないそのバイクは起動と同時に地面から少し浮き上がる。総矢を乗せ、ロープで無理やり固定すると正面門に向け猛スピードで走り出す。

初仕事終了

総矢が目を覚めたのは事件から二日後の八月十三日の昼だった。
「……………アレ？ここは……………」

左右を見る。見覚えのない風景だが、部屋の内装や独特のにおいから病院であることは分かる。上半身を起こし、総矢は自身の体に巻かれた包帯を見た。

「……………現実、なんだな。コレも……………」

包帯に手を当てながら呟く。まるで起きるのを待っていたかのようなタイミングで見覚えのある人物が総矢の病室に入ってきた。

「ん、目が覚めましたか？総矢君」

「矢口……………先生？じゃあここは中央病院、ですか？」

「いいえ、ここは私の知り合いの個人病院です。中央病院では安心してゆっくり休めないかと思いましたが、連絡を受けて、こちらに搬送していただくようお願いしました」

「あ……………ありがとうございます。それにしても、またお世話になっちゃいましたね」

中央病院でのことを思い出し、苦笑しながら総矢は話した。

「全くですよ。私が紹介していきなりそんな大きい事件に巻き込まれることになるとは……………」

矢口はここへ総矢を連れてきた女性に大まかな内容を聞いていた。矢口の元へ運ばれた総矢はかなりの重症だった。男性に殴られて肋骨は折れ、内臓までも損傷していたため、運ばれてすぐに手術が行われた程であった。

「この巻き込まれ具合はもう……………もう俺に何か憑いてますかね」

「そうかもしれないですね。ですが君は生き残りました。単に悪いものが憑いているだけならとくに命を落としているかもしれないですよ」

矢口が笑いながら告げる。総矢は再び苦笑する。

「しばらくは安静にしてくださいよ。ここからレイルの店まで

はすぐですから話をするならここに来てもらったほうが良いでしょう。彼の店、どうせ暇でしょうから」

(いい笑顔で結構アレな事言うんだな……)

「ま、まあ……とりあえず目が覚めたと連絡だけでも入れておきます」

総矢を見て、元気が十分あることに安心した矢口は立ち上がった。「さてと、そろそろ私は中央病院に戻ります。では、お大事に。くれぐれも無理はしないようにしてくださいよ」

「あ、はい。ありがとうございます」

矢口が部屋を出た後、総矢は自分の荷物から携帯を取り出す。

「もしもし、総矢です」

レイルは総矢の連絡に明るく応えていたが、総矢が事件について尋ねようとすると、簡単に「話はまた後で」と一言だけ告げるだけであった。電話を切り、総矢はベッドに再び横になる。再び眠りにつく。

「……鍵矢、お前は兄貴なんだからちゃんと理紗を守ってやれよ」

「……どうしたの？急にそんなこと言い出して」

「何となく、だ。あんまり深く考えるな。……でも今のお前じゃ……」

「ちよつと理紗も、いやいや、自分自身すら守れないだろうな」

にやけながら話を進める。

「馬鹿にするな。俺だって強いんだから」

「いてっ！……なんてな。ま、そんなもんだな。それにこうすりゃどうだ？」

「ずるい。届くわけないじゃん」

大人にまっすぐ伸ばした手で頭を抑えられると、子供のパンチが当たらないのは当然だ。

「ハハハ、やっぱりお前にはまだ理紗を守ることが出来そうにないな」

『『できるー！守るー！』』

半泣きになりながら叫ぶ。それを見た父親は少し嬉しそうに笑い、頭を撫でる。

『お前がもう少し大きくなるまではお前達を守るのも父さんの仕事、でもいつかは……』

総矢は目を覚ました。久しぶりに安心してゆっくり眠れたためか起きても夢の内容は鮮明に覚えている。懐かしさが嬉しくなり、総矢は一人嬉しそうに笑う。

（『でもいつかは、お前がちゃんと守るんだぞ』だったっけ、父さん。ここまではつきり覚えているのになんで顔は分からないんだろうな……）

総矢は軽くため息をつく。窓の外はまさに夏をイメージさせる快晴だった。蝉の鳴き声が幾重にも重なり、総矢の病室に響いている。

「よっ。見舞いに来たぜ！」

総矢の病室の窓にレイルが姿を現す。

初仕事終了（後書き）

初仕事……初のクセに井だけ無駄に長いんだよって思われた方もいたかと思えます。すいません。うまくまとめられませんでした。

次話で初仕事関係の話は終了となります。

初仕事の報酬

「なんだ、元気そうだな。それならお前が店に来いっての」
病室に入ってきたレイルは不満そうに総矢に言った。

「矢口先生が言ってたんですよ。店近いし、来てもらえって。おまけに暇だろうからって」

総矢が笑顔で話す。レイルは笑いながら総矢を見る。だがそのレイルの口元は引きつっている。

「あんの野郎……言ってくれなきゃねえか」

総矢はレイルの呟きが聞こえないふりをして話を進める。

「お見舞い、だけじゃないですよ」

「おう。まあ聞け」

そこから、レイルは遺伝子研究所での出来事について話し始めた。「生存者はお前と一緒に行動した7人だけだった……それと、お前が助けた連中は『人体実験』については知らなかった。まあ、話を聞いたのはあの女だが嘘や隠し事してる様子は無かったとさ」

『人体実験』のキーワードを聞き、総矢は顔を曇らせる。レイルはそのまま話を続ける。

「動物達の暴走原因は分からんが、爆撃はおそらく『人体実験』の事実をもみ消すことも考えられた対応だろうな。つまり、政府の人間あるいはかれらと深い関わりのある人間がこの事実を知っていたという事だ。それと……」

さらに話を続けようとしたところで例の少女が総矢の病室に入ってきた。

「よお。早かったな」

レイルが少女に連絡し、総矢の居場所を伝えていたのだ。少女は息を切らしている。

「うん、走って来たの。早くお礼が言いたくて……」

呼吸を整え、少女はレイルのベッドに歩み寄る。

「総矢さん、ホントにありがとう。でも私、その……お金、これしかもってないの」

申し訳なさそうに肩にかけたバツクから千円札を取り出す。

「これじゃ足りない、よね……だから、その……代わりに、わ、私をあげる……」

少女は顔を真っ赤にしながら何とか言い切った。それを聞いた総矢は驚き、呆然としていた。犯人は隣にいた。レイルが少女の横で口を押さえて爆笑しそうなのを堪えている。

「レイル！あんた何教えてんだ？」

「いや、報酬足りないだろ。それなら定番だがこの方法しかないかと思ってだな……」

レイルが物凄くいい笑顔で告げる。対して総矢はため息をつく。

「残念ながら俺はそういう人間じゃないですから。せめてあと10年経って心身ともに立派な……」

少女が総矢の言葉を遮りる。

「じゃあ10年待つて。絶対、絶対……その……」

少女は顔を赤くしながら総矢を見つめる。固まっていた総矢が、優しく笑う。

「分かった。綺麗な大人の女性になってくれよ」

返事を聞いた少女は嬉しそうに笑うと、そのまま走って総矢の病室を出て行った。

「……よかったな。10年後が楽しみじゃねえか」

相変わらずレイルは嬉しそうにニヤついている。

「いいから、それより話の続きを」

「照れんなよ。まあいい、あの事件で気になることがあってな。その1つがあの子だ。何であの子が俺の店の前にいたのかってこと。もう1つがあの子があの子の事件持ち込んだ時、俺の名簿の奴らが誰一人依頼を受けられなかったってことだ」

「最初の方は、あの子に直接聞かなかったんですか？」

「聞いたが……気が付いたらここにいた。だってよ」

「もう1つの方、他の人達の手が空いていない状況っていうのは珍しいことなんですか？その名簿には何人の名前があるんですか？」
「人数は秘密だ。だが全員手が離せない状況にあるなんて滅多に無いんだがな……」

レイルは腕を組み直し、総矢を見る。頭に浮かんだことを総矢は呟いた。

「……俺に依頼をやらせたやつがいる？」

「ああ、その可能性が高い。だが目的が分からない。単にお前を消したいだけなら殺し屋でも雇うだろうし、捕らえるなら警察でも使ってお前を確保でもすりゃいいだけだろ」

総矢とレイルは頭を抱える。わずかな沈黙の後、レイルが口を開く。

「ま、そのうち何か分かるだろ。とにかくお前はとつと怪我治しな。それと……お前のIDだ、返しておくぞ。あとな、IDのパスワード変えておけよ。初期状態だったじゃねえか」

「そのおかげで問題なく使えたんでしよう？それを見越してのことですよ」

レイルは総矢にIDを放り投げ、病室から出て行った。総矢はIDを見つめ、もう一度阿頭を回転させる。

（一体、誰が何のために……？あ、そっいや俺、助けてくれた女性について何も教えてもらってないや……ま、いつか。……レイルの気楽さがうつつたかな）

総矢は少し複雑な顔をしながら再び横になった。

初仕事の報酬（後書き）

謝罪させてください。

前話の後書き内での誤植がありました。「井だけ」……って。さつき気付いてショックでした。

本っ当にすいませんでした。

取りあえず初仕事はこれにて終了です。

治療費と新たな仕事

遺伝子研究所で起こった事件から半月が経過した八月三十一日のことであつた。

「んじゃ、退院おめでとう」

「どうも。お世話になりました。……あの、入院費や治療費は？」

「ん？もう頂いてるよ。この前見舞いに来た人が置いてったよ」

（レイルが？立て替えてくれたのか）

「あ、はい。分かりました。えと、ありがとうございます」

医師に感謝を述べ、総矢は病院を出る。行き先はもちろんレイルの店であつた。店の戸を開けた総矢を見て、レイルが声をかける。

「いらつしゃ……お前か。退院したのか」

「おかげさまで。そうだ、治療費の件。ありがとうございます」

「ああ、それ今度の仕事の報酬だから気にするな」

「なんだ、そうですか。それなら……え？仕事？俺に断りも無く？」

「拒否するんだな。なら今すぐこの場で治療費、入院費全て払ってもらおうじゃねーか」

その時、総矢の目にはレイルが悪魔に見えていた。いつの間にか作られた逆らうことのできない状態に初めは抵抗の眼差しをレイルに送っていたがすぐに無駄と悟りため息をついた。

「ハア……。それで仕事内容は何ですか？」

「簡単だ。ただのボディガードだ」

「相手は？」

「その人だ」

レイルは店の奥のテーブル席に目を向ける。そこには見覚えのある少女と対面した子供が楽しそうに会話している。初めて見る子供は金髪に茶色の瞳。東洋系の人間ではないことは明らかだ。真っ白で綺麗なワンピースが西洋のイメージをさらに強くする。

「あの子が依頼人？俺の治療費をあんな子供が払ったんですか？そ

れも前金で？」

レイルは少し困った表情をしながら話し始める。

「ん〜とな、詳しく言えば依頼主はあの子じゃあないんだ」

「じゃあ、いったい誰が？」

「簡単に説明するとな、某国の大使館の方からの依頼だ。内容は『人探し』。そこでその探す相手があの子だったってわけだ。その依頼が来たのが今朝8時」

「もう見つけたんですか。すごいですね」

「まあ、たまたまこの店に来ただけだからな。それで事情を説明した上で何とか連れ帰ろうと説得したんだが本人が『ヤダ』って言うて動こうとしないんだ」

「家出、ですか？つたから子供は……」

「そういうことだ。無理に連れ帰ってもまた逃げ出すに決まってる。根本的な問題解決にはならないんでどうしようかと。子供の相手は苦手なんで今は優衣ちゃんに任せてるんだが……」

「そついえばどうして優衣ちゃんがココにいるんですか？」

「お前の依頼の報酬を用意するためにここで働かせてくれって言うから」

「バイトとして雇っている、と？」

「ただ手伝いだ、褒美付の。俺みたいに、できた人間のところから問題ないだろ？」

「できた人間、ね……」

総矢は呆れてため息をつく。

「それにしてもなんでただ家出しただけの子供捜すのにわざわざココに依頼が？警察は？」

「表向きに探せないんだよ。あの子は極秘でこの国の大使館を訪問している某国の王室の人間だ。というか国王の姪っ子らしい。そんな方が家出なんてね、体裁とかあるんだろ」

「まあそうかもしれないですけど。って王室？あの子が？」

「疑ってるのか？大使館の人間がこの写真置いてったから確かだ。」

そんなわけで警察はNGなんだとき。っつーわけで今日一日でいいからあの子の護衛、頼んだぞ」

そう言っつてレイルは総矢の肩を叩きカウンターの奥へと逃げようとする。

「ちよつと待ってください。俺一人で、ですか？」

慌ててレイルを引きとめる。振り向きはするもののレイルは総矢と目を合わせようとはしない。

「今日中に大使館まで連れて行ってくれれば問題ないから。なぐに、優衣ちゃんも協力してくれるだろ」

「ボディガードって最初に言っただけど、要はただの子守ですか…」

…」

「子守言うな。金貰ってんだからちゃんと仕事はしろよ」

総矢はテーブル席の楽しそうに話している二人を見て、さらに深くため息をついた。

（俺だつて子供の相手は苦手なんだよ……）

治療費と新たな仕事（後書き）

申し訳ありません。この話は先日投稿したつもりでしたが私自身の不備により投稿されていませんでした。先程確認して気付きました。

という訳で新しい仕事が始まりました。

護衛？ - リゼ -

「レイルさん。それに……総矢さん！」

優衣は総矢の名前を口にしたら時だけ、自然と声が大きくなっていった。すぐさま反応したのはレイルだ。

「おいおい、何か差別してねえか？」

「あ、いや、そんなことないです。それより今日これから出掛けるのに付き合ってくれるのは総矢さんなんですか？」

総矢は微妙な表情で答える。

「まあ、ね」

優衣は嬉しそうに笑いながら対面していた少女に再び顔を向ける。「紹介するね。この人が今日一日私たちに付き合ってくれる総矢さん」

優衣の正面に座っていた少女は総矢をじつと見る。その表情が不安さを物語っている。

（この人が護衛？大丈夫……かな？ちょっと頼りなさそう……）

「よろしく。頼むからあんまりわがまま言わないでくれよ」

（まあ、レイルさんよりはマシかな。あの人だと……）

「初めまして、リゼ・クラーナ・アリエルです。リゼと呼んでください」

「よろしく。俺は崎見総矢、『ソウヤ』でいいよ」

リゼの頭をポンポンと叩きながら総矢は言った。総矢のその態度にリゼは思わず不満を口にす。

「あの、子ども扱いしないで頂けますか？」

横から優衣も口を挟む。

「そうよ。女性に対していきなりそんな態度は失礼よ」

二人からの非難を受け、総矢はレイルの顔を見る。総矢とレイルは互いに顔を見合わせ、困った表情をする。

（女性って……子供だろーが。優衣ちゃんと似たような年なんだろ）

心の中で不満を呟きつつも総矢は口で形だけの謝罪をする

「あゝ、悪い。すまなかつた。許してくれ」

「以後は気をつけてくださいね。それじゃユイ、行きましょ」

そう言いながら総矢の横を通り過ぎ、外に向かつて歩き出す。優衣も軽い足取りで後に続く。

「ソウヤ！早く。出掛けるわよ」

「総矢さん。行こう」

総矢はレイルに助けを求める視線を送る。レイルは総矢の視線に爽やかな笑顔で応える。

「ホラ、呼んでるぞ。早く行ってやりな」

「……分かってますよ。ハア……。……覚えてるよ……」

小さく呟くと、総矢はうな垂れながら店の外へ向かう。店を出る三人に爽やかな笑顔のまま声をかける。

「いつてらっしやーい」

店に残ったレイルは安堵した表情でカウンターに腰掛け、新聞を読み始めた。

「それで、どこ行くんだ？要望とかあるのか？」

「男ならそれくらい察してエスコートするものじゃないのかしら？」

「エスコートする甲斐のある大人な女性なら喜んでそうするんですけどね」

互いに不満そうだ。

「リゼ、行きたいところあるんでしょ。総矢さん、この近くに可愛い服置いているお店知りませんか？」

「服か。この近くでって言うとは……隣の駅まで行かないとないな。どうせなら外れにあるショッピングモールに行かないか？服に限らず色々あるし」

「うん、いいかも。じゃあまずは駅ね。リゼ、行こう。電車乗るよ」

「うん」

嬉しそうに優衣に答えるリゼ。総矢は優衣がついてきてくれたことに感謝していた。リゼは総矢と話すときは常に不満そうだが、優衣が間にいるだけですごく楽しそうに笑っている。すぐに三人は駅に到着した。

「切符買ってくるからここで待ってるよ」

「分かっています。早くしてくださいね」

リゼの態度に軽く不満を感じながらも時間の無駄使いを避けるため総矢は券売機へと向かう。総矢が離れてから優衣がリゼに尋ねる。「総矢さん、嫌いなん？」

「……そんなことはありませんよ」

「それならもつと普通に話したらいいんじゃないの？私みたいに」「そうじゃないの。ただ……」

リゼが言葉を詰まらせる。少し悲しそうな表情に優衣は戸惑う。だが、総矢が戻ってきたことに気付くとリゼはすぐに表情を戻す。

「はいよ。お待たせ。そんじゃ行くぞ、電車は……3番ホームか」
三人はホームへと向かった。

護衛？ - リゼ - (後書き)

……今回、特に何もしてません。

総矢達は駅からバスに乗り換え、郊外のショッピングモールへと到着した。総矢は入口の案内板を眺める。

「服、服……あつた。一階の奥の方だな。行くぞ……ってアレ？」

先程まで一緒にいた二人は入ってすぐの所にあるアイスクリームショップをぼーっと見ている。その様子に思わずため息を吐く。

（やっぱりガキなんじゃねーか。勘弁してくれよ）

「おい。食いたいなら後で買ってやるから先に服買っぞ。リゼはその服汚しちゃうまずいんじゃないかねえのか？少なくともこれから買う服よりは高そうだし」

「失礼ね。服に落としたりするとも思ってるの？」

「可能性の一つだ。いいから行くぞ」

総矢は二人を連れ、店の奥へと向かう。

「ほれっ、あとは自分で好きな選びな」

店の前で発した総矢の言葉は既に二人に届いてはいなかった。楽しそうに話しながら二人は服を手に取り、眺めてから戻す、という作業を繰り返す。その光景を眺めていた総矢は妹の理紗に買いい物を付き合わされたことを思い出していた。その場にしばらく立ち尽くしていた時だった。

（……よし、今ならやれる！死ねえっ）

後ろから一人の男がナイフを構え総矢に突っ込んだ。その動きに合わせたように二人の男が洋服店に入り込み、優衣に静かに近づく。後ろから優衣に近づいた男は口を塞ぎ、もう一人が手足を縛り、試着室へと放り込む。突然のことに驚き、恐怖で体が硬直した優衣は抵抗すら出来ず一瞬のうちに自由を奪われ、試着室に入れられた。

「よし、後はターゲットを捕らえるだけだ」

「OK。手早く済ますぞ」

二人の男は再び静かに移動し、優衣の時と同様に背後からまず口

を塞ぐ　はずだった。後ろからリゼに近づいた男が手を伸ばした瞬間。総矢に首を掴まれ、前のめりに押し倒された。逆に自らが自由を奪われる結果となった。

「何？貴様、何故？」

「間一髪だった。って言っても少し切れたんだが」

総矢はそう言いながら右手の甲に滲んだ血を舐める。取り押さえた男と話しているうちにもう一人は店から逃げ出していた。

「……っ！」

リゼは泣き出しそうなのを堪えている。突然の出来事に恐怖を隠しきれない様子だ。

「大丈夫だ、大丈夫だからちょっと待つてろ」

総矢は怯えるリゼに声をかけると、男自身が所持していたロープで両手両足を縛り上げた。店員にリゼを任せると、縛り上げられたもう一人とまとめて店の外へ引きずり出す。そのまま近くの警備員に事情を説明し、男達を引き渡す。

すぐに店に戻り、優衣の拘束を解く。優衣は総矢の顔を見ると飛びつき泣き出した。

「うわああああん！怖かったよおお！」

宥めながら優衣を抱き上げ、リゼの元へ足早に戻る。リゼは泣くのをずっと耐え、総矢が戻ってくるのを待っていた。

「怪我はないな？よく泣かないで我慢した。もう泣いてもいいぞ」
笑いながら総矢はリゼを抱き寄せ頭を撫でる。

「……どもあつ、いは嫌だって……つたでしょ……」

泣きながら途切れ途切れの言葉を口にする。だがそれだけで総矢には十分伝わる。

「はいはい。悪かった悪かった」

静かに言つと二人が泣き止むまでのしばらくの間、頭を撫で続けた。やがて泣き止んだ二人を連れ、総矢は一度店を出て外のベンチに腰掛ける。総矢の行動に疑問を感じた二人は顔を見合わせる。

「総矢さん？その……帰るんですか？」

「違う、少し休憩。というかその前に重要な話だ」

そう言ってリゼを真剣に見つめる。

「リゼ、さっきの奴らは明らかにお前だけを狙っていた。つまりアイツらはお前が誰かっことを知ってるはずなんだ。でもリゼは大使館からばれないように逃げ出してきたんだろ？それも表沙汰にならないようにだ。にも拘らずその事を知っている人間がいる」

「……」

「リゼの父さんの訪問の目的って何だ？知ってたら教えてくれ」

「……」

俯き、視線だけを横へと移す。

「言いたくない、みたいだな。……分かった。言いたくなったら言ってくれ」

総矢は頭を掻きながら立ち上がる。手を叩き、笑顔で二人に一言告げる。

「よし、仕切りなおし！服を選びに行くぞ」

三人は先程の洋服店には向かわず、二階にある別の洋服店へと向かった。さすがに誘拐されそうになった店に再び行くことには抵抗があった。更に今回は二人共総矢に常に触れていられるほど近くで洋服を物色している。

「ああ、そうそう。優衣ちゃんも一着好きなの選びな」

「わたしもいいんですか？」

「意外と太っ腹ね」

「まあさつきは護衛なのに2人に怖い思いさせたからそのお詫びでことで」

優衣は喜び、嬉しそうに洋服を手にとり見比べている。

「2人とも試着と貸してみたらどうだ？」

「うん。ちゃんとそこで待っていて下さいよ」

「覗いたりしないでよ」

「するか。さつさと行け」

試着室の前で二人を待つ。周囲を見渡すが、先程の様な不審な人物は見当たらない。周囲を確認すると総矢は自分のIDカードを取り出す。携帯に接続し、情報を探る。

（リゼの父親についてはまあ当然あるか。今回の訪問の目的は……あった。）

『今回の訪問の目的は、首相との極秘階段と大使館の直接の業務監査である。』

（何で内密に行っているんだ？別に隠す必要は無い、よな……？）
先程のリゼの様子を思い返す。頭に浮かべるだけで総矢の顔が引きつる。

（何か良からぬことでも企んでいるのか。……嫌な予感しかしない

な。また厄介な気が……？)

先行きに不安を感じつつ、総矢はIDをポケットに押し込んだ。

「総矢さん！これどうですか？」

「……」

優衣がはしぎながら試着室から出てくる。対してリゼはすごく恥ずかしそうにしながら出てきた。

「ああ。2人とも似合ってるぞ。リゼ？何で照れてんだ？」

「だって、こういう服あんまり着ることなくて……」

リゼは優衣が選んだスカートをはいていた。ジーンズ素材のスカートは先程のリゼが着用していたワンピースと比較するとかなり脚が出ている。恥じらいのために歩き方がぎこちない。

「大丈夫だ。パンツは見えてな……いつって！」

総矢が言い切る前に優衣が思い切り足を踏みつけていた。優衣の方を見ると、優衣が黒い笑顔で総矢を見上げている。その表情に総矢は思わず一歩下がった。

「よ、よし。じゃあその服でいいな。さっさと買ってアイス食いに行くぞ」

総矢は慌ててレジへと方向転換して歩き始める。洋服の購入を終えた三人は入口の脇にあるアイスクリームショップでくつろいでいた。その時、総矢の携帯が鳴る。

『ご苦労従者。どうだ。お姫様の様子は？』

「今はご機嫌でいらっしやいますよ。アイスがお気に召されたらしくて」

『それは何より。だがこちらは少々ご立腹のようだ』

「何がですか？」

『依頼者から苦情の電話だ。まだ見つからないのか！ってな。あの野郎共文句があるなら自分達で探せつての』

「愚痴言うために連絡したわけじゃないですよね？」

レイルの声の雰囲気我突然変わった。

『ああ。さっき姫さんが逃げ出した大使館で何かあったらしい』

「何かって？」

『原因は不明だがリゼの父親が意識不明の重体なんだよ。だからとつとリゼ見つけて連れて来いってさ』

総矢は横目でリゼを一度見る。電話の内容を告げたとき、楽しそうに優衣と話すその表情が崩れることは容易に想像できる。急に言葉が途絶えたことを察してレイルが続ける。

『……電話を代われ。俺が伝える』

「いや、俺が言います」

『……分かった、任せたぞ。それと、お前今どこにいる？』

「郊外のシヨツピングモールです」

『郊外か……なら駅へ向かえ。俺もそっちの駅まで車で向かう。なるべく急げよ』

「分かりました」

護衛？ - 事件発生 - (後書き)

掻き始めたときは『話と現実の季節を合わせて進められたらなあ』
なんて思っていました、そんな力は私にはありませんでした。

ちなみにこの話8月31日って設定なんですよ……自分で「8
月長っ！」って思っていました。

通話を終え、携帯をポケットに入れると同時に優衣が話しかけた。「今のレイルさんからですか？」

「ああ。ちよっと問題が発生してね……悪いがお楽しみはココまで。駅に向かうぞ」

総矢の言葉に真っ先に反抗したのはリゼだった。

「どうして？ せっかくここまで来たのだからもう少し色々見て…

…」

「リゼ、お前の親父さんが怪我したそうさ。無理矢理にでも連れて行くぞ」

「え……？ お父様、大丈夫って言っていたのに……？」

リゼは目につつすらと涙を浮かべる。優衣は思わずそんなリゼの頭を抱きしめた。その優衣の目にも涙が浮かんでいる。

(リゼ……)

「……行くぞ」

総矢はそれだけ言って立ち上がった。二人の手を引き、店の出口へと早足で向かう。店を出て、バス停へと向かう途中、総矢達の目の前にガラの悪い男が四人立ち塞がる。一人は先程逃げ出した男だ。リゼは怯えたが、逆に総矢には怒りが込み上がった。そんなこともお構いなしに声をかけてくる。

「その子、渡してくれねえか？」

「邪魔だ、どけ。急いでるんだ」

「やさしく言っているうちに……」

そう言いながら一人の男が総矢の肩に手をかける。手が肩に触れると同時に総矢は男の股間を蹴り上げた。急所に鋭い一撃を受けた男はその場に倒れ、苦しみ悶えている。

「どけよ。急いでるって言っただろ。俺をこれ以上苛立たせないでくれ」

「てめつ、調子に乗るなっ！」

言いながら拳を繰り出す別の男。その男の拳は総矢に届くことはなかった。男の拳は突然現れたスーツにサングラスの大男によって片手で軽々と止められた。総矢の後ろから現れたその大男に優衣は怯えていたが、今度はリゼが安心したような顔をしていた。

「なんだお前？ 離せっ！」

「……お帰りいただけますな？」

大男は止めた拳を力まかせに握った。大男の握力は見た目通りに物凄いものであった。

「いい、いでえ。分かった、分かったから離せ！」

「本当ですね？」

さらに力を入れ、念押ししてから手を離す。男達は突然現れた大男の気迫に気圧され、すぐさま逃げていった。

「ロブ、ありがとう。でもどうしてここが分かったの？」

「単なる偶然です。私だけではなく他のものもお嬢様を探して街に出ていましたから」

「リゼの知り合い、でいいんだよな？」

総矢は目の前でリゼと話す男に確認を取る。

「はい。私は……」

「私達のSPの1人よ。名前、じゃなくてニックネームがロブ」

「そうか、SPなら安心だな。っとそれより、今はのんびり話している場合じゃない」

「そうです。お嬢様、すぐに車を回します。ここで待っていてください」

そう言ってロブは走り出した。だが、ロブが離れた後も優衣だけは怯え、震えながら総矢の腕を掴んで話そうとしない。

「優衣ちゃん？ どうした？」

「やだ……あの人……怖い……」

リゼは軽く笑いながら優衣に話す。

「大丈夫よ。確かにロブは大きいし格好も顔も怖いけど、本当は優

しいから。目を見れば分かるわよ」

「ちがうよ……格好とかじゃないの……その、目が……」

優衣は一度深呼吸し、一気に最後まで言い切った。

「リゼのことは見る目が物凄く、冷たかったの……」

駐車場に着いたロブは携帯を取り出した。

「リゼ様を発見しました」

『よくやった。絶対に傷つけるなよ』

「見知らぬ護衛が1人と付き添いの子供が1人います。どうしますか？」

『護衛と付き添いの子供？ ああ、おそらく私が直接搜索を依頼した奴だ……見つけていたのに連絡すら入れないとは感心しないな。可能ならば邪魔だから置いて来い。まあ1人程度なら大した問題ではないがな』

「は。分かりました。では」

総矢達の目の前で車が停止する。

「お嬢様。乗って下さい」

「ええ。ユイ、ソウヤ、短い時間だったけどありがとう。それじゃ」
手短に挨拶し、車に乗るリゼ。だが、リゼの手を掴んで離さない手があった。

「ユイ？ ……ごめんね、もう一緒にはいられないの」

「ダメツ！ 私も行く！ 一緒に行く！」

（優衣……ちゃん？ 一体どうしたんだ？）

「なりません。今、大使館に無関係の一般人を引き入れることはできないんです」

「関係あります！ 私はリゼの友達です！」

「ロブ、大使館の前までなら一緒でも……」

優衣の尋常じゃない様子にリゼはそう提案した。

「……分かりました。早くお乗りください」

「総矢さんも早く乗って」

「あ、ああ。分かった」

全員が車に乗ると、車は走り出した。車内では大した会話もなされない。リゼは不安そうにずっと俯いていた。優衣はかすかに震えながら総矢の服の裾を握り締めている。

（……優衣ちゃんが明らかにおかしい。でもこれほど信用してないと俺まで少し疑ってしまうな。少し気が引けるが、どうにかロブの腹の内探れないか……）

「……あ」

思わず総矢は一文字を口に出してしまった。一斉に総矢に視線が集まる。

「どうかなさいましたか？」

ロブに尋ねられ総矢は動揺を隠しきれない。

「いや、なんでもないんだ……別に……」

総矢は目を閉じ、必死に記憶を呼び起こす。

（思い出せ、あの感覚だ！ 病院と研究所でのあの感覚だ！ あの時、俺は確かに相手の考えが分かっていた。今までで2度もあったんだ。今だって……）

目を閉じると必死に回想し、イメージする。病院で燃やされかけたときの事を。遺伝子研究所で思い切り殴られ、口から血を吐いていたときのことを。

（あの時の感覚……あの時の感覚……痛みも、苦しみも全部だ……思い出せ）

全身の皮膚がざわつく。その時、体が何かに浸かるような不思議な感覚に襲われた。

『……この2人は邪魔だな。だがりゼを見つけはした。これで報酬は俺の……』

（……分かる。分かるぞ！ まさか本当に……だが確かに現実に分かる）

『……それにこれで、当分は我々の行動に口は出せないだろう』

その状態でしばらく総矢はロボの心を静かに聞いていた。傍から見れば只座っているだけだが、その間、総矢は恐ろしいほど体力を奪われていた。大方の事を理解した総矢は力を抜いた。同時にロボの心は聞こえなくなった。

（自分の意思でOFFにもできる……にしても、そういうことか……）

理解した総矢は隣で震え続ける少女を見て、改めてその洞察力に感心した。深呼吸すると、総矢は優衣に小声で話しかける。

「……俺に少し話を合わせてくれ」

優衣は震えを止め、疑問の視線を総矢に送る。総矢は口元だけ笑うと運転中のロボに話しかける。

「ロボ、さん？ ちょっと止めてもらっていいか？」

「どうなさいましたか？」

「この子、少し気分悪いみたいなんだ。ちょっと休ませてあげてほしいんだが」

「……分かりました。その店に一度止めます」

（よし、このまま2人を降ろして……）

ロブは内心喜んだ。表情には出さなかったもののチャンスが来たと確信した。だが、

「リゼ、ちょっと付き添ってやってくれないか？ 途中までは俺もついていくが、一緒にトイレにまで入るわけにいかないだろ？」

「ええ、分かったわ」

総矢の一言でリゼまでも降りることになり、苛立った。だがこれも表情には出さない。

（ちいつ、余計なことを言いやがって！）

「お急ぎ下さい」

車を停めたロブに急かされ、三人は店へと入っていった。ロブの目が届かない場所まで来たことを確認すると、総矢は歩きながら話を始めた。

「優衣ちゃん、ありがとな」

「……いきなりどうしたんですか？」

「え？ ユイ？ 気分が悪かったんじゃない……」

「悪いな。少し優衣ちゃんには芝居してもらっていたんだ。理由は後で説明するから」

総矢は二人に背を向けて少し距離をとる。携帯を取り出し、レイルへと連絡する。

「はいよ。どうした？ 俺はもう駅に到着するぞ？」

通話口から呑気な声が聞こえる。

「俺達はこれから大使館に向かいます。それから、先に話しておくことがあります……」

「……という訳で協力をお願いしてもいいですか？」

『……なるほど、んでその役が俺か。分かった、協力してやるよ』
「ありがとうございます。それじゃ」

「総矢さん？ どうしたんですか？」

「どうして今は理由を教えたくないのかしら？ どうでもいいけど早くお父様の所に……」

二人の質問に総矢が答えることはなかった。口元は僅かに笑みが浮かんでいる。

「……それより、今のうちにトイレに行っておいたほうがいいぞ」
それだけ言うと総矢は入口の方を見つめる。二人が総矢の言う通りにトイレに入った直後だった。見つめる先で自動ドアが開き、ロブが店内に入ってきた。戻りが遅いことを不信に思い、様子を見に来たのだ。

（アイツも随分余裕がないみたいだな……それは俺もか。レイル、早くしてくれよ……）

「お嬢様達はまだ化粧室ですか？」

「ああ、そうだ」

「少し、時間がかかりすぎでは？」

「同感だ。だが、いくらなんでも女子トイレには……」

「そんなことを言っている場合ですか！ 中で何かあったかもしれないですよ！」

急ぎ足でロブは総矢の前を通り過ぎ、中に入ろうとする。が、その瞬間、二人の少女が化粧室から出てきた。

「あ、ロブ。……まさか今ここに入ろうとしたの？」

少女に疑惑の眼差しを向けられた大男は動揺しながら弁解する。

「あ、いえ。お嬢様達があまりに遅いので心配になって……」

「だからって……まあいいわ。急ぎましょ」

車に戻ると、総矢達は大使館へ向けて、移動を再開した。

移動を再開してから約三十分、車は大使館へと到着した。

「申し訳ないのですが、お2人はここで……」

入口前で総矢と優衣に言うが、優衣は納得しようとしなない。困り果てたロブに総矢はそつと耳打ちした。

「大丈夫ですよ。俺は大使館側の方に雇われたんですから。この子も俺には協力しますよ。それに、この子がいたらリゼが逃げ出したりする可能性が低くなると思いませんか？」

総矢の言葉にやや不満気味だが、仕方なく二人を乗せたまま車は中へと入っていった。

（何故この男そんなことまで知っている？ 依頼の時に事情まで説明したのか？）

気にはなつたが、急ぐロブはそのまま先へと進んだ。

車を降り、四人は建物の中へと入る。

「お父様はどこなの？」

「こちらです。お早く」

総矢と優衣はリゼ達に続き、奥へと進む。案内された部屋で椅子に座った一人の男性が目に入る。

「お父様!!!」

リゼが叫びながら思わず男性に駆け寄る。優衣がりゼを追って部屋へと駆け込む。

「……え？ あれ？ お父様？ 怪我をなさったって聞いたのですが……どういうことですか？」

どう見ても男性は至って健康そのものだ。だが、男性の表情は険しい。

「リゼ、すまない。私の計画は失敗した」

後からゆつくりと部屋に入ってきたロブが落ち着いて説明する。

「私が情報を流させていたいただきました。私はあなた方一家のSPで

あると同時に、この大使館側の人間でもあつたんですよ」

「そうか、お前が裏切り者だったか！」

リゼの父親は激怒し、殴りかかる。その拳を止めたのは総矢の左手だ。後ろからロブと同じ格好をした数人の男が部屋へと入ってきていた。その中で一人だけが明らかに様子が違う。この大使館の館長だ。明るい茶系のスーツに身を包み、メガネをかけた短髪の男性は不敵な笑みを浮かべ、楽しそうに話を続けた。

「『お嬢様の搜索』に我々大使館の人間の注意を逸らし、その間に我々の調査を行うというあなたの計画は意外性があり、悪くない。ですが、初めから情報が漏れていては計画も何ありませんよね？」
総矢に突き飛ばされ、リゼの父は壁に寄りかかった。その父親に駆け寄ろうとするリゼの腕を掴み、ロブが軽々と持ち上げる。ロブは最早リゼの知っているロブではなかった。

「さ、外交特使殿。報告書を作成していただけますな。我々は武器、兵器の密輸とは無関係であつたと」

横目でリゼを見ながら父に迫る。歯を食いしばり、リゼの父親は抵抗の眼差しを送る。不満を感じた館長は顎でロブに指示を出した。同時に部屋にリゼの悲鳴が響き渡る。

「痛い！ 痛い！ 離して！！」

ロブが手に一層力を込め、強く握った。

「リゼ！ このおっ、リゼを離してよっ！」

優衣がロブに向かって、泣きながら拳を振り上げながら駆け寄る。振り上げた拳を総矢は止め、暴れようと必死にもがく優衣を強引に押さえ込んだ。リゼの悲鳴は館長が思った以上の効果があつた。

「分かった！ 言う通りにする。やめてくれ！」

「そうそう。人間素直が一番ですよ」

館長はリゼの父親の方に手をかけ、嬉しそうに笑った。

リゼと優衣は使用されていない狭い一室へと移されていた。外から鍵をかけられ、外には出られない。

「総矢さん……なんで……？」

「ロブまで……そんな……」

二人は絶望し、座り込み、泣いていた。信頼していた人間に裏切られたという事実は二人の心に深い傷を負わせていた。どれほど泣いたのか自分達で分からなくなってきた頃のことだった。

コンコン

不意に聞こえたドアをノックする音。二人は涙でぐちゃぐちゃになった顔をドアのほうへ向ける。鍵が開く。緊張のあまり二人の涙が止まった。ドアが開くと同時に先程リゼたちを連れてきた男が部屋の中へ倒れこむ。

「……っ!!」

二人は驚き、後ずさった。が、次にドアの影から現れた人物を見て、不安は安心へと変わった。

「待たせたな、ヒーローの登場だ。少し手間どっちまったな。それで、総矢は？」

店にいるときと全く変わらない様子だ。優衣は安堵の涙を浮かべ、レイルにしがみつく。大声で泣こうとする二人の口に指を当てて、倒れたままの男に一度視線を向ける。

「分かるな。大きい声はあまり出すなよ……んゝ仕方ねえ、念のため縛っておくか」

レイルはどこからともなく取り出したロープで男を縛り、更に目を隠してから口を塞ぐと最終的に部屋の中に吊るし上げた。手際の良さに加え、どこか楽しそうなレイルを見ていた優衣とリゼは顔を

引きつらせる。

(レイルさん……正義の味方のやることじゃ……ないですよね?)
(この人……こういう事に慣れていいのかしら……?)

レイルの行動のおかげで二人の涙は止まっていた。もちろんいい意味ではないが。

「……よし。こんなもんか。んで、総矢は？」

『総矢』の名前を聞くと二人は再び顔を曇らせる。リゼが悔しそうに口を開く。

「……あの人も私達の敵だったのよ……今どこにいるかなんて、知らないわ！」

二人の様子にレイルは苦笑いしている。

「んじゃ次の質問。君らその『敵』って見たんだよな？何人だった？」

レイルの質問に訳が分からず目を丸くし、二人は顔を見合わせる。
「全員かは分からないけど……確か6、7人だったと思う」

それを聞いたレイルは軽く頷く。
(それならもう終わってそうだな)

「よし、んじゃ行こうか」

レイルに手を引かれ二人は立ち上がる。レイル達はそのまま部屋を出て歩き出した。

リゼの父親が対面して座っていた館長に書類を差し出す。書類に目を通してから、笑顔で答える。

「……うん。書類に不備は無さそうですね、ご苦労様でした」
「満足したなら早く私と娘を解放して……」

リゼの父の言葉を遮り、館長が笑いながら話す。

「お嬢様はたいそうこの国が気に入られたようです。お友達もできたようですよ。どうでしょう？しばらくこちらでお預かりしても構いませんが」

その言葉を聞き、怒りが込み上げ思わず拳に力が入る。

「貴様、人質のつもりか？」

「いえいえ、そんなつもりはありませんよ。ただ、お嬢様もそろそろ親離れに慣れておいた方がよろしい年頃か、と思っただけですよ」
我慢の限界を超えた。リゼの父親は勢いよく立ち上がり、椅子が音を立てて倒れた。だが、振り上げた拳はリゼの父の後方に控えていたロブが押さえていた。

「落ち着いてください」

淡々と話すロブに対し、怒りの矛先を向ける。

「黙れっ！ 貴様も何故こんな事に加担している！」

「……説明してもあなたには分からないでしょう」

「分かるわけが無いだろう！ 貴様らのような犯罪者の事など！」

「違います。貴方のように初めから上にいる人間に分かるはずがありません、と言っているのです」

「何だと？」

「初めから上にいる貴方は上にいない人間を分かっているのですよ」

「……？」

「金が必要なんです、我々のように上にいない人間には。権力すら金で動くこの時代は特にね」

館長が立ち上がり、ロブ達に歩み寄る。

「そう、我々だって手に入れたと思うのは当然だ。地位も金も、何もかも。だが皆が貴方のように恵まれた存在である訳ではないんです。手に入れるために、こうでもしなければならなかったんですよ」

館長は変わらず笑顔だ。だがその笑顔には恐ろしいほどの嫉妬が滲み出ている。館長からロブへと視線を移し、改めて尋ねる。

「ロブ、お前もこいつと同じ考えなのか？」

「……言い訳はしません。金が必要なことは同意します。一刻も早く必要なんです」

「そう、彼は金のために君を裏切り私に協力しています。貴方たちより金を優先したんです。いつ変わるか分からない『人』よりも常に最低限の価値を持ち続ける『金』を選ぶ彼の判断は賢明なものと言えるでしょう。……聞いているんですか？」

啞然として固まったりゼの父を館長が突然殴った。倒れたりゼの父に言葉を続ける。

「どうだ？ 自分の価値が金に劣ることを思い知らされた気分は？」

殴られた際に切れた口元を手で拭くと肩で笑う。圧倒的に不利な立場にいるにも関わらず、今度はリゼの父は笑みを浮かべながら反論した。

「……まさに金の亡者だな。金と人を比べるとは……救いようもない愚かさだ」

館長の表情が一変した。彼は弱い立場の人間に舐められるのが許せなかった。館長が目を見開いてリゼの父親を睨む。自分の机の引き出しを開けると、銃を取り出した。リゼの父親へ近づくと、銃口をリゼの父の額に押し当てる。

「……それが、密輸したっていう武器の1つですか。流石にそれは物的証拠になりそうですね」

引き金に指をかけた瞬間、部屋の入口から声が聞こえた。館長は視線を声の主へと向ける。武器を手にした総矢がドアのところに立っていた。

護衛？ ？ 価値 - (後書き)

33話かなり長くなってしまいました。

短くまとめるといいましたが、無理でした！

館長は銃を一度下ろし、不満そうに総矢に声をかけた。

「なんだ、お前か。あの娘を連れてきた働きには感謝しているが命令には従え。部屋には入るなと言っただろう」

「残念ですが俺の仕事は終わってます。もうあの子をちゃんとここに連れてきたんですよ」

「そうか。それならとっとと帰れ、邪魔だ。金はもう払ったんだ、用もないだろう」

館長は冷たい視線を総矢に送り続ける。

「それがそういうわけにもいかないですよ」

「何だと？」

「こつから先は個人的な俺の用件ですから、誰が何言おうとも聞きやしませんよ」

総矢の表情が一変した。閉じていた目を開き、館長を真っ直ぐに見る。その目は怒りに満ちていた。先程の館長の比ではない程に怒りを迸らせている。ロブは館長を下がらせ、総矢に近づいた。

「いいから今は外に出て……」

「あんたも……コイツ等の仲間なんだよな……」

ロブが総矢の正面に立ち、部屋から総矢の体を押し出そうと手を伸ばす。しかしその直後、ロブは背筋に寒気を感じた。目の前に立つ総矢の纏う空気がロブに異常さを伝えた。腕力では勝っている相手でありながらもロブは身の危険を感じられずにはいらなかった。無意識に防衛本能が働き、伸ばした手を硬く握り、総矢に殴りかかった。

「……」

拳を楽々と受け流すと、無言で手にした武器でロブの顔面を打つ。ロブは鼻血を吹きながらそのまま床に倒れて気を失った。命を奪わなかったのは、総矢が怒ってはいたものの復讐には取り付かれてい

なかった証拠だ。突然の出来事に怯えた館長はすぐに声を張り上げる。

「お、おい！ 誰かいないのか！ て、敵だ！」

「今更ピーピー騒ぐな」

館長の目の前まで歩み寄った総矢は右手で首を掴み、再び睨みつける。

「俺の質問に答える。嘘はついても無駄だ。死にたくなかったら正直に答える！」

「た、待機させていた他の奴らはどうした？まさか……」

「全員そいつと同じように眠ってもらってるだけだ。それより答える！」

右手の指に少し力を入れると、館長は黙って首を縦に振る。

「これまでに売った密輸物の中で使い道が分かっていたものはあるか？」

首は縦に振られる。

「その中で今年の7月7日に起きたテロ事件に使われたものがあるか？」

この問いにも館長は首を立てに振った。直後に部屋には総矢の怒鳴り声が響き渡った。

「答えるっ！！ 誰だっ！！ それを誰に売った！！」

「わ……分からないんだ……今年、まだ春になる前に妙な男がただ『売ってくれ、金はあるから』と言って……大量に我々から買っていったんだ」

「何故その男だと分かるっ！！」

「そいつが、電話で話しているのを俺の部下の1人が聞いたんだ。……7月の航空機の方は入手しました……」って……だから、きつと……」

館長は嘘をついていなかった。歯を食いしばると無抵抗の館長の顔を思い切り殴った。倒れて気を失った館長を前に、堪えきれない怒りを壁に思い切りぶつける。

「……ハア、ハアツ！ クソツ！」

呼吸を整え、机の上にあった偽りの報告書を破り捨てる。呼吸を整え、リゼの父親に顔を向けて話しかける。

「……先程はすみませんでした。お怪我は大丈夫ですか？」

「あ、ああ。いや、そんなことよりありがとう。助かったよ」

戸惑いながらも総矢に礼を言う。総矢が差し出された手に掴まっ
て立ち上がるうとした時だった。レイル達三人が総矢のいる部屋に
静かに顔を出した。

「お父様っ！」

総矢が振り返ると、そこには駆け寄るリゼの姿があった。リゼは
総矢と自分の父親の間に立つと総矢に向かって大声で叫んだ。

「お父様から離れてっ！ もうどっか行ってよ！ 二度と私たちの
前に現れないでっ！」

必死で叫ぶその顔には再び涙が浮かんでいる。総矢は力一杯叫ぶ
リゼを見て安心してため息をついた。そんなリゼを父親が後から抱
きしめた。

「リゼ！ 無事だったんだな……よかった。本当によかった……」

父親の抱擁にリゼは動揺している。二人を見ていた総矢の肩に手
がかかった。振り返るとレイルがすぐ後ろに立っていた。レイルの
後ろに体を隠しながら総矢を睨む優衣もいた。

「言いたいことは分かっている。でも少し待ってくれ。リゼにもま
めて説明するから」

怯える優衣に声をかけると、レイルと総矢は部屋の中で倒れてい
るロブと館長の手足を縛り、拘束した。レイルの手際の良さ、楽し
そうな表情には総矢も言葉を失った。

「……」

「ほら、早くしろよ。目覚ます前に終わらせるぞ」

「……ああ……」

護衛？ ？ 用件 - (後書き)

今更ですがPCで読んで下さっている方はお気づきと思いますが、
ちよいちよい『(改)』っての(再編集の印)が付いていますが、
内容は変わってません。

タイトルの投稿ミスや、句読点等の修正を加えているだけです。
内容は一切変更入れてないのでご了承下さい。

全員を拘束し、優衣とリゼを監禁した部屋に放り込むと総矢とレイルはリゼ達のいる部屋へと戻った。落ち着きはしたものの、二人の少女は戻った総矢に対し敵意を剥きだしている。

「黙ってて悪かった。今から話すからそれ以上の敵視しないでくれ」
頭を掻きながら謝罪をする。深く呼吸してから総矢は話を始めた。
「元々、大使館の奴らからレイルの店にリゼを搜索するよう依頼が来ていたんだ。俺やレイルは当然こんなことになるなんて思いもしなかった。原因が家出と聞いていたからな。今日中に説得してここに連れて来ればいいって程度に考えていた」

視線をリゼに絞り、話を続ける。

「だがリゼが狙われ、誘拐されそうになった。俺はそこにまず引っかかった。質問に何も答えないリゼを見て、何かあることは確信した。更にその後出てきたロブって大男。あいつに対しては優衣ちゃんに感付いてくれたおかげだ。あの怯え様は尋常じゃなかったからな」

そこまで黙って聞いていたリゼが総矢に向かって声を張り上げる。

「とにかく貴方はあの人達の手助けをしたんでしょ！ やっぱり貴方は私達の敵よ！」

「落ち着けて。俺にお前ら2人の救出を頼んだのは総矢だぞ」

「……え？」

リゼと優衣は口を開けたまま固まった。

「総矢は今回の館長達の行動を知って、館長側の人間を全員片付けることを考えた。だが2人を人質にされたらどうしようもないから先に俺に保護しておいて欲しいって頼んだんだよ。その為に俺が忍び込む時間を少しでも稼ぐために敵の振りもしたんだ」

「レイル、俺が話していたんですけど……」

いつの間にかレイルが説明している状況に総矢は戸惑う。だが、

二人が敵視されていた総矢が話すより冷静に話を聞いていたのも事実だ。そこで当然の質問が結衣から飛んできた。

「じゃ、じゃあ何で私達に何も言ってくれなかったんですか？」

少し間を空け、総矢は答えた。

「……それは、全てを話して協力してもらおうより敵に捕まっていた方がまだ安全だと……」

「演技が下手であればれると思う。ばれたら更に厄介になるから言わないでおく」だってさ」

言い終わる前にレイルが横から口を挟んだ。

「バツ！ 言うなっ！ いや、違うぞ。演技力が不安だったんじゃないかって安全性を考えて……」

必死に弁解しようとする総矢を見て二人はくすりと笑った。店にいるときのようなレイルと総矢の振る舞いに、二人は既に総矢に対しての敵意を解いていた。

「ううん、もういいです。私達もう総矢さんが敵じゃないって分かりましたから」

「でも、ソウヤももう少し私達を信用してくれても良かったんじゃないかしら？」

納得した二人の言葉に総矢は安堵した。その総矢に今度はリゼの父親が疑問をぶつける。

「しかし君は一体何時、館長達の行動や行為を知ったのかね？」

それは総矢にとっては最も難しい質問であった。「俺は人の頭の中が読めるんです」などと言っても通用するかは分からない。それ以前に、そんな力を持っていることを他人に話すべきなのかを悩んだ。

（下手に話すのは気が引けるな……。この力、ここで話す必要……ないよな？）

「それは、企業秘密ってことで勘弁してください」

「分かった。ともかくもう一度礼を言わせてくれ。本当にありがとう」

リゼの父親は深く頭を下げた。

その後、すぐに駆けつけた警察により館長達は逮捕され、事件は翌日のトップニュースとなった。だが、そのニュースに総矢達に関することは何一つ取り上げられず、全てはリゼ達親子の大活躍として報じられた。館長達に加担していた者達を除く大使館の職員も総矢達の存在を知ることなく事件は幕を閉じた。

護衛？　？　翌日・

事件の翌日。翌日とは言っても、既に午後三時を過ぎている。

「…………アレ？」

総矢はソファから身を起こした。見覚えのある部屋だ。初めてレイルに会ったときに通された部屋であることは遠い昔のように感じた。左右を見渡しても部屋の中には誰もいない。

「…………俺は、どうしたんだ？」

思わず独り言を呟く。総矢は起き上がり、部屋を出る。店のカウンターではレイルがコーヒートを淹れていた。

「やっと起きたか。つてかお前、寝すぎだろ」

総矢は呆れるレイルに苦笑いし、記憶が途切れるまでのことを尋ねる。

「帰りの車の中で眠って全く起きなかつたんだよ。仕方ねえからここに連れてきて中に運び入れてやったんだ」

と簡単に説明した後、一言付け加えた。

「当然だがこれも貸しに入れていいよな？」

「…………え〜と、拒否権はないですよね？」

レイルはニヤリと笑い、総矢は諦めてため息をついた。その直後、店の戸が開いた。レイルが声をかけるより早く戸を開けた人物が挨拶する。

「こんにちはっ！」

優衣だ。元気よく入ってきた少女はそのまま総矢の隣に座る。

「よっ。昨日は親父さんに怒られなかったか？」

レイルがそう尋ねたのは、昨日の事件で優衣の帰宅時間がかかり遅くなってしまった事を気にしてである。レイルが車で家まで送り出したものの、優衣が家に到着したのは午後8時を回ってしまった。いた。

「怒られました。昨日は少しお手伝いが忙しくて、長引いたからっ

て言ったのに……」

優衣は余計な心配をさせるだけだと思い、事件に関わったことは両親にすら口にしなかった。

「悪くない言い訳だがな」

レイルが笑いながら答える。

「そしたら、『これからは帰りが5時半を過ぎたら手伝いは2度と禁止』って約束させられて……」

優衣は不満そうに口にした。それから目覚めたばかりの総矢に二人が昨日の事件についてのテレビや新聞での報道の内容を色々聞いていた時、

「ユイツ！」

その張り上げた声は戸が開く音をも掻き消した。声の主は開いた戸から走ってそのまま優衣に飛びついた。二人は何を言う訳でもなく見合つて笑った。

「よー、リゼ。また1人できたのか」

レイルが皮肉っぽく言った。そんな些細なことが全く気にならないのか、嫌な顔をせずに素直に答える。

「今日はお父様と一緒よ」

（な、何だこの素直さは？ こ、これはホントにリゼなのか？）

総矢は心で叫んだつもりだったが、言葉に出てしまっていた。少女達が総矢を見る。

「失礼ね！」

「そつよそつよ！」

（息ぴつたりだな、オイ）

そんなやり取りをしている間に、リゼの父親も店の中に足を踏み入れていた。

護衛？ ? 翌日・（後書き）

『護衛』の話の次ですが、諸事情により少し投稿に間が空いてしま
いそうです。

簡単に言うと作者の個人的なミスが原因です。少しばかり投稿遅れ
ると思いますがご了承下さい。

「まずは改めて礼を言わせてくれ。本当にありがとう」

リゼの父親は深々と頭を下げた。

「そんなに気にしないで下さい。あの騒ぎの中、俺達を匿って外に出してくれただけで十分です」

「だが昨日は色々あつて大した礼もできてないから……」

どうにかして礼をしなければと思っっている様子だ。レイルはすぐさまそれを察した。

「……そうだなあ。礼をするなら何か大切なものをあげなきゃなあ

……」

リゼの父親が突然話し出したレイルの方を見て興味津々に相槌を打つ。

「しかし今貴方がコイツに差し出せてこいつが喜ぶものと言ったら……」

「何ですか？ 何がありますか？」

全てはレイルの一存で決まりかねない状況だ。

「コイツはロリコンだからなあ……やっぱりお嬢さんをあげるしかないですね」

当然の如く笑顔で言い切った。

「なんですと！？ むうう……いや、だが私も彼ならば……しかし娘の気持ち……」

「イヤイヤイヤ。ちょっと待ってくださいませんか？ 何そっちで話を勝手に進めてんですか？ しかも俺はロリコンじゃないって言うて……」

総矢が止めようと間に割って入る。だが、

「私はぜひ彼のような人間にと思っではいるのだが、やはり娘の意思を尊重しないと……」

リゼの父には聞こえていない。

「それなら大丈夫。既に娘さんもコイツのことは気に入ってますよ」
レイルは聞こうとしていない。

「お父様っ!!!」

リゼの叫び声に、流石にハツとして振り向いた。

「何で勝手に話を進めてるんですか!？」

「なんだ、総矢のこと嫌なのか？」

にやけながらレイルが一言尋ねた。リゼは視線を逸らしながら答えた。

「嫌いじゃないわ。でも、す、好きでもないわ……」

リゼの反応に優衣は複雑そうな顔をしている。リゼの父は娘に笑いながら声をかける。

「本気になるんじゃない。ただの冗談だ」

視線を娘から総矢に移しながら、話を続けた。

「……それに、君にはまだやるべき事があるだろう？ 何かあったら何時でも連絡をくれ。可能な限り君たちへの協力を約束する。すまないね。今はこれくらいしかできなくて」

総矢は頷いて苦笑しながら答えた。

「ありがとうございます。本当に近いうちにお問い合わせするかもしれないです」

リゼ達の訪問は僅かな時間だった。帰り際に店の戸の所で不意にリゼが振り返る。

「これ……私からのお礼。色々と、ね……ありがとうございます」

両手で持った小包を総矢に差し出す。

「あ、ああ……開けてもいいか？」

中に入っていたのは薄桃色の綺麗な石だ。石を掌に乗せ、じっくりと見つめる。

「石？ 宝石……じゃないよな？」

「宝石じゃないけど、価値は負けないわ。効果抜群のお守りよ」

「ほお。効果抜群、ね」

胡散臭いと言わんばかりの顔でもう一度手にした石を眺めた。リゼは再び全員に向き直り、礼と別れを告げた。

「ホントにありがとう……それじゃ、さよなら」

優衣が不満そうな顔をしてリゼに別れの挨拶を訂正させた。

「『また』ね！ 元気でね、リゼ」

「！ うん、『また』ね、ユイ！ ソウヤ達も元気で」

「ああ、『また』な」

嬉しそうに手を振りながらリゼは車へと走っていった。リゼが最後に見せた笑顔は総矢が見た中では最高のものだった。優衣は走り去る車に涙を隠そうともせず手を振り続ける。そして、そのままリゼは自国へと帰っていった。

護衛？ - 帰国 - (後書き)

はいどうも。

護衛編が終了です。

次話も現在進行形で製作中です。

搜索？ - 情報確認 -

リゼ達親子が店を出て、帰国した夜のことだった。

「お前もそろそろ帰ったらどうだ？ 昨日泊めたのは『仕方なく』だったんだからな」

「そう、ですね……」

口ではそう言っているものの、総矢はカウンターから立ち上がりそうにない。

「そもそもお前がどこに住んでるか聞いてなかったな。まあ基本的に名簿の登録に必要なのは連絡先だけだからな」

(家、か……)

総矢は焼け落ちた自宅を思い出す。今の総矢には自宅へ行っても野宿と大して変わらない状態だ。残り数時間で九月へと変わる時期ではあるが、残暑が厳しいため野宿したとしても凍えて死ぬとは考えられない事がせめてもの救いだった。

「おい、聞いてるか？」

ボーっとしていた総矢の顔を覗き込みながらレイルが話しかける。

「え？ ああハイハイ。それじゃそろそろ帰りますよ」

「おう、そんじゃな」

別れを告げ、総矢は一人店を出た。

(帰る？ 俺はどこへ帰ればいいんだろうな……)

総矢は今までのことを思い出す。テロ事件の後はしばらく矢口がいた病院、その後は退院直後にまたもや遺伝子研究所で大怪我、またも病院で数日の生活。

「怪我でもして、病院のベッドに帰ってたのか？」

ため息をつきながら呟く。行く当てのない総矢は町をさまよい歩いた。大きい池のある公園のベンチに座り、空を見上げる。

(今日とはかく、他の事件は死んでもおかしくないものだったよな……。でも生きている。これは全部『能力』があっただからだよな

自身の能力に感謝しながらも、その能力の問題点についても少々悩む。

(極端に体力が減るからな。病院とか研究所では使いすぎて回復するのに丸一日必要だった。でもそれは大塚みこともそうだったはず。こういう能力つてのは体力消費が激しいみたいだな)

冷静に分析しながらIDを取り出した。携帯に接続し、リゼ達のニュースを再び見る。

IDによりロックされていた情報の一部が閲覧可能となった。

『この事件の解決にはこの親子以外に関わっていたものが数名いる』
ロックされていた中にその一文見つけた。

(やはり完全には情報を隠し切れないか。俺のIDレベルでこれが閲覧可能って事は、上に行くとも名前まで割れるかもな……)

不安を感じつつも、総矢にはどうすることも出来なかった。だがそんな不安とは裏腹に、最高レベルであつても実際には総矢達の名前までは明かされてはいなかった。

暗くなり始めた時間帯、人気の無い工場跡地で一組の男女が会話をしていた。女性の方は大塚みことだ。

「……って訳で私の攻撃は全部避けられたのよ。で、何でまたこんなこと話させるの？」

「俺は直接は聞いてない。いいから話を戻すぞ。全部避けられたと言つても途中からだろ？」

「確かにそうだけど、でも違うの。止めを刺そうとしてからは1発も当たらなかつたわ」

「……俺が見ていた限りでは初めから動きは悪くはなかつた。お前が倒れるまで動きが極端に速くなつた訳でもないように見えたが？」

この男性はかつて病院にいた大塚みことを監視していた人物だ。それ故直接聞いていなくとも大体のことは分かっている。

「確かに速くはなっていないわ。でも確実に見切られていた。まるで狙いが見透かされているような……」

考えながら話すみことに対し、男性はニヤつきながら答えた。

「お前単純だからな。考えがすぐ表情に出る」

キツと睨みつけ、反論しようと口を開く。が、言葉を発する前に男性が続けた。

「ほらその顔だ。まあいいや、そこでその男の名前は何て言ったっけ？」

「志井 鍵矢けんやよ。私と同じテロ事件の生存者の1人」

「……？ すまん、もう1回言ってくれ」

「『シイ ケンヤ』よ」

男はポケットから取り出した端末でデータを照合した。

「……俺の仕入れたリストではそいつ死んでるぞ？」

「……え？ 死んでる？」

男はデータを再確認する。

「間違いない。あの事件で助かった人間は3人。1人はお前、だがもう2人は十分な情報得られてないし、俺の監視はお前が中心だったから十分には探りを入れられなかった。それと、リスト上では今日までの生存者は既にお前1人しかいないぞ」

「それなら、秘密が、」

「ああ、ばれることは無いんじゃないか？」

それを聞いたみことは安堵の表情を浮かべた。

検索？ - 情報確認 - (後書き)

遅くなりました。

色々と方向性を考えていたら、かなり時間かかってしまいました。

登場人物を増やすとキャラが被りそうで怖いです。

搜索？ - 早朝の出来事 -

総矢が目を覚ました。昨日はそのまま公園のベンチで横になったために少し体が痛む。

（今の時期はまだ大丈夫だが、早く住むとこ確保しないと今年の冬で凍死だな。さてと……）

伸びをしながら大きく深呼吸をする。

「ん？」

足元にまわり付く感触に、思わず視線を下に向けた。前足を高く上げて総矢に身を寄せる犬がいた。毛並みはお世辞にも立派とは言えないが、首輪を付けられていることから野良犬ではないと分かる。

「ハツハツ」

「何だお前？ お前のご主人は俺じゃねえぞ」

「ハツハツ」

当然ながら言葉は通じない。総矢にくっついて離れようとしない。「どうするか……」

離れない犬に少々困惑しながら、周囲を見回して飼い主を探す。

一人の少年が叫びながら走ってきていた。

「おい！ ゴン！ やめろ！」

少年は総矢の足にまわり付く犬の首輪にすばやくリードを取り付けた。少年はホツと胸を撫で下ろす。立ち上がり、総矢に謝罪した。

「すみません、コイツが迷惑かけました。いつもこの公園で1度離してやってるんですが、人を見つけて飛びつくなんてこと今まで無かったので油断してました」

「気にしないでくれ。別に動物嫌いって訳じゃないから」

「それじゃ、そろそろ散歩の続きを……うおっ」

突然走り出した彼の犬に引つ張られ、少年は体勢を崩しながら走

り去っていった。

「……ん？ 今の人どこかで……？」

走りながら首を傾げ、少年は呟いた。振り返るとそこにはもう総矢はいなかった。

「まあいいか」

深く考えることなく少年は散歩を続けた。

総矢は公園の外へと歩きながら携帯を取り出した。総矢は今日やるべき事を頭にハッキリ思い浮かべていた。登録されている数少ない電話番号の一つに電話をかける。

『……はい』

「あ、もしもし。おはようございます。朝早くからすみません」

『いえ、丁度いいタイミングでのモーニングコールですよ』

遠まわしに起こされたことを伝えた矢口に総矢は再び謝罪した。

「ホント、起こしてすみません」

『それはそうと、用件はなんですか？』

「あ、はい。俺の両親の墓の場所を教えてもらいたくて……」

『……そうですか。分かりました、口で説明するより地図の方がいいでしょう。一旦電話切りますよ』

「ありがとうございます」

通話を終えてから一分とかわらずに総矢の元には地図が添付されたメールが送られた。文章は無く、件名のところに『無理はなさらずに』と一言添えてあった。地図に表示されていた場所は総矢がいる公園からは少し遠いところにある。

（歩くのは……かなり時間かかりそうだな。……ん？）

総矢は矢口からのメールにもう一つ添付された画像があることに気付いた。表示させると、その内容はバス停の案内だった。幸いなことに、総矢が今要る公園の近くからもバスが出ている。

（この短時間でよくここまで調べられたな……。助かるな）

総矢は感謝を告げるメールを送ると、バス停へ向かって歩きだした。

検索？ ・ 早朝の出来事 ・ (後書き)

各話ごとのサブタイトルって結構難しいですね。

マジで次どうしよう……

搜索？ - 重要度 -

「ただいま」

「おう、おかえり陽太」

散歩を終えた少年、陽太が家に帰ると、陽太の兄が玄関で少年を出迎えた。彼が手にしていた書類の内の一枚が少年の足元へと舞った。

「悪い、陽太。それ取ってくれ」

「何だ？ 兄貴、もう仕事に出かけるのか？」

「まあな。あのテロ事件からもう一月以上経ったけど、確認したいから資料持って来いって上の人間がな。感謝してるぜ、さすがに俺1人でこの数の人間の調べるのは厳しかったからな」

グリグリと荒っぽく頭を撫でる。

「ふうん、まあバイト代は十分だったし構わな……え!？」

拾い上げた紙を見た陽太は目を丸くした。その紙には数人の男女が顔写真と名前が記載されており、左上には『7月7日 テロ事件 死亡者リスト』とある。その中の一人は先程出会った総矢だった。「どうした？」

「この人……俺さつき会った……まさか、幽霊？ だからゴンがあるんな反応したのか？」

「え？ おい、陽太。お前今何て言った!？」

総矢を指差して震える陽太を見て、彼の兄は詳しい話を聞き始めた。

総矢は、街から少し外れた小高い丘の上に到着していた。矢口から送られた地図の場所は個々の墓がいくつも並ぶ墓地とは異なり、綺麗に整備された所であった。そこには大きな慰霊碑が一つ置かれ、一人一人の名前が刻まれていた。石碑の周囲には数多くの花束が置かれている。犠牲者の名前は非常に多かったが、総矢はすぐに自分

の名前のすぐ近くに刻まれていた両親の名前を見つけた。

「父さん、母さん……俺の名前はあっても理紗のほはない、か」

しかし、やはりそこにも妹の理紗の名前だけは書かれていなかった。だが逆にそれは妹の生存を示していると総矢は信じていた。

(……父さん。俺は必ず理紗を守るよ、今度こそ『俺』が)

両親の名前に手を当てながら目を閉じ、硬く決意した。

陽太から総矢と出会ったという公園まで全力疾走できた兄は息を切らせながら周囲を見回す。

「クソツ！ やっぱりいないか……」

携帯を取り出し、連絡を取り始める。連絡先の相手は電話に出るとすぐに話しかけてきた。

『圭輔か？ どした？ お前から連絡入れるなんて珍しいな』

圭輔が電話をかけた相手は火口 煉。煉は昨日、大塚みことと話をしていた人物だ。

「煉、よく聞け。重要な情報だ。大塚みことと同じ航空機テロの生存者かもしれない男の目撃情報だ」

『……は？ お前何を言っ……』

煉に対し、圭輔は言葉を被せながら話す。

「名前は『シイ ケンヤ』、20代男性」

『生き残りって、生き残ってるのはもう大塚みことだけだろ？ ……』

……待て、『シイ ケンヤ』だと？』

煉は昨日のみこととの会話の中に出た男の名前を思い出した。

『圭輔、詳しく話せ。確かに重要かもしれない』

煉の目つきが鋭くなる。

一通りの説明を受けた煉から返ってきた返事は簡単なものだった。

『分かった。俺達全員で探すぞ』

「全員で？ 何もそこまで……」

『いや、俺の勘だがそいつはかなり貴重な情報もってやがるぞ。俺達情報屋が全員で動いてもそれに釣り合うほどの情報をな』

「分かった。俺は引き続き彼を探す」

通話を終えた圭輔は興奮していた。

(あいつの勘、意外と当たるからな。全員で動くほどの情報となる
と……やべえな)

検索？ - 重要度 - (後書き)

投稿遅くなりました。すみません。

遅くなりましたが、メリークリスマス！

検索？ - 検索開始 - (前書き)

サブタイトル変更させて頂きました。

搜索？ - 搜索開始 -

電話を終えた火口ひぐち 煉れんに同室どうしつにいた水谷みずたに 清正きよまさが話しかける。

「煉、今の連絡は何だ？」

「仕事だ。圭輔が面白い情報持つてきやがった。全員呼び出せ、清正」

彼らは情報屋。仕事はその名の通り『情報の提供』。ひどく危険な状況だが、それでも必要な情報がある時や、一般の記者たちが法に触れる危険があるため立ち入れない事情の場合、彼らに情報収集を依頼する。当然ながら彼らは法に触れるようなことは経験済みだ。「俺に命令する権限はお前には無い筈だ。それと先に説明をしろ」
「……ノリ悪いな。説明するって」
吐き捨てるように言った煉に対し、清正はあくまで冷静に話を進める。

「簡潔に説明してくれ」

へいへい、と口ではなく肩と目で返事をした。煉は昨日の大塚との会話を含め、内容の説明を始めた。

「なるほど……彼が本当に志井鍵矢だとしたら、貴重な情報を持っている可能性は十分にあるな。君の言う通り総動員で探すべきかもしれない」

清正が静かに告げた。

「大塚には黙って探すことを俺は勧めるが、どうだ？」

「何故だ？」

「今話しただろ。アイツは自分が殺し損ねたおかげで秘密を知られているだけの存在だと思っ込んでる。彼よりも自分の秘密を優先すると思っぞ」

「彼女に『見つけても殺すな』という命令を出したらどうだ？」

「どうだか……。まだ俺達のこと完全信用しきっていないんだ

ぞ？」

清正は目を閉じ、数秒考えた。

「……分かった。お前の意見を聞き入れよう。煉はすぐに搜索を開始してくれ、俺もすぐに出る」

「了解、そんじゃ」

煉は部屋の外へと駆け出した。

慰霊碑の傍で、総矢は立ち尽くしていた。目を閉じるとかつての出来事が次々に目蓋の裏に甦る。家に帰ったときにリビングで寛いでいた父親、食事の支度をする母親、二階から下りてきた妹、実に平和な日常の風景を思い出していた。だが、塗り潰されたように、あるいは靄がかかったように思い出の中で、家族の顔だけが見えない。思い返すたびに理由を考え、家族の記憶さえ無くしてしまうのではないかという不安に駆られる。

（ダメだ……分からない）

総矢はすぐ傍に立っていた木の根元に座り、再びボーッと慰霊碑を見つめていた。総矢以外にも僅かながら人はいる。花を手にした者、慰霊碑の前で手を合わせる者、目的は皆同じだった。

（あの事件の犯人はまだ捕まっていない……使用された爆薬は例の大使館から流れたものであることは間違いないとして、それを買った奴が……ん？）

総矢は見覚えのある人間が花を持って慰霊碑のところへ歩み寄るのに気付いた。

（あれは、大塚さん！？ ま、まあ確かにココに来てても不自然ではないけれど……）

総矢のいる位置は慰霊碑から見て間右の方向だ。迂闊に動かない限り見つかる可能性は低い。とは言え見つかることは命の危険に直結することを知っている総矢は木を楯に体を隠し、様子を見る。

「……」

慰霊碑の前に花をそっと置くと、みことは静かに手を合わせて目

を閉じた。長く目を閉じ、動かないみことを見ていた総矢は視線を外し、呼吸を整える。

(よし、バれてない……よな?)

再び総矢が、木の陰からみことの様子を覗く込んだ瞬間。

総矢は、大塚みことと目が合ってしまった。

検索？ - 検索開始 - (後書き)

前書きにも書きましたが、サブタイトルを少々変更させて頂きました。

今更ですみません。

当然ながら変更点は『検索』を付け加えただけです。

搜索？ - 逃走 -

みことは長く目を閉じ、手を合わせていた。だが、黙禱を終えて振り返った瞬間、木の陰で動く『何か』に気づきそちらに顔を向けた。

(え、人？)

顔を向けたと同時に目が合った。見覚えのある目だ。つい昨日その男の話をしたばかりなので名前はすぐに口に出る。

「……………志井、鍵矢……………」

呟きは総矢には聞こえない。だが驚いた表情からみことが自分の存在を認識したことは読み取れる。

(しまつった！ 最悪のタイミングじゃねーかつ！)

総矢はすぐさま再び木に身を隠す。ゆっくり再び慰霊碑のほうを覗き見る。大塚みことがこちらへ向かって来ている。その後方には慰霊碑の傍で手を合わせている人間がいる。

(まずい……………一般人もいる。巻き込むわけには……………仕方ない)

嫌なイメージが頭に浮かぶ。それを振り払うよう首を振り、総矢は決断した。目を閉じ、意識を集中させる。

(……………！ よし、これで見なくても攻撃のタイミングは分かる)

総矢が『能力』を使用し始めた。その間もみことは静かに歩み寄ってきていた。総矢が隠れる木の元までやってくると、みことは右手に炎を灯す。その炎は掌にピツタリと吸い付くように薄く、広がった。その手を一気に木へと突き出す。

(……………今だ！)

木はみことの手により紅葉型に焼け焦げた穴を開けた。総矢は真後ろからの攻撃にタイミングを合わせて避けると、みことの脇をすり抜けて全力で逃げ出していた。

(避けた！？ また？ なんて分かるの？)

みことは呆気に取られ、次の攻撃を繰り返して逃げた。振り返りながら左手に炎を灯した。だが、視界に無関係の人間が飛び込んだと同時にみことは手を止めた。

(……ここから攻撃してもおそらく避けられる。無駄に目撃者増やす必要もないわね)

残った選択肢は一つだった。みことは総矢を追って走り出す。

後ろを軽く見た総矢はみことが追ってくるのを確認した。

(よし、予想通り。あとは何とかして人気のない場所まで移動すれば……)

総矢は走りながら携帯を取り出し、周辺の地図を検索した。

(どこか早く見つけないと。……じゃないと体力が持たないな!)

総矢は地面を蹴る度にブレる画面を必死に凝視していた。

(えと、えと……ん？ あれは防塵用のカバー……?)

走る前方に工事が行われている建物を見つけた。その建物を取り囲むように「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた金属壁が立ち並んでいる。だが、物音は全く聞こえない。

(ここしかない。迷っている時間は無い)

総矢は立ち止まることなく中へと駆け込む。その様子を追いかけながら後ろから見ていたみことは正直驚いていた。

(自分が危ない状況だっというのにわざわざ人目の無いところへ？ 人混みに向かえば私だって迂闊に『能力』を使えないとか考えないの?)

自分に都合な状況だが、みことは逆に苛立ちを感じていた。

「ハア、ハア……体力が……くそっ」

二階のある一角。柱に寄りかかり、総矢は座り込んでいた。『能力』は使用していない。正確には『能力』を十分には使えない状況だった。後ろから追ってきているみことに対し、油断はできない。かと言って後ろを見ながら走るわけにもいかず、総矢は逃げている間、

能力を使い続けなければならなかった。だが、薄暗くて死角も多いこの廃墟の中に逃げ込めたのは幸いだった。見つからないよう休めばある程度落ち着くこともできるし、うまくいけば見つからないよう脱出も可能かもしれない。　　という総矢の考えは甘かった。

「出てきなさい！　出てこないならこの建物ごと焼き払うわよ！」
みことが入り口で叫ぶ声の中に響く。

「おいおいおい、本気かよ？」

実際、総矢が逃げ込んだ廃墟はそれほど大きくは無い。大きくないとは言え、三階建てのこの廃墟を焼き払うには相当の火力が必要だ。だが、みことが言うように廃墟ごと焼き払われる可能性も十分に有り得る。

（さて、どうするべきか……）

悩む時間はそう無かった。みことは総矢の返事を待たずに建物の内部へと炎を投げ入れる。殺すべき相手以外誰もいない、誰も見ていない。その状況がみことに能力の全力使用を促した。病院では他の階の人間に知られる危険を自然と考慮してしまい、自身で気付かない間に能力に制限を掛けていた。初めての全力　それはみことの想像を超えていた。

投げ入れられた炎球は廃墟の一階に深く入り込むと一気に膨張し、一瞬で一階を炎の海に変えていた。

搜索？ - 逃走 - (後書き)

もういくつ寝るとお正月？

という訳で来年もどうぞよろしくお願ひします。

『搜索』編の完結までまだまだかかりそうです。

搜索？ - 能力の威力と目撃情報 -

みことは廃墟の入り口で炎の海をただただ呆然と見ていた。

(「こんなに……威力があるなんて……んっ!?)」

直後、突然の眩暈めまいに膝を突く。想像を超えていたのは威力だけではなく、その分の体力の消費もであった。

(「……とにかく、1階にはいなかったようね。次……」)

深呼吸して、次の炎球を投げる体勢に入った。

階段から流れてきた熱い空気が総矢に階下で起きた出来事を伝えていた。

(「本気だ……この威力、洒落にならない。避ける避けないの問題じゃない!」)

総矢は外へ出るべきと判断した。だが既に一階は炎の海だ。

(「2階だし飛び降りるのは問題無いけど、その後は……だ、大丈夫だよな?」)

不安に思いながらもガラスの入っていない窓枠に手を掛けた。その時、下で攻撃態勢に入っているみことに気付く。

「げっ、やばっ!」

慌てて飛び降りた総矢を見て、みことは攻撃の手を止めた。

(「出てきてくれて助かったわ。一発でこれだけ体力奪われるのは厳しかったのよね」)

体力に不安があるのはみことだけではない。だが、みことは総矢に悟られまいと必死に余裕を見せる。

「避けるのは得意みただけど、耐えられる訳じゃないものね。避けようが無いと思ったのかしら?」

「俺は誰にも話すつもりはありません。それでも殺す必要がありますか?」

「何? 今さら命乞いなのか? 言っておくけど見逃すつもりは無い」

わよ」

みことが険しい顔で睨む。

「別に秘密がどうこうは今は大した問題じゃないのよ。あの事故での生き残りはもう私だけのはずよ。あんたは一体何なの？」

「俺は確かに志井鍵矢です！ でも俺にも……」

口に出しかけたが、咄嗟に留まる。

（なんて言えればいい……それに信用してくれるのか？）

「嘘ばかり言って……その人はもう死んでるのよ！ 他人の名を語る偽者め！」

みことの両手に赤い光が灯る。

（偽者扱いかよ。いや、そんなことより何とか生き延びないと……こうなりや仕方ない。どっちの体力が先に切れるか我慢比べだ！）
総矢は能力を使わずにいる余裕が無いと判断した。

清正は朝に総矢が目撃された公園とは別の公園で聞き込みをしていた。

ブブブブブ

ポケットに入れていた携帯が振動する。

「はい」

「あ、水谷さん？ 目撃情報です。頂いた画像データの人とよく似た人が今朝早くバスに乗ってたらしいです。行き先は、聞いた停留所からだとおそらく丘の上の慰霊碑のところですよ」

「よし、でかした！ 今度食事を奢らせてもらおう」

「まじっすか？ それじゃ期待し……」

相手の返事を聞き終わる前に清正は電話を切っていた。すぐに自分の車に戻り、煉に連絡を取る。

「俺だ。目撃情報だ。お前もすぐに今から言う場所へ移動しろ」

「了解、場所は？」

「テロ事件の犠牲者たちの慰霊碑だ。当然だがその周辺も探せ」
「分ーかってるって。すぐ向かう」

検索？ ・能力の威力と目撃情報 ・（後書き）

あけましておめでとうございます。

みことが、かつての病院を再現するかのように総矢に炎を投げつけていた。

「病院ではどうやら私のこの能力について喋らなかつたみたいね、それについては感謝してるわ！」

必死に避け続ける総矢に叫ぶ。

「だから言つただろ！ 他の人間に言つつもりは……」

「つまりこれでああなたの口ををここで封じれば、私の能力の事が知られる心配が無くなるってことね！」

「聞けつて！ うおっ、あつぶね！」

炎が総矢の肩の上を掠める。病院で腕を焼かれた時の記憶が総矢に冷や汗を流させる。

「相つ変わらず上手く避けるわね……でもこれでっ！」

総矢は自身の能力、他人の考えを理解する力を使っていた。だからこそ次のみことの攻撃が分かつた瞬間、必死に叫んだ。

「俺は誰にも言つたりしない！ それに俺は確かに志井……」

「うるさいっ！」

みことの両手から炎が線のように伸び、広範囲に広がる。やがて総矢を囲う円となると、炎は高く上に伸びて脱出不能の壁となった。そこから徐々に円が縮まり始めた。

（やつべ！ 前より炎の使い方上手くなってるし、まだ体力もなさそうだ。コレはさすがに……どうすれば、とか言ってる場合じゃ！）
「うあああああああ！！！」

総矢の悲鳴は燃え盛る炎の壁が一箇所に集中した瞬間の轟音にかき消された。

「ハア……ハア……」

大塚みことはかなりの体力を消費していた。病院でかつて総矢を殺そうとした時より炎の扱いにも慣れ、体力も十分な状態だったと

は言え、避け続ける総矢に能力で攻撃した量も相当のものだった。

「ハア……何とか、間に合ったか」

総矢は生きていた。正確には水口によって生かされていた。

「た、助かった……のか？」

炎の壁が総矢を包み込んだかと思われた瞬間、みことと反対方向からやってきた水口によって助けられた。後方から突然、水が炎の壁をぶち抜いて浸入し、総矢の全身を包んだ。その水膜により総矢は炎の壁から守られた。

「水谷さん？ どうして助けるの！？」

当然ながらみことは我慢ならない様子で叫ぶ。

「彼は私の能力を知っているのよ！ それにテロ事件の犠牲者を装っていた！ だから生かす理由なんて……」

途中で言葉を止めた。清正の眼鏡越しに見る瞳が恐ろしく冷たい。

「何か？ 文句は、ないよな？」

言葉は至って普通だ。他人が聞いても別に何とも思わないはずの言葉、

「……わ、分かったわ」

だが、みことは大人しく従っていた。視線を外し、従順に従うその姿は親に怒られる小さい子供のようにだった。

（何だ、この人？ 大塚さんがこんな素直に従うなんて……）

驚きのあまり総矢は言葉を失っていた。

「大丈夫だったか？ 君に少し話を聞かせてもらいたいんだ」

微笑みながら座り込む総矢に手を差し伸べる。

「あ、はい。ありがとうございます。うわっ……あれ？」

清正に引かれ、一度は立ち上がったものの膝に力が入らず思わず座り込んだ。

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫、ではありません。ただ少し疲れて……話は座ったままでも？」

「ああ、問題ない。では早速、」

清正の表情が真面目なものに変わる。

「先程、『俺は確かに志井……』と言っていたが、君は志井鍵矢なのか？」

直球だ。総矢はここで嘘をつくような真似をしようものなら間違いなく命が無いことを確信し、話すことに躊躇いはしなかった。だが、それだけではない。何故か分からないが目の前の人間には話すべきだという直感が働いた。

「……そうです。信用してもらえらることを前提に話しますが、俺は確かに志井鍵矢です」

「では何故君は死んだことになっている？」

清正の二つ目の問いかけにも総矢はすぐに答えた。

「分からないんです。テロに巻き込まれて、病院で目が覚めた時は既に『志井鍵矢』とその家族は全員死亡していたんです。妹に至っては存在すら無くなっていました」

「……」
黙って聞いていたみことが拳を硬く握り、歯を食いしばる。

（よくそんなことを平気でいえるものね！ 私達をバカにしてるの？）

みことが総矢を再び睨む。表情の変化を清正は見落とさない。

「大塚さん、駄目だからな」

「……」

「では続けて、君は能力を使える、違わないな？ 君の能力は何だ？」

「……え？」

総矢は耳を疑った。みことに焼かれる直前に現れた清正が知っている理由など思い当たらない。頭の上に疑問符が浮かんでいるような表情の総矢に爽やかに話す。

「『どうして分かる？』って顔だな。簡単だ、今の君の状況を見ればすぐに分かるさ」

搜索？ - 能力の告白 -

清正の携帯が鳴る。

「失礼、少し待っていてくれ。どうした、煉？」

『目撃情報だ。今、慰霊碑のところから下った先だがどうやらその先の……あ？』

携帯で通話しながら煉が総矢達の元へ走ってきた。

「遅かったな、煉」

「見つけたんなら連絡くれよ」

「悪い。忘れてた」

「まあいいや、それでコイツが？ へえ、確かに画像データと同じだな」

「ちょうど今彼から話を聞き始めたところだ」

「丁度いいタイミングだったのか。んで大塚、何でお前がココに……」

「話を戻そうか。鍵矢、君の能力についてだが……」

言葉だけでなく、煉の不満そうな顔までも無視して清正は総矢への質問を無理やり続けた。

「えと、の、能力？ そんなもの……」

「誤魔化すな。君は能力を持っている。それは間違いない」

清正は総矢の発言をすぐさま否定した。

「さつきも言ったが今の君の状態を見れば分かる。立つ事すら十分に出来ないその状況は明らかに体力消費が異常だ。能力を使っていた大塚さんでもここまで疲弊しているのだから、少なくとも君は大塚さん以上に能力を使っていたんじゃないのか？」

その洞察力からは逃れられない。総矢はそう感じた。清正に話すべきと思いはしたが能力についてまでは流石に話すか迷っていたが、踏ん切りがついた。

「……はい。確かに俺は能力が使えます、ですが……」

困った表情を浮かべて言葉を詰まらせる。遅れてきた煉がやや不満気味に告げる。

「何だよ？ 早く言えよ」

「証明のしようが無いんです。大塚さんみたいに炎が出せたり、先程の貴方のように水を操ったり出来るわけじゃないんです」

「だから前置きはいいから早く言えつての」

煉が更に不満げに言う。

「……人の考えが読めます」

その言葉の後、沈黙が続いた。

「……は？」

「人の考え？」

(なるほど、だからあの時も今日も……)

みこと一人が納得していた。納得しきれない清正と煉は互いに顔を見合わせる。

「それはおそらく本当よ」

みことの言葉に二人は振り返った。だが、二人は再び顔を見合わせる。と困った表情を作る。

「悪いな。君には確信があるみたいだが、どうにも信じきれないというか……」

「ああ、俺もだ」

信じきれない二人に総矢は提案をした。

「それなら明日、またここに来てもらえますか？ 明日になれば体力も回復してますからその時なら証明できると思います」

「……どうやって？」

二人が声を合わせて尋ねる。その問いに、総矢は自信満々な顔を向けた。

「来たら分かりますよ」

搜索？ - 能力の告白 - (後書き)

会話部分がだんだん増えていっています。

これ言ってるの誰？のような部分は極力作らないよう努力します。

分かりにくい、もしくはそれくらい分かるから一々書くな等ありましたら遠慮なくコメントなりなんなりしてやって下さい。

自分の勉強にもなりますんでぜひお願いします。

搜索？ - 連行 -

煉が総矢の提案に反対する。

「方法はともかくだ、明日お前がまたここに確実に来るって俺は信じきれねーな、なあ清正」

清正はその言葉にニヤリと笑うと、煉と反対の意見を口にした。

「そうか？ 俺は信じられるぞ。信じられないならお前が責任持つて今日は監視しろよ。それから彼は今日、能力使いすぎたせいで口々に立てやしないみたいだからな」

「あ、汚っ！ お前それは……」

「ならその役目なら私が殺^やるわ」

二人の話し合いにみことが自ら申し出た。

（じよ、冗談じゃない！ せめてどつちかは付いてきてくれ！ 今『やる』って明らかに意味違ったぞ！）

「大塚さん？ 分かってるよな？」

改めて清正に注意を促され、みことは再び体を硬直させる。

「……しゃーねーな、俺がやりゃいいんだろ」

「悪いな。任せるぞ」

「おい、車には乗せるよ」

総矢は煉に肩を借りながら何とか立ち上がる。

「分かっている、こつちだ。大塚さんも乗っていきな」

全員が清正の後に続いた。

「さて、どうする？ コイツをアジトに連れて行く訳にはいかねーだろ？」

助手席の煉が運転席の清正に話しかける。

「いいんじゃないの？ もし問題があるようならその場で……」

（……もしや俺はとんでもない危険地帯に連れ込まれるんじゃないのか！？）

「大塚さん、俺はアジトを殺人現場にしたくはないんだが」
清正はみことの発言に対し、あくまで冷静に対応した。

（え？ 平然と何言っただよこの人！）

「別に手足縛って外に連れ出して人気のないところで殺ればいいだけだろ？」

煉も平然とそんな事を言っただけのける。

（ヤバイ！ この人達とんでもなくヤバイ人達だ！）

総矢が目を見開いて引きつった顔をしていることに煉が気付いた。
「そんなに怯えんなよ、大丈夫だって。今の話はあくまで最悪の場合の対処法だから」

「いや、あの……ですね」

「どうした？ 君が嘘偽りを言っていないなら何も心配はないだろ？」

「……」

清正の声は相変わらず単調だ。みことは無言のまま総矢を睨んでいる。

「嘘偽りは確かに無いですけど、堂々と人殺しの算段始めるような人達を危険と思うのは至極当然のことじゃないんですか？」

煉と清正が顔を見合わせる。二人の表情は「何か変なこと言ったか？」と言わんばかりに頭の上に？（クエスチョンマーク）を浮かべているような表情だ。

（だめだ。この人達、普通の人間じゃない……危ねえな）

「す、少しならまだ『能力』使えると思いますから……」

何としても彼らに連れて行かれることを避けるために総矢は苦し紛れに口を開く。

「駄目だ。体力が十分な状態でない場合『能力』はかなり質が低下するんだ」

清正によつてあっさり却下される。

「要は俺達が怖えてことだろ？ ならお前が行き先を指定しろよ」

「……あなたの自宅は？」

察した煉の提案にみことが乗る。

「俺が目を覚ましたときには焼け落ちていました」

事件後、総矢の家、つまり志井家は全焼してしまっていた。

「そ、そうか……それなら君は今どこで寝泊りしてるんだ？」

清正は総矢の遠くを見る目と暗い表情から嘘ではない印象を受けた。何とか会話を続けようと口に出した質問は総矢にとってまたもや答えにくいものだった。

「色々と事件に巻き込まれて、主に病院です……」

「……」

「……」

「……ホントに？」

誰もが疑問に思ったことをみことが口にした。当然ながら信じがたい話だ。

「事実ですよ」

「どう信用しろっていの？」

総矢は困惑した。実際、証明のしようがない。証拠になるようなものはないし、あったとしても受け入れられるかどうかも怪しい。

選択肢は一つ、総矢は『当事者だから知っている事実』を口にすることを決めた。

「信用してくれる事を前提に話します。もちろん全て話すことは出来ませんが俺が事件に巻き込まれたから知っていることを話します。それで信用するかの判断はお任せします」

総矢は深く息を吸ってから話し始めた。

「少しばかり前にあった遺伝子研究所の事件、それと先日の大使館での事についてです」

タイトルめいた事を口にしただけで清正の目が鋭くなる。

「待て、『事件』？ 今、遺伝子研究所の『事件』って言ったか？」

「え？ あ、はい。『事件』ですが、それが何か？」

総矢は自身なく返答する。その返答で気付いた煉とみこともハツとする。驚き固まる車内の空気に総矢が驚いた。数秒の沈黙の後、

「き、清正、どういうことだ？」

「あれは世間一般には事故として扱われているはずだ。それを知っているということは……」

清正が深く考え込む。みことは相変わらずの視線を総矢に向けながら口を開いた。

「水谷さん、コイツが犯人だからじゃないの？」

「その可能性もあるが、それならそれはそれで重要人物だ……仕方がない。大塚さん、これで彼の目を塞いでくれ」

「え？ おい、清正。まさか」

「アジトに連れて行く。だが流石に行き先は教えられない、ということ。勘弁してくれよ」

総矢には既に選択肢が無くなっていた。必死に不安を心の中でかき消そうと努力した。

(殺されたり……しないよな、マジで！)

到着するまでの間、誰もが口を閉ざしていた。煉と清正は何かを考え込むような表情、みことは相変わらず疑いの眼差しを総矢に向け続ける。もちろん目隠しをされた総矢にはそんなことは分からない。移動の間に少しでも眠れば体力の回復ができたかもしれないが、とてもじゃないがその余裕は無かった。

「着いたぞ、つと鍵矢！ お前はまだそれ外すんじゃないぞ！」

煉が車のドアを開けながらクギを指す。

「分かってますよ。俺だつて命は惜しいですよ」

苦笑いしながら答える総矢に煉は再び肩を貸す。

「大塚さんも彼の話聞いていくか？ ここから先は自由にしていぞ」

「聞いていくわよ、ここまで着たら当然でしょ」

「それなら1番の会議室に先に行つてくれ。俺は少し荷物を取つてくる」

「分かつたわ」

清正の足音が遠くなり、すぐに聞こえなくなった。総矢は見えない状態のまま、足音との消えた先とは別方向の『1番の会議室』へと向かった。

扉の開く音。中に入る。閉じる音。もうひとつガチャリという鍵の掛けられる音。その後、総矢は目隠しを外す許可を得た。

「ふう……」

思わずため息が出る。目隠しを外した総矢の目に入ったのは、完全に外部と隔絶された部屋だった。窓は無く、出入り口は今通つて入ってきた一つのみ。現状の確認後、自分の後ろを振り返る。何の変哲も無い普通の扉、その脇には大塚みことが立っている。まるで部屋の唯一の出口を自らの手で封鎖するかのよう。

「悪いな。もう少し待っててくれ。清正は多分すぐに来るから」

煉が総矢に一言掛ける。先程自分を殺すことについて会話していた人物とは思えないごく普通の言葉に戸惑う。

（あれ？ やつぱりそんなに危ない人じゃ……ないのか？ さ、さっきのが冗談だよな？）

外からの軽いノックにみこことが扉の鍵を開ける。

「待たせてすまないな」

軽い謝罪と共に会議室に入ってきた清正。その手にはノートPCがあつた。

「それじゃ早速、まずは自己紹介からでも。そうは言っても名前ぐらいだが。俺は水谷清正」

「火口煉だ」

「大塚さんとは知り合いみたいだから今は省略させてもらおうぞさて、本題だ」

清正の表情が真面目になる。真面目なときの清正の目は、冷たくすべてを見透かされるような不思議な威圧感がある。

「な、なんでしょうか？」

「遺伝子研究所で君が知っている限りの内容を話してもらえるか？」

「分かりました。……あの、けど関った人物を特定できる内容は伏せさせてもらってもいいですか？」

「分かった。それで構わないから話してくれ」

「まずは……」

総矢は一人で簡単な概要を話した。事件が発生したという情報を得た人物から、内部に残った人達を助けて欲しいと頼まれて遺伝子研究所へ向かったこと。研究所内では動物が暴れ周り、死者や怪我人がいたこと。そして

「あの研究所では人体実験も行われていたようです」

黙って話を聞いていた三人は無表情、怒り、疑いとそれぞれ異なる表情を見せた。

「証拠等はないとは思いますが、俺は人体実験の被験者と主張する人物に会いました」

「研究所の中か？」

煉の問いかけに無言で頷き、説明を続ける。

「異常な脚力や皮膚の硬さ等、確かに普通の人間では有り得ない体を持っていました」

無言且つ無表情で話を聞いていた清正がそこまで聞いてようやく口を開いた。

「鍵矢、俺達と手を組まないか？」

口元には不敵な笑みを浮かべていた。

清正の突然の提案に猛反発したのは他でもない、大塚みことだ。

「冗談でしょ？ こんな話を信用した上に仲間にする？ 何を考え
てるの？」

煉もみことに同意していた。

「俺も同意見だ。流石に勝手にその話をお前1人で進めるのは納得
いかねえ。説明しろ」

「そうだな。……あの『事件』には色々と裏があるって情報は2人
とも知ってるな？ 実は個人的に気になることがあって調べていた
んだ」

「それってまさか……」

「煉、今は」

口を開きかけた煉を静止し、みことと総矢に一度視線を向けてか
ら首を横に振る。そんな二人の無言のやり取りを見ていた総矢はみ
ことに視線を向け、考えを巡らせる。

（……何だ？）

「とにかくだ、俺もその事件については相当調べた。ガセも多いが、
今鍵矢が口にした情報はおそらく事実であろう事ばかりだ。加えて、
俺が知りえた情報より更に具体的だ。手を組む理由には十分だと思
うぞ、そこから生きて戻ってきたことが事実なら尚更な」

「だからやつぱり犯人なんじゃないの？ それなら生きてられるの
も当たり前よ」

「確かにその可能性も0じゃない。ただ俺が犯人、つまりはその人
体実験の関係者なら間違っても口にはしないとと思うが。彼にとって
も話すことにメリットが無いと思うが」

「……」

みことは深く考え、黙り込んだ。

「その人体実験っての自体が嘘なんじゃ……」

「煉、それは嘘じゃない。そこは俺が仕入れた情報の中でも確かだ。あの施設の地下に『何か』があったことは確実だ」

自信満々に言い切る清正に煉も反論できなかった。

「ちよつといいですか？ 何でその情報を今まで二人に黙っていたんですか？」

総矢からの質問に少し驚きながらも清正は笑顔で答えた。

「さつきも言ったがこの事件は俺の個人的に調べていた。煉は俺と同じで個人的に調査したいと思うだろうが、コイツには大塚さんの監視を任せていたからな。それを放棄されたらたまらんって訳で話すタイミングが無かつたんだ」

そこまで話し、軽い咳払いをしてから改めて総矢に問いかける。

「2人にはここまで話したことで分かってもらえたと思うが……鍵矢、君はかなり正確且つ詳しい情報を持っている。情報源に付いて色々と聞きたいがさつきの話しぶりからして言いたくない、もしくは言えない事情があるみたいだな。それについては俺達からは聞かないと約束しよう。だから『仲間』ではなく、『手を組む』と言う関係にならないか？」

「そちらに情報を与えることで俺にどんなメリットがあるんですか？」

総矢はあくまで冷静に尋ねた。

「そうだな……働きや情報提供に応じた報酬でどうだ。あるいは君が知りたい情報で、俺達が知っているものの提供なんてどうだ？」

例えば、例の航空機爆破テロのものとか」

「その情報つてどの程度のもんですか？」

レベル制限のあるID情報の一部を入手できる総矢にとってはある程度以上の情報でなければ手を組む意味が無い。

「さつき簡単に、とは言え話してもらったからこちらも話をすべきだな。知っていたならもう少し詳しく話すが、大塚さんと君が巻き込まれた事件の犯人のテログループは『鬼団』きだんという。俺達が付けた名前だが、それなりに浸透している」

さらりと言い切った清正の言葉の全てを理解するには、時間がなかった。

(……テロ、事件の……犯人？ アレをやったヤツらの名前が、) 目を丸くし、固まる。震える口からその名前が再び呟かれる。

「き……だん……？」

「そうだ、つておい！ 清正、それ教えてよかったのか？」

煉は少し心配そうな顔で尋ねた。

「いずれ彼も知るつて。使えるカードは使えるうちに使わないとな。

……それに俺は、『志井鍵矢』そのものが重要な情報に思えてならないんだよ。お前もそう感じたから俺達全員で鍵矢を探すと言い出したんだろ？」

嬉しそうに語る清正に、煉もみことも何も言うことはできなかった。

搜索？ - 交渉 - (後書き)

多少強引な展開ですかね……

搜索？ - 協力関係 -

総矢は、固まったまま思い出していた。爆発の瞬間の機内を、轟音と共に聞こえる悲鳴を、そして、迫りくる赤と黒の爆炎を。迫る赤と黒の波を目の前にして目を閉じたところで総矢の記憶は途絶えている。回想を終え、総矢は一度目を閉じて深く深呼吸した。

「その……鬼団ですか？ 何でそんなこと知っているんですか？」
改めて驚いて尋ねる総矢に対し、清正はニヤリと笑って答えた。
「今は教えられないなあ。手を組んで、俺達に有益な情報をくれたら、あるいは俺達に何かしら協力してくれれば教えるよ。それで、どうする？」

数秒間の沈黙。総矢は考えながら煉、みこと、清正の順に視線を移動させる。やがて導き出した答えを口にする。

「分かりました。手を組みましょう、といっても出来ることは限られるとは思いますが」

「ああ、それで十分。これからよろしくな、志井鍵矢」

清正と握手を交わした。その直後、緊張の糸が切れた総矢は座り直した椅子で意識を失った。

「……もう、限界だったんだな」

「おい、清正。今更だが『能力』について聞いてないぞ」
「目が覚めたら使えるようになってるでしょ？」

「そうだな。煉、まだ空き部屋あったよな？」

「泊めるのか？ そんなことしたら……」
「相手の考えが分かるんなら外へ連れ出しても大した意味は無いだろう？」

「まあ、確かにな……」

「でも、勝手に動かれても……外から施錠できる部屋にしておいた方がよくないかしら？」

「それなら物置部屋が丁度いいな、古いがソファもあつたはずだ」

「また俺が担ぐのか……」
総矢を連れて三人は物置部屋へと向かった。

翌日、総矢が目を覚ますと見知らぬ天井が目に入る。

（俺はまた、気を失ったのか……）

見ていたかのようなタイミングでみことが部屋に入ってきた。思わず総矢の表情が硬くなる。

「起きたのね。丁度いいわ。……そんなに警戒しなくても平気よ。

ここの協力者になった以上、私が手を出すメリットもないからねえ」

「そ、そうですね。それなら安心です……」

表情と言葉は全く一致していない。その様子に不満を感じつつもみことは用件を伝える。

「来て。水谷さんと煉が待ってるから」

「え？ ああ……でも俺に何の用が？」

「昨日はちよつとつやむやになったから、今からあんたの『能力』を調べるのよ」

エレベーターで地下へと向かう。連れられた先の部屋にいたのは煉と清正の二人だけだった。異常にテンションが高まつてる様子の煉が尋ねる。

「朝飯抜きでも『能力』使えるよな？」

昨日の部屋と比較すると非常に広い。その上かなり壁面が頑丈そうにできている。

「いけるはずですよ。それよりこの部屋は？」

「ここは、簡単に言うとお訓練場だ。割と外部の人間に見せられない道具も使ったりするんで、窓のあるような場所に作るのがちよつとな」

清正が頬を掻き、苦笑しながら答えた。

（確かレイルのところでも初めて行った時の武器訓練も地下だったな……ってことは……）

過去の記憶と比較し、取り扱っている道具とやらをイメージする

と同時に嫌な汗が頬を伝う。

「あんたの能力もだけど、どれくらい戦えるのかも知りたい。って事で煉が少しばかりあんたと戦いたいんだってさあ」

「はい？ 今から？」

みことの突然の発言に大声で聞き返した。煉のテンションは更に上がっている

「平気平気！ 死なない程度に能力抑えてやるから、覚悟はいいな？」

気付けば清正とみことは総矢達から離れて壁際で観戦状態になっていた。

(いつの間に。仕方ない、か……よし。いける)

能力を発動させる。だが腰は引けた状態のままだ。

「い、いいですよ」

「つしゃ、いくぜっ！」

煉が勢いよく総矢に突っ込んだ。

搜索？ - 能力の判定 -

右側頭部への蹴り、正面胸元に左手の正拳、続けて右手の裏拳……そこから最後は顎狙いの回し蹴り。それらの一連の流れを全て総矢は受け流していた。

（へえ、確かに俺の攻撃の前から受け流しの動作が始まってるな）
「だが、それだけじゃない」

清正が呟いた。

「突然、何？」

隣のみことが当たり前の疑問をぶつける。

「鍵矢の初期動作は確かに全て煉のものに合わされ、尚且つ煉の攻撃の前に始まっている」

「だから能力は間違いなく……」

「だが、そうであつたとしても動きが無駄が無さ過ぎる」

「そう？　動きが分かるならアレくらい誰でもできるんじゃないの？」

実際、清正の意見は正しかった。総矢は常に煉の動きに対し、最良の立ち位置へ動く。単純に避けるだけではなく、次の自分の反撃と煉の体勢をも考え理想的な立ち位置へと足を運ぶ。突然、煉が攻撃を中断した。

「おい、鍵矢！　お前も少しは攻撃してこいよ」

「カウンター狙ってる相手にわざわざ攻撃仕掛けるほどバカじゃありませんよ！」

「へえ、そこまで分かるのか。そんなじゃあ……」

煉の動きが速くなる。煉はここまでの間、常に初動と同時に攻撃方法を頭の中で呟いていた。考えながら体を動かすという動作は自身では意識せずとも確実に煉本人の動きを僅かながら鈍らせていた。『考える』行為を止めた煉の動きは先程の動きよりも明らかに速い。

「くっ！　うおっ！」

それでも、何度も繰り出して拳、蹴りは総矢に重度のダメージを負わせることはできなかった。だが、避けきれない攻撃を受ける回数が徐々に増えていたのも事実だった。

「ハア、ハア……感覚に頼った無意識の攻撃もここまでかわされるとはな」

煉は軽く息を切らしながら少し悔しそうに呟いた。総矢は至って冷静な表情をしていた。

（……って。防いでるはずなのにそれがここまで痛いつてどういうことだよ）

だが、それが総矢の本音だった。

「フウ……。よし、それじゃこつからは本気だ」

「え？ まだやるつも……」

口を開きかけた総矢は慌てて後ろに飛びのいた。総矢が立っていた場所は火柱が立ち上る。

（ほ……炎？ 大塚さんと同じ……いや、この人の能力はそれよりもヤバイ！）

「ギリギリ……とは言え、悪くねえ反応だな」

（っ！ 確かに今のはヤバかった！ 能力を一瞬でも解除したら死んでいたな……）

先程までの楽しそうな表情は煉から完全に消え失せていた。本気というのは嘘では無かった。その煉の表情の変化を見ていた清正も更に真剣な表情へと変わる。

「どうしたの？」

思わずみことが尋ねる。

「ここからが本番だ。彼が危険になった時のための対策も含めて、俺も気を抜いてられない」

緊張した雰囲気の中、みことは煉の攻撃を避け続ける総矢に視線を戻した。視線の先では総矢が煉の炎を巧みに避け続けていた。みことが視線を戻した直後、これまで防御か受け流しに徹していた総矢が初めて拳を振るった。

(このタイミングでの俺の攻撃は考えてない！ これならっ！)
だが、煉は拳を払いのけそのままカウンターで総矢の顔面に肘を入れる。

「がっ……いつてえ！ な、何で……？」

頬を押さえながら体を起こし、総矢は不思議そうに煉を見上げる。
「何で、って何がだ？ 俺はお前のパンチを見てから動いただけだぞ」

「俺の攻撃について全く想像してなかった筈なのに、って事ですよ」「イヤ、単純に遅いだけだ。振りもデカいしな」

実際、総矢の攻撃はそれ程遅くは無い。それでも煉にとっては『遅い』と感じるレベルだった。

「……成程な。大体分かった。煉、鍵矢、終わりだ」

一人頷きながら清正が突然、二人に終了を告げた。

「ハア？ 今から面白くなりそうだったのに……」

(た、助かった……)

過度の緊張により、総矢の体力消費は想像以上に早かった。

「それは別にどうでもいい。俺達が知りたかった鍵矢の能力と実力は十分に分かった」

「……あー、そーかい……」

煉の気の無い返事を聞き流し、清正は二人に歩み寄る。

「2人ともお疲れ。それから鍵矢、最後の質問だ」

清正は鍵矢を見て真剣な表情のまま尋ねた。

「君は記録上死んでいるはずの人間だ。何故生きている？」

検索？ ・最後の質問 ・（前書き）

ファイナルアンサー？

搜索？ - 最後の質問 -

清正の質問後に沈黙が生まれる。

「……ホントに今更、ね」

「そっぴやそっぴだな。大して気にしてなかったが理由を聞いてなかったな」

みことと煉がそろって総矢に注目する。

「答えてくれるな？ これまで君が話してくれた事は全て事実のようだからな、今なら大概の事なら信じられるぞ」

清正の再度の問いかけに拒否する理由も思い付かなかった。

「……事件に巻き込まれて目を覚ました病院で俺が最初に医者にされた質問が『あなたは誰ですか？』でした。気を失っている間にDNA鑑定を行ったそうですが、該当する人物は存在しない。それに志井鍵矢という人間の死亡はDNAで確認されていました」

総矢はそこまで言うと、苦笑しながら最後に一言加えた。

「……つまり、俺にもよく分からないんです。ただ、俺は志井鍵矢である事は事実です」

煉とみことは呆れた顔をしていた。

「そうか。分かった……」

清正が短く返事をした後、静かに目を伏せた。

（調べる必要があるそうだな……）

「ん？ 待てよ、『志井鍵矢』という人物の死亡が確認されているならお前は今も死者を名乗ってるってのか？」

煉にしては的確な質問だ。と言わんばかりの視線が一齐に集まる。

「いえ、俺はその……今は『崎見総矢』（さきみそうや）って名乗ってます、まあ色々あつて」

総矢はみことに一瞬視線を移してからそう言った。

（さすがにあなたに命を狙われていたので別人名乗ってましたって言うのは、なあ……）

「なら私達はアンタの事『総矢』って呼んだ方が良さそうね」

「そうしてもらえると助かります。『総矢』って名乗ってから関わ
るようになった人達も結構いますから」

「よし、総矢！ それじゃ朝食だ。上へ行こう」

エレベーターへ向かって歩き出した清正に続き、全員が地下を後
にした。

地下から出た総矢は、清正の部屋にいた。

「俺1人に用事って何ですか？」

「そんなに警戒するな。ただの事務手続きみたいなものだ。ID貸
してくれ、登録する」

清正は総矢のIDを受け取ると自分のPCに接続した。

「……登録完了つと。ほら、返すぞ。これでそのIDがあれば君は
この建物に入れる」

「……いいんですか？ この人間じゃなく、ただの協力者の俺な
んかに……」

「協力者なんだろ？ 君が俺達に危害を加えるメリットがあるとは
思えないんだが」

「簡単に人を信用しすぎじゃないですか？」

「君が言える台詞じゃないだろう」

清正は余裕の笑みを浮かべている。

「仮に、俺の仲間にかやらかすヤツがいたとしたらその前に俺が
そいつを潰す」

その時の清正の表情は、酷く冷たいと同時にどこか寂しそうだっ
た。

「とにかく、丸1日引き止めて悪かったな。家まで送ろ……ん？

家は焼け落ちたんだっただか？」

「は、はい……そうです……」

「……」

苦笑しながら答えた総矢。何かを考えながら清正は総矢を見てい

だが、不意にニヤリと笑った。

「一仕事協力してくれるなら、住居を提供しよう」

総矢が驚いて清正を凝視した。清正は表情を変えずに続ける。

「……やってくれるかい？」

「内容を聞かせてもらってから決めたいんですが」

「ただの潜入調査だ。ある工場に潜入して情報を収集してきて欲しい」

（……工場？　なんでそんなところを……？）

「判断材料として言えるのはここまでだ。当然やってくれるなら内容は全て話す」

「やります。内容の詳しい説明をお願いします」

総矢はすぐに結論を出した。

（『住む場所』は必要だ。それと、何か気になるんだよね……）

検索？ - 最後の質問 - (後書き)

Yes, of course.

という訳で『検索編』これにて終了です。
中途半端に次が始まってる感じで申し訳ないです。

調査？ - 内容 -

「潜入先はここからそれ程遠くない。海岸沿いの工場地帯の中の1つだ」

清正が総矢の目の前のテーブルの角に触れると、上面全体が瞬時に地図へと変わった。

「ただ、正確な位置が掴めていない。ここから……ここまでのどこかに在る筈なんだが」

清正が指でなぞった範囲はかなり広い。一つの建物が巨大なこともあり、軽く見積もっても5km四方はある。

「こんなに……広いんですか？」

「だからこそ君にやってもらいたい」

清正は左手でずれた眼鏡を掛けなおし、不敵に笑いながら告げた。「君の『能力』があれば尋問なんて野蛮な真似はしなくても済むのは当然だ、下手に聞き込みをする必要さえ無いだろう？　つまり、君はしばらくここにいてだけで良いんだ」

「……そこに入ること自体難しいんじゃないですか？」

巨大な工場エリアの入り口にある嚴重なセキュリティに目を落としながら尋ねた。

「逆だ。入れはしても出るのが困難なんだ、ここは」

清正は目を細めながら続けた。

「これまでも俺達の仲間が何人が調査に向かっている。戻ってきた人間は皆、その時の事は何も覚えていない。何を見たのかも何をしていたのかも……一番悲惨なヤツは、自分の事すら分からなくなっていたんだ……」

総矢は音を立てて唾を飲み込んだ。

「記憶を、消した……？　一体どうやって？　それにそうまでして守る秘密って……」

清正が頷く。

「そう、それを調べるのが目的だ。ここまで話しておいてなんだが……」
「やめませんよ、俺は行きます」

「……そうか。少し準備が必要だ。2日間待つててくれ。それから……ほら」

清正は机の中から鍵を取り出し、総矢に放り投げた。

「つと。……301室？」

「ここの中の一室だ。そこを好きに使ってくれ」

「いいんですか？」

「くどいぞ。協力関係になったんだろ？ ID登録もしたし、出入りも自由だ」

「……どうも」

総矢は清正の部屋を出た後、まずは受け取った鍵の部屋へと向かった。

「ここ、か」

鍵を開け、部屋に入る。狭い部屋の中にはベッドが一つだけ置いてあり、それ以外の物は何一つ無い部屋だった。

「ベッド付か、有難いな……」

総矢はベッドに仰向けに倒れ天井を見上げた。

(記憶を消す、か……記憶……を……消す……?)

徐々に^{まぶた}瞼が重くなり、やがて総矢の意識が途絶えた。

「清正、本当に総矢にあそこの調査任せるのか？」

「ああ、適任だと判断したんでな。何か不満があるのか？」

煉が清正の襟に掴みかかった。

「……何だ？ 言いたいことがあるなら口で言え」

「……っ！ てめえはまた犠牲者を増やしたいのか！」

「総矢が自分で行くと言った」

「だからって！ あいつの記憶が消されてもいいつてののか？」

「いずれは誰かがやらなきゃならない。総矢なら無事に戻る可能性

「が高いから俺は提案した。それがそんなに許せないか？」
「今の総矢が行ったところでどうにかなるとは俺には思えない」
「それはお前の主観でしかない」
「そう言い切った清正が煉の手を振りほどいた。
「……これ以上は話しても無駄みてーだな」
「そうだな。これ以上は時間の無駄だな」
「俺は総矢のサポートに入るぞ」
「お前が？ ……止めても聞くつもりはないな？ 好きにしろ」
煉は荒々しく戸を閉め、清正の部屋を後にした。

調査？ - 内容 - (後書き)

数少ない読者の皆様、遅くなって申し訳ありません。

先週一週間色々手が離せなくなり、休みました。

これからもちよくちよくこんなことがあると思いますが、どんな形であれこの小説は完結させるつもりなので、これからもよろしくお願ひします。

調査？ - 普段通り -

『鍵矢？ いるの？』

下の階から聞き覚えのある声が聞こえる。

『ん、なんか用？ 母さん』

自室で寝転んでいた総矢が気の無い返事をした。

『ちよつと牛乳切れたから買ってきて』

『……理沙に頼んでくれよ……』

『……何か言った？』

部屋で独り言のように呟いたはずの声は正確に母親の耳に入っていた。

『すいません。すぐいってきます』

『よろしい。急いでね』

嫌々ながら階段を降り、扉に手を掛けた。

『待ちなさい。あんたすぐ何でも忘れる……ホラ、お金』

『あ、ああそうだった……』

金を受け取るうと振り返った

(……ん。まあ夢、だよな……。それにしても、やっぱり顔は見えなかったな……)

時計を見ると午後三時を回っていた。

「そりゃ腹も減るわけだ……行くか」

建物の外に出た総矢は自分がいた場所を知って驚いた。清正達のアジトであるこの建物はレイルの店から歩いて五分程度しかない場所にあった。

(こりゃいい、随分と便利だな)

戸を開くと聞き慣れた声が聞こえる。

「よお、来たのか」

「ども。それより腹減ってるんです。何か食べ物ありましたっけ？」
レイルがメニューの一角を指差した。

「それじゃサンドイッチセット」

「はいよ、ちよつと待ってな」

そうは言ったもののレイルは新聞を広げ、カウンターに腰掛けて動こうとしない。

「……サンドイッチは？」

「だからちよつと待ってるって……」

言い終える前に店の戸が開いた。元気な声が店内に響く。

「こんにちはーっ！」

「よし、いいタイミングだ優衣ちゃん。早速注文、サンドイッチ頼む」

レイルが掛けた言葉は優衣には届いていなかった。

「総矢さん。来てたんですね。何か注文はありますか？」

「あ、ああ。じゃあサンドイッチセットを頼むよ」

「はい、少々お待ちください」

嬉しそうに返事をする優衣はカウンターの流し台へと向かった。

「……今、俺言ったじゃん。総矢が来るといつもこうだな」

優衣はご機嫌そうにサンドイッチを用意している。

「……少し話がある。優衣ちゃんが帰った後で、な」

優衣を見ていた総矢に小さく呟いた。

(拒否してえ……)

総矢は心ではそう思いながらレイルを見た。だがその表情は真剣なものだったために総矢は断る気が一気に失せた。

「……分かりました……でも、今は力になれるか分からないです……」

……

「お待ちせしました。レイルさんと何話してるんですか？」

「ああ、ありがとう。いや大したことじゃ……」

「聞いてくれよ。優衣ちゃんに猫耳が似合いそうだっていきなりコ

イツが言い出すんだよ」

「ブツ！！ ちょよ、ちょっと待て。いつ俺がそんな……」

思わず総矢は噴出した。驚きながらもレイルの暴走を止めようとした。

「え？ ええっ？ いきなり何言い出すんですか？ ……ね、猫耳、ですか？」

困った顔をしてから優衣は総矢にゆっくりと視線を向けた。

「……ゆ、優衣ちゃん前向きだな……。別に引いてもいいんだぞ」
レイルが顔を引きつらせながら呟いた。

調査？ - 普段通り - (後書き)

すみません。今回、全然進展してないです……

調査？ - 都合 -

客のいない店内で一時間ほど三人は話をしていた。

「あ、そろそろ私帰ります」

「もうそんな時間か。じゃあ、またな」

「帰り道に気をつけてな」

二人に見送られ優衣は店を後にした。帰り際に小さく『猫耳か…』と呟いていたのを二人は聞き逃さなかった。総矢はレイルに冷たい視線を送りながら切り出した。

「えっと、それじゃ話つてのを聞かせてもらえますか？」

レイルはそんな視線に動じることなく答えた。

「おう。ちよつと待て……コレだ」

レイルは画像データを総矢に見せた。総矢は見覚えのある人物の顔をみて思わず口が開く。

「ん、この人は確か……？」

記憶を辿ると、答えはすぐに見つかった。

「ああ、遺伝子研究所での」

「そう、ここ最近彼女と連絡が取れないんだ。あの事件の話を直接聞いてからは全く、な」

総矢は首を傾げた。

「何か急ぎの要件でもあるんですか？」

「少しばかりよろしくない話を聞いたんでな。とにかく話がしたい」

「で、この人を探して欲しいって事ですね？」

「そういう事。見つけてココに連れてきてくれ。引き受けてくれるか？」

思わず総矢は口元を引きつらせながら目を逸らした。

「何だ、都合が悪いのか？」

「すぐにつて訳にはいけません。俺にも一応都合があつて、明後日から少し出かけなきゃならないんですよ」

「そうか……。なら明日だけでもちよつと探してくれ」

その発言からレイルが相当焦っていることが読み取れる。

「分かりました。でも期待はしないで下さいよ。それとこの人の名前教えてくれませんか？ この前聞きそびれたんです」

「名前は『かしわぎれいこ柏木玲子』。それでもってお前が持つてるその転送装置の開発者だ」

「これこの人が作ったんですか？」

総矢は自分の腕の転送装置と写真の人物を交互に凝視した。

「一度説明してもらった事があったが、そいつのシステムは正直俺にはさっぱりだったな。というかコイツ以外誰も分かんねーんだと思っぞ」

話を聞いて総矢は確信した。レイルもそれを察して黙って頷く。

「……もう分かったみたいだな。おそらくコイツの技術力が狙われた。……そんな顔をするな、コイツ自信の心配は必要ないぞ」

総矢の表情の変化を見て、レイルが言い加えた。

「え？ どういう……」

「コイツの技術が欲しいのに殺すワケ無いだろ。それに何よりコイツは強いぞ」

総矢は遣伝子研究所での玲子の戦い振りを思い出す。肉体強化を施された人間を相手に余裕を持って戦っていた玲子は明らかに総矢よりも強かった。

「……確かに、そういう心配は必要無さそうですね」

(……アレ？ でもそれならどうして連絡が……？)

だが、その疑問は口にできなかった。

「そういう訳だから、頼んだぞ。あ、それと今から出掛けるから悪いが店を出てくれ」

そう言い残してレイルは席を立ち、店中を片付け始めた。

「どこにですか？」

「……それを聞くなよ。聞くのはヤボってもんだ」

総矢の問いかけをニヤけながら濁し、答えなかった。だが帰り際

に一瞬だけ見た表情は先程とは比べものにならないほど真剣なものだった。だが総矢は『それじゃ』とだけ言い残し、店の外へ出た。

(出かける用件は、プライベートって訳じゃ無さそうだな……)

気になった総矢は、すぐに自室へは戻らず暫く店の近くに隠れていた。

(『能力』使ったら楽だったんだろうけど、どうにも気が進まないな……)

総矢が店を出てから五分程で店内の明かりが消え、レイルが店の外に出てきた。すぐに車に乗り、夕闇に消えて行った。

(しまった。車で出かけられたら俺追いかけられないな……今日は諦めるしかない、か)

総矢は追いかけていきたい気持ちを抑え、清正達のアジトへと向かった。建物の中に入った直後、入り口近くで待ち構えていた煉に声を掛けられる。

「戻ったか。総矢、ちょっと話がある」

「はい？ 何です？」

「まあいいからちょっと来いよ」

無理矢理肩に手を回され、エレベーターへと強引に連れられた。

調査？ - 都合 - (後書き)

ゴールがまだまだ見えません。当然スタートもめんどろなことが増えてきました。(ES等)ん〜こればっかりはどうしようもないですね。なんとかそれでも乗り越えなければ……さいごに笑えればそれでいいと思ってますが、いい感じに……なるんでしょかね。

というわけで色々とご了承下さい。

調査？ - 特訓 -

地下に向かう途中、改めて煉に尋ねる。

「……で、何なんですか？ 俺に何の用が……」

「清正から聞いた。海沿いの工場地帯に行くんだってな？」

「え？ あ、はい。ここの宿賃代わりにつて事ですが」

「いいのか？ このまま行くとお前は他のヤツらと同じ目に合う羽目になるぞ？」

煉の言い方は普段より厳しい。少なくとも総矢にはそう感じられた。

「……行きます。少し気になることもあります」

「まあ理由は深くは聞かぬーよ。とにかく行くんだな？ なら何もしないよりマシだろ。気休め程度だが少し鍛えてやる。能力にも関係して、な」

煉は軽く笑った。その笑顔から悪意は感じられない。純粹に総矢を心配しての台詞だった。

「分かりました。お願いします」

礼を言い、煉と総矢は先日戦った地下の訓練場に入った。

「ハア、ハア……」

三時間程の煉の訓練の後、総矢は床に仰向けになって倒れていた。

「ハア、ふう…… やっぱこの短時間じゃ完璧につてのは無理か」

「ハア、ハア……でも、完全じゃないにしてもこれなら少しは体力消費を抑えられます」

煉は一度深呼吸をしただけで息切れが治まっていた。

「大塚もこれはまだ不完全な状態だ。すぐにできるもんじゃねーつてのは分かってる」

訓練を始める前に気休め程度、と煉が口にしてたことを思い出す。

「それでも、方法を知っているだけでも上達は早まると思います」
「随分と前向きじゃねーか。そんじゃ俺は先に部屋に戻らせてもら
うぞ。じゃな」

煉は嬉しそうに総矢を見ると、訓練場から先に出て行った。一人
訓練場の天井を見上げてボーっとしていた。

（能力の完全制御、か……かなり難しいが完璧にできれば……）

総矢は呼吸が整うと起き上がった。

（それもあるが、純粹に能力無しでもある程度は戦えるようになる
必要はありそうだな）

先程の煉の訓練からしみじみとそう感じていた。

（守れる力くらいは欲しいな……せめて、身近な人だけでも……）

崎見総矢を名乗ってから出会った人物の顔を次々と思い出す。そ
して最後に、

（……理沙も）

顔も思い出せない妹を思い浮かべる。誰もいない訓練場で総矢は
転送装置を起動させる。取り出した金属製の棒を握り締める。ひん
やりとした冷たい感触とそこそこ重量感のある感覚。

（コレの開発者、か……連絡取れないような大変な事態だったらそ
れこそ俺にどうしろっての……このままじゃ完全に力不足、いや、
足手まといになるだけだ）

総矢は部屋に戻った。IDカードを取り出し、規制情報を閲覧す
る。

海岸の工場地帯にて、不穏な動きあり。調査の必要あり

手を止め、情報の項目の一つに見入った。

（これか……水谷さんが言っていたのはこれのことか。それにして
もどうやってこの情報を手に入れたんだ？ この前の反応からはレ
ベル制限付IDの事は知らないみたいだが……）

詳細を調べたが、調査日や調査内容、不穏な動きについての詳細

は分からなかった。

(これは……俺のIDレベルじゃ閲覧不可って事か。それから、こ
っちはどうだ……)

総矢はもう一つ『柏木玲子^{かしわぎれいこ}』を続けて検索した。ID制限無しで
記載されている情報は他と変わらず名前と生年月日のみだけだった
が、制限を解除した途端、情報量が急増した。

(あった。『転送装置開発者』、写真も出てる。この人で間違い無
いな。現住所は……ないか。やっぱり閲覧不可なのか……?)

これ以上の情報はないと半ば諦めながら下へ下へと送っていた手
を止めた。最後に赤文字で目立つよう書かれていた。

事情聴取の必要性あり。現在、行方不明かつ搜索中。発見次第
拘束せよ

調査？ - 資材 -

翌朝の九月四日、総矢は清正からの電話で目を覚ました。目を擦り、現在時刻が午前七時丁度であることを確認してから電話に出る。

「……………はい？ ……………何れすか？」

「おはよう。まだ寝ていたところだったか。悪いが至急俺の部屋に来てくれ」

清正はそれだけ告げ、一方的に通話を終了させていた。

（なんだ……………？）

五分後、総矢は清正の部屋に到着していた。

「起こしてすまない。悪いが今すぐ準備に取り掛かってもらおう」

「準備……………って何のですか？」

「昨日言った潜入調査だ。明日だと思ったんだがな……………俺の読みが外れた。開始は今日の正午だ」

困惑している総矢に清正が順を追って説明し直した。

「昨日説明した工場地帯に調査隊が今日入るって情報をついさつき手に入れた。もちろん極秘事項にはいるようだが。総矢、君にはそれに合わせて潜入してもらおう」

「随分と急ですね」

「だから読みが外れたと言っているだろう？ 調査隊は外部との共同研究を装った形で潜入するつもりだ。総矢には資材の搬入という形で潜入してもらおう。手配の方は大体済んでいる」

調査の日程だけでなく、調査形式までも知り、更にプランを立てている目の前の清正に驚かざるを得なかった。

「で、でもどうしてわざわざ調査隊が入るのに合わせるんです？」

「まず中で自由に動くために一騒動起こしてもらおう。その矛先が我々に向かわないようにするためだ。……………これを見てくれ」

総矢はディスプレイ上の二人と地図に目を向ける。

「誰です？」

「今回、彼ら2人の共同研究を行う場所……このどちらかでこれを使ってくれ」

手渡されたのは手のひらに収まる程度の大きさの機器で、簡単な操作キーと小さいディスプレイのついたものだった。

「何ですかコレ？」

「簡単に言うると爆弾だ」

総矢は思わずギョツとして手にした機器を体から遠ざける。

「そう怖がるな。爆弾といっても電子機器類にしか影響がないから大したことは無いぞ。有効範囲は半径約30m、持続時間は15秒程。時間は短く感じられるかもしれないが機器のシステムの破壊には十分すぎるから取り扱いには注意してくれ。それと、タイマー付だ」

「彼らのどちらかがセットしたのが不自然でないタイミングで発動させる、と？」

清正は黙って頷いた。

「潜入方法についてはこんなところだ。それと、脱出に関してだが……」

「退社する人に紛ればいいんじゃないんですか？」

清正は目を伏せ、首を横に振った。

「それは無理だ。潜入時に君はその工場内用IDを持っていないんだぞ。堂々と出ようとしてもセキュリティでチェック受けたら1発でアウトだ。脱出のプランは、人が少なくなつた夜間にもうそれと同じ爆弾をもう1つ使用、センサー障害を起こして脱出、だ」

（……口ではそう言っているが、実際はそんな簡単じゃない、か……）

総矢は清正の計画を聞きながら脱出が難しい、と言われた事を思い出していた。

「アレ？ 工場内IDが無いってどういう事です？ 資材搬入に扮して入るんじゃない……」

「だから、資材として入るんだ。彼らの調査内容、あるいは何かし

らの情報が分かっただら連絡をくれ。脱出か、継続かはその都度判断しよう」

総矢は口を開けたまま固まった。気が付くと、部屋の奥には小型の冷蔵庫程度の大きさの金属箱が置いてある。

「さ、入ってくれ。中に必要な道具は詰めてある。搬入後は君の『能力』で周囲を警戒してからここから出てくれ、開けるときのスイッチはココだ」

「……本気ですか？」

「当然だ。資材搬入のトラックに紛れ込ませないといけないから早く入ってくれ」

「朝飯がまだ……」

「そういうと思ってコレを用意してきた」

総矢はコロツケパンと牛乳を手渡され、金属箱の中に強引に入れられた。

「ちよっ……痛え！ 狭いですよコレ！ 待った待ったまだ閉め……」

抵抗も虚しく、箱が閉じられて総矢の声はかき消された。

調査？ - 資材 - (後書き)

人間って狭いところのほうが一番安心するって言いますよね？
まあ限度はありますが・・・

バンバンESメが来て、最近では一週回って笑っちゃってます。

調査？ - 潜入開始 -

「……ずっとこのままでいたら関節がおかしくなりそうだな」

総矢は憂鬱になりながら一人膝を抱えて小さく丸まっていた。携帯の明かりを頼りに受け取ったパンを口にする。ただただすることもなく、総矢は、振動の続く箱の内部で眠りに落ちた。

午前十一時、総矢が目を覚ましてから二十分程経過していた。

（も、もう限界だ……膝が、腰が……もう出てやる！ これ以上我慢してられねー！）

内部からの開放スイッチを押そうと窮屈な箱の中で強引に右手を動かし、スイッチに触れようとした瞬間だった。これまでに無い衝撃が一度響いた後、長く続いていた振動が完全に停止した。

（……降ろされたみたいだな。とすると、ココはもう例の工場内部なのか……それなら）

総矢は『能力』を使い、周囲にいる人間を確認した。

（……3人か、どうするか……）

『……何すかこの箱？ コレだけやたら重量ありましたけど』

『さあな。コレが何なのかってのを知るのは俺達の仕事じゃねえよ。いいから次行くぞ』

『わ、分かりました。……それじゃリストにあるのはコレで全部なんで我々はこれで失礼します』

『ご苦勞様です。ありがとうございます』

『スンマセン。ちょっと俺トイレ行ってきていいっすか？』

『ったく。しゃーねーな、サッサと行ってこい。先にトラックに戻ってるぞ』

『トイレならこちらです。案内しますよ』

（都合よく全員がいなくなった。よし、今だな）

総矢はすかさず開閉スイッチを押し、箱の中から飛び出した。清

正が用意した『必要な道具』を全て取り出し、箱を閉じるとすぐにその部屋を出た。

(とりあえずどこか隠れる場所を……)

総矢は人に見られないよう注意しながら廊下を歩きながら、隠れられそうな部屋を探した。人に見つかるわけにはいかないという緊張を感じながら歩くうちに、『納品リスト保管所』と書かれた部屋を見つけた。

(保管所……ここなら大丈夫か?)

ドアノブを回して押し開け、中の様子をそつと伺う。人影は見当たらないが蛍光灯の明かりは点いている。その時点で危険は感じたが、早めに隠れる場所を確保したい感情を優先した総矢はそのまま音を立てずに中へと入った。

(とりあえず、一安心……つてとこだな)

総矢はドアから死角になる部分で手にしていた清正が用意したケースを開けた。中に入っていたのは従業員の作業服とキャップ、例の電子爆弾が二つ、電子爆弾と色違いのものが一つ、それと透明な液体の入った小さい霧吹きだった。

(作業服と電子爆弾は分かるが……この2つは何に使うんだ?)

疑問に感じながら早速作業服に着替える。着替えを終えると総矢は携帯を取り出し、清正に連絡を取る。

『もしもし?』

「水谷さん? 今無事に潜入したところです。少し聞きたいんですけど用意したっていうケースの中に初めてみる物があるんですけど」

『液体のほうは即効性の睡眠薬。顔面近くで吹き付けると大抵の間はすぐに眠る。もう1つの電子爆弾の色違いは正真正銘の爆弾。電子爆弾と違って実際に爆発するものだから取り扱いには十分に注意してくれ』

(冗談じゃねー……あの箱の中でうっかり爆発したらどうするつもりだったんだよ……)

「な、なんでそんな物騒なものを?」

「念には念を、だ。あるに越したことはないと思っただ。先に言ったら君は断るだろう？」

「当たり前です。こんな危なっかしいもの持ち運べって……」

「そうだ。見つかって逃げるにしても丸腰の君じゃ、数で圧倒されたらどうにもならない。相手を傷付けるか威嚇するか使い方は気味次第だ」

「威嚇、ですか……」

総矢はどうにも納得したくは無かった。だが清正の言う事も、もつともであつたために已む無く持つていくことにした。ケースを部屋の隅に置き、総矢は入ってきた入り口へと向かつた。

(……なっ！！　だ、誰がいる？)

入った時には死角だつた棚の陰から人の足らしき物体が出ていることに気付いた。

(しまった……今の会話まで聞かれてしまつていたのか……?)

気配を殺し、その場へと近づく。足の出ている部分の逆側から近づき、棚の裏まで来ると総矢は完全に呼吸を止め、そつと覗き込んだ。だが、目に入つたのは総矢が想像していたものとは全く異なる状況だつた。手足を縛られ、目と口を塞がれた女性が2人その場に倒れていた。

(……何だ?)

総矢はすぐに二人に駆け寄り、首に手を当てる。

(脈はある……ただ眠っているだけみたいだな)

総矢にとつても好都合ではあつたが、このまま放置しておくことも気が引けた総矢は、二人の足を拘束しているロープを切り、目と口を塞いでいたタオルを取り外してその場を去つた。

(……俺以外にも誰かが侵入している)

総矢は確信した。

調査？ - 潜入開始 - (後書き)

更新遅れて申し訳ありませんでした。

調査？ - 部署 -

トイレの個室で総矢は携帯を開いていた。

（今日の正午に調査隊が潜入開始だったな……それから、現在位置は……ここか）

潜入隊の一人が共同研究を行う建物は現在総矢がいる納品所から南へ約三百メートル、西へ約五百メートルといった所だ。

（中々距離があるな……作業服を着ているからそんなにばれる心配は必要ないかもしれないがそれでも注意して進むべきかもしれないな）

総矢は携帯を片付け、納品所を出た。目的の研究場所までは数名の従業員とすれ違ったが何事も無い。作業服の効果は総矢が考えていた以上のものだった。目的の建物に到着すると、総矢は人に見つからないよう注意しながら内部を探る。

（この建物に共同研究で入るということはここにも『何か』はあるはずだ）

建物の案内板には一階から三階までの部屋の配置、管理人の連絡先等がまとまって表示されていた。建物内部は不気味なほど静かだ。いくつかの部屋には人がいたものの、廊下には音が殆ど聞こえない。総矢は警戒しながら、一階から順に建物の調査を開始した。

（……この部屋で一階が終わりか。大した情報はなかったな……）
調査を始めて五分程経過した頃、総矢は一階の端、廊下の突き当たりにある部屋に足を踏み入れようとしていた。殆どの部屋は施錠され、調べる事すらできずにいた。最後に向かった部屋の戸に書かれていたのは『危険、関係者以外立ち入り禁止』の札が掲げられている。だが、その部屋に明かりは点いておらず、無人であることが伺える。

（鍵は、ダメ……じゃない？ 開いてる？）

ノブを回すと、戸は滑らかに動く。数センチ手前に引き、そつと

中の様子を伺う。

(人は……いない？　ここだけ施錠するのを忘れたのか？)

中に入り、周囲を見渡す。用途の分からない機材や見たことの無い形状の器具が部屋の端に並べられている。

(……？　ここは何を研究して、ん？)

部屋の戸が突然開き、二人の男性が入ってきた。総矢は巨大な機器の陰、運良く部屋の入り口からは死角となる部分にいたために突然の来訪者にすぐさま見つかる事だけは避けられた。

「そっぴや、ココの203号室にいつもいた新田さんも異動だつて」

「あ、ひよつとして例の部署か？　最近あの部署に異動つてのよく聞くよな」

「ああ。しかも何をやってるのかつてのは社内の人間にさえ口外するなつてよ」

「そっぴや。社内の人間にまで隠してどうするんだ？」

「俺に聞くなよ。社外にはその部署の存在さえ知られちゃならないつてさ」

「つまり今日からここに来る外部の人間に知られるなつて事だよな」

「まあ、下手なこと言わない限り知られはしないだろ……あつたぞ」

「こつちも見つけた。じゃあ戻るか、今度はちゃんと施錠しろよ」

研究員の一人は総矢のすぐ傍に置いてあつた機材を手にすると、総矢に気付くことなく入り口へと歩き始めた。二人が部屋の外に出たから戸を施錠する音を聞いた後、総矢はその場に座り込み、安堵のため息をつく。

(つぶねー！　見つかるかと思つた。社内秘の部署か……そこに間違いないな)

総矢は携帯を取り出し、時間を確認する。時刻は午前十一時十五分。潜入隊が来るまではまだ時間がある。

(……上の階も調べておくか。いや、203号室の人が異動つて言つてたな……)

立ち上がり、総矢は部屋を出た。だが、扉からそつと顔を覗いた

瞬間、思考が停止した。

「なん……だ……？」

先程部屋を出て行った二人が部屋を出てすぐの所に倒れている。廊下の更にも先にも倒れている人影が見られる。

（何が起きてるんだ？ 向こうの人はさっきいなかったはず）

総矢は倒れている二人に駆け寄り、首に手を当てる。

（脈はある。さっきと同じで気を失ってるだけか。騒ぐ声もなかった、つまり抵抗する間も無くってことか？）

総矢は倒れた二人を廊下に座らせ、すぐにその場を離れ、上階へと向かった。それ以降は逆に203号室まで人が一人もいないという状況だった。建物内は静まり返り、物音一つしない。先程まで聞こえていた機器のわずかな振動や音さえ感じられない。

（……何が起こって、いや、何も起きていないのか？）

疑問に感じながらも総矢は203号室の中へと入る。部屋の中は機器だけでなく明かりも消えている。だが、

（足音！ ……誰がいる！ よし、能力を）

部屋が静かすぎたために、微かな足音でさえ総矢の耳に届いていた。足音でさえ聞こえる状況は、逆に部屋の戸が開いた時の音も足音の主の耳にも届いていた。足音の主は総矢に向かって静かに歩み寄っていた。

調査？ - 尋問 -

(……来た！)

足音が突然大きくなる。同時に現れる黒い人影と小さく鋭い光。

「ハアツ！」

掛け声と共に鋭い光を総矢に突き出した。

(っ！ スタンガンか！)

総矢は紙一重で闇の中での襲撃を避け、スタンガン突き出した左手首を掴み、顔面に拳を繰り出した。だが、総矢の拳を軽々と受け止めると、逆に総矢に足払いをかける。

「しまった！」

そう口にしながらも総矢はニヤリと笑った。転倒しながら、今度は総矢が足払いを掛ける。足払いを掛けると同時にスタンガンを持つている相手の左手を強引に押し、そのまま相手の胸に当てさせた。「ぐうっ……」

倒れ、気絶し、動かなくなった人影を見てから総矢は再び『能力』で周囲の様子を探る。誰もいないことを確認してから、総矢は部屋の明かりを点けた。

(何だ、コイツは？)

明らかに工場の人間ではない。総矢と同様にその男は作業服を着ていた。だが所持品を調べたところスタンガンだけでなく、ナイフ、拳銃と明らかに工場での労働とは別の目的で来ていることは一目瞭然だ。総矢は気を失った男の内ポケットから個人用IDを取り出した。総矢はそのID番号から、その男の詳細情報を調べた。

(所属は……政府直轄？ 例の調査隊とは別なのか？)

総矢は男が所持していたロープで手足を縛りあげた。男が目覚めるのを待つ間に、部屋の中を見て回る。だが、特に有益な情報を得られなかった。部屋を調べ終わり、一息つこうとした時だった。

「っ、っ……き、貴様早くコレを外せ！ こんなことしてどうな

るか分かってるのか！」

男が目覚めた。総矢は男の下へ歩み寄ると、静かに答える。

「外したらまたスタンガンで襲うつもりじゃないんですか？ それとも今度はナイフですか、政府直轄の部隊の斉藤さん？」

男はその言葉を聞き、総矢が手にしていた自分のIDに気付くと睨みながら口を開いた。

「お前ら下っ端は知らないかもしれないが、工場コウの上の連中は相当危険な事に手を出している！ 俺達はそれを止めるために派遣されている正当な部隊だ。だから」

「だから？ 『正当』と言いながら何も知らない一般人にスタンガンですか？」

「……時には必要なことだ。子供じゃないんだからそれくらい分かるだろ」

「ここから先は俺が調べます。あなたは知っている事をすべて話して下さい」

「……貴様、この人間じゃないな。なら尚更これ以上の情報は殺されたとしても貴様には与えんぞ！」

強い口調で言い切る男に対し、総矢は肩を落としながら無言で『能力』を発動させた。

「ココに来た目的は何ですか？ それからあなたの任務は？」

「……」
「潜入前に入手していた情報は？ 工場コウで得た情報は？」

「なぜこの任務を引き受けたんですか？」

「……？ おい、いったい何を？」
男は最後の質問に対し目を丸くした。

（……なるほど、そういうことが……）
総矢は『能力』をOFFにしてから立ち上がった。男を見下ろし、一言告げた。

「申し訳ないですが、当分はそのままでもらいます」

「何だと！？ オ、オイ待て！」

騒ぐ男を無視したままにしておく後々厄介になる事は明白だ。やむを得ず部屋の奥へ運び、清正が用意していた即効性の睡眠薬を吹き掛けて男を眠らせてからその場を離れた。

(工場に潜入して、手にした情報を研究員として潜入した人間に渡すことで外へ、か。脱出用の道具は情報と交換、なんて随分厳しい条件の任務だな。しかし組織の末端である彼には拒否権が無かった……)

総矢は焦りを感じ、歯を食い縛る。

(おまけに、彼の情報が正しければ俺の水谷さんへの連絡も既に分かっているハズだ。これ以上不用意に連絡は取るわけにはいかないな)

斉藤という男が任務の前に得ていた情報の一つに『工場内監視』というものがあつた。工場区域内での電波が管制塔で受信され、会話やメールの内容は全て記録されているというものだ。斉藤はそれを避け、正午に潜入する部隊の人間と直接接触するためにこの建物にいた。

「だが……」

思わず口を開いてしまった。総矢が得たのは悪い情報だけではない。斉藤という男が手にした情報の中には例の『部署』の情報に関するものもあつた。

調査？ - 目的地 -

斉藤は調査報告のために『部署』の調査を中断したため、その内容の全てが明らかという訳ではない。彼はその『部署』の連中が作業を行う施設への『入口』と『入り方』を知っていた。

（施設は地下……入り口は工場エリアで最も奥の研究棟か。研究棟に入るには例の部署の社員用IDが、地下に入るにはIDだけでなく指紋によるチェックも必要、か）

総矢は頭を抱えた。情報の入手という面では幸先良いが、潜入方法については全くもっていい案が思い浮かばない。

（IDはうまい具合に彼から拝借できたが、指紋は……。その『部署』の人間の指を切り取って使う？ いやいや、無理だ！ 騒ぎになるなんてレベルじゃ済まないし、そもそもそんなことが出来るかっての！）

頭を掻きながら総矢は時計を見た。時刻は十一時五十五分。間もなく調査隊の人間が潜入を開始する。工場内監視が確かな場合、トラブル発生時に調査隊の人間に目を向けるため用意されていた電子爆弾はもはや意味が無い。そのため、総矢は電子爆弾をセットすることなく建物を出て、目的の奥の研究棟へ向かって歩く。その時、携帯が振動し、着信を知らせる。

（ん？ 誰からだ？）

画面に表示されたのは清正の名前だ。総矢は電話に出ることなくすぐに電話を切った。

（手遅れかもしれないが、念のため……）

携帯をポケットに押し込み、総矢は再び目的地へと歩を進める。最深の研究棟に到着すると、奪ったIDで建物内へと入る。

（入り口は奥の部屋の中にあるんだっただな……さて、どうするか）
問題が解決しないまま来てしまったため、総矢は途方に暮れていた。だが、

「あら、あの時の……」

思いもよらない人物に声を掛けられた。

「え？ あなたは……？」

聞き覚えがある声に顔を向ける。そこにいたのはレイルから搜索を頼まれていた柏木玲子だ。言葉を失い、一時的に止まったがすぐに言葉を続ける。

「ここで一体何」

続けようとする総矢の口と、自分の口に両手の人差し指を当てて黙るよう促すと、総矢の耳元に顔を寄せ小声で話した。

「声大きい、場所を変えるよ」

玲子に連れられ一度研究棟の外に出た。警戒した様子で腕組みしながら総矢に尋ねる。

「それで？ なんであなたはここにいるの？」

「調べ物、いえ、調べ事です。柏木さんは？」

隠す素振りもなく答えた総矢に対し、警戒心を緩める。

「それってレイルのところでの依頼？」

「レイルのところで頼まれたのはあなたの搜索ですよ。それで、柏木さんの目的は？」

「あゝ、やっぱりもうある程度情報出ちゃってるか……」

驚きながら聞き返してくる。総矢は自分の質問が玲子の耳に届いていないのか疑問に思い、再度同じ質問をした。

「内容は聞いていませんけど、その反応からして俺の調査っているのは柏木さんの目的と関係あるみたいですね」

「まあ、おそろくね。もう1つ先に聞かせて。調査ってというのは、あなたにはレイルの店以外での人間と繋がりがあるってこと？」

「まあそういうことです。その人達との付き合い始めたのはつい最近ですが」

総矢の返答に玲子は腕組みしながら興味深そうに聞いていた。

「ふゝん、まあ深くは聞かないよ。ああ、工場コウジョウに私が来た目的だけ。ちよっと作ろうと思った物があつたの。でもそれが予想以上に

大変そうだったから先に私のサポートロボット作ったんだけど、それが盗まれたの。私の目的はその奪還」

「それが工場コウにあるんですか？」

玲子は不満そうに口を尖らせる。

「そのハズで色々と探し回ったんだけど、見つからなくて……盗品つてこともあるからセキュリティが厳重な所にあると思うんだけど、大体回ったのに見つからなくてね」

「この研究棟は全部見て回ったんですか？」

「回ったよ。1階から5階まで全フロア、全部屋見て他に起こうと思ってたところ」

総矢は玲子の話を聞いて、自分の調査内容と玲子の盗難事件が無関係であると確信していた。

「あるとするならこの研究棟の地下……おそらく俺の目的地と同じです。」

総矢は建物に視線を向けて、そう口にした。

調査？ - 目的地 - (後書き)

更新遅くなりました。申し訳ないです。
久しぶりの投稿になってしまいました。

話の繋がりがおかしくなっているので修正を施しているので
結構投稿が遅れると思います。

調査？ - 協力 -

「地……下？ エレベーターにもそんなものは無かったはず」

疑いの視線を総矢に送っている。突然そのようなことを言われても信用できないのは当然だ。

「あるんです。この建物の研究室の一室に隠し扉があって、その先に地下へ通じるエレベーターがあるんですよ」

（いったいどこでそんな情報を……？ いや、本当かは分からない……）

自身満々で言い切る総矢を見て、思わず事実であると信じてしまっ
いそうになっていた。

「その顔はイマイチ信じられないって事ですね。俺だってこれが100%信用できる情報だとは思っていませんが、無闇に探し回るよりもマシかと思って試しに来たんです」

玲子は総矢の意見に同意した。

「それもそうかな。『もしかしたら』があるかもしれないしね。もう気付いてると思うけど、私の目的とあなたの目的は多分、無関係じゃない」

総矢は黙って頷く。

「だとすると、」

「協力した方が効率も良さそうですね」

総矢と玲子は握手を交わし、協力の意思を示しあった。思い出し、総矢は付け加える。

「それとその地下に入るにはIDだけじゃなくて、指紋の照合が必要なんです」

玲子は素直に驚き、問い直す。

「随分嚴重みたいね。その部屋がどこかは分かる？」

「102室です。入ってすぐを右に進んだ所です。どうするんですか？」

玲子はニヤリと笑い、総矢に向かって一言告げた。

「少しばかりお休みしてもらおう。コ・レ・で」

玲子が手にしていたのは銃だ。総矢は目を丸くして『お休み』の意味を悪いものと連想した。

「これは麻醉銃。当たったらチクツとするくらいの痛みだよ。試してみる？」

「遠慮しておきます。それより、それ隠して下さい。行きますよ」
殺傷するものでないと分かり、安心した総矢は研究棟へと再び入っていった。

「それで？ 中の人は？」

「私が調べた範囲ではそんなに多くなかった。ただ」
言葉を一度止める。

「ううん、何でも無い」

「……？」

総矢は疑問に感じながらも、そこから先は問いかけることが出来なかった。

（確実では無いけど、おそらく普通の研究者ではない人間が数名いるみたいなのよ。他の棟にもいたけどここは特に空気が重い気がした……）

玲子には確信が無かった。数値等で出る結果を元に物事を考える玲子には不確実な内容を口にするのは抵抗があった。

「とにかく、ここね」

102号室。戸を開け、中に入る。部屋の内部に人影は無く、静まり返っている。総矢はその場で目を閉じて能力を使う。だが、隣にいる玲子以外に部屋の中には誰もいない。

「入口はあの棚の裏ですが、指紋の照合も出来ませんね」

「この部屋にもさつきは人がいたから、少し待てば誰かは来るはずよ」

玲子の提案に従い、二人は部屋の影に隠れ潜むことにした。隠れてから五分も経たないうちに一人の男性が大あくびをしながら部屋

に入ってきた。

「ふあゝ……ダメだ。やつぱ眠い……いくら俺の送別会だからってあそこまで俺に飲ませるかよ。気持ち悪くて全然寝れなかったなあ」
男は入り口近くの椅子に腰掛け、手にした缶コーヒーに指をかける。力が加わる瞬間、左手の甲に軽い痛みを感じて体を硬直させた。が、その原因を知る前に男の全身から力が抜け、缶コーヒーが床に転がった。

調査？ - 協力 - (後書き)

マイペースで書いてます。ご容赦を。

調査？ - 地下潜入 -

「よく当てられましたね」

「バカにしてるの？」

「大して狙いを定めたようには見えなかったんですが、その一瞬であそこまで正確に狙えるものなんですか」

「普通に褒めていたの？ ごめんなさい。性格のねじ曲がった人間とよく話すからいろんなことが皮肉に聞こえちゃって」

総矢は納得し、深く頷いた。柱の影の隠しスイッチを押し、眠った男の指紋でセキュリティを解除し、扉を開ける。すぐに目覚めた場合に備え、男を元の座席に座らせてから二人は地下へ向かう。

「それから？ この先はどういう構造？」

「俺はここまでしか知りません。こっから先は、」

「出たとこ勝負ってことね」

玲子が嬉しそうな顔をしていることに気が付いた。以前に遺伝子研究所で見たどこか気品のある振る舞いとは別で、子供っぽく目を輝かせている玲子を不思議そうに見てしまう。

「随分長い……ん、何？ 新人さん？」

「あ、いえ、何でも無いです。あの、その呼び方止めてくれませんか？ どうにもしっくり来ないんですよ。『崎見総矢』って名前ですから」

「知ってるよ。それなら『総矢』でいい？」

「それでお願います、柏木さん」

「ちよつとぞ」

総矢に対して玲子が何かを言おうとしたが、その瞬間、エレベーターが停止し、扉が開く。二人は緊張し、互いに黙って正面を向く。開いたエレベーターの扉の先には作業服ではなく、白衣を纏った女性立っていた。

「あら？ あなた何でそんな格好を？」

総矢は凍りついた。地下に到着した途端疑いの視線を向けられた事に同様に隠せない。

(いきなりかつ！ マズったか、この場合はどうしたら……)

玲子に視線を送る。その反応に気付いた女性も玲子に視線を移す。やれやれとため息をつき、玲子は目の前の女性に訳を説明する。

「実はさつき上でコーヒー飲んでいたんですけど、私の不注意で彼の白衣が……それで仕方なく彼、ロッカーに置いていたこの作業着に着替えたんです」

もちろん嘘だ。だが、動揺した総矢の視線の移動が、玲子自身に原因があることを話すことを躊躇ったかのような印象を与え、相手の女性は話を信じてそれ以上の追及をしてこなかった。

「そうでしたか。すみません疑ったりして。何しろこの守秘義務が厳しいですからつい私たちも神経質になってしまっんですよ」

疑いが晴れたことで、冷静さを取り戻した総矢はすぐに能力を使って女性の思考を読み取る。

「でもこの人達、見ない人ね。でも最近どんどん地下の部署の人間が増えてるし、実機整備の人なら私が合うことも滅多にないかも……」

「いえ、気にしないで下さい。でもこんな格好してたらただでさえ実機整備で汚れる仕事多いのに更に押し付けられそうですよ」

苦笑いしながら総矢がそう言うと、女性も口元に手を当てながら笑った。

「ふふつ、それは大変ですね。でもしつかり頑張ってくださいね」

「整備担当の人、みたいね」

そう言い残し、女性はエレベーターに乗って一階へと上っていった。エレベーターの女性を見送った総矢は気付かぬうちに口元が緩んでいた。

「……今の人、綺麗だったね。だからといって、いつまでもそんなだらしない顔しているとまた疑われるよ」

表情が一気に硬くなる。

「わ、分かってますよ」

「本当かしら。総矢はひよつとしてメガネ好き？」

「え、え？ なな何ですかいきなり？」

動揺が玲子に決定的な事実を確信させた。

「まあいいわ。それよりさっきの『実機』って何？ まだ何か知ってることがありそうじゃない」

唐突に表情を真面目なものに変え、総矢に尋ねる。

「流石に話さないわけには、いかないですよね……簡単に言うと、さっきの人の思考を読み取って、話を合わせただけです」

「はあ？ いやでも……思考の読み取り……脳波の受信……電気信号を自分で……いえ、感知ならともかく瞬間的に……」

ぶつぶつと独り言を言いながら考え込んでしまった。放っておくといつまでも考え続けていそうだ。

「ま、まあこれについてはまた今度にして。とにかく今はやるべきことをやりましょう」

「いけないいけない、そうね」

調査？ - 地下の戦闘 -

エレベーターを降りてから、二人は通路の両脇の普通の扉を無視して奥へと進む。エレベーターを降りたときから見えている一際大きい扉に向かって真っ直ぐ歩いていった。誰が見ても何かあるとしたらその先だった。扉のノブにそつと総矢が手をかける。当然能力を使い、扉の向こう側に人がいないことを確認しながら。だが、「ぐふっ」

突然扉が開き、頭を強打した総矢は尻もちを着いた。

(な、何で？ 誰もいなかったはず……)

確かにそこに人はいなかった。総矢が顔を上げると扉を開けた人型のロボットが目に入る。全身を白く塗られ、関節部分から僅かに見える金属の光沢は実に見事なデザインだ。

「あ」

玲子が一文字だけ言葉を発する。

「ロボット？ ひよつとしてこれ」

振り返ると玲子が嬉しそうな顔をしている。

「ようやく見つけた。……ん？」

だが、その表情からすぐに笑みが消えた。

「総矢！ 離れてっ！」

玲子が叫ぶと同時にロボットは総矢に向かって左腕部を向ける。人間で言うところの掌から銃口が現れると同時に、射撃が開始される。総矢は慌てて飛び退く。銃弾をタイミング良く避けながら通路脇の扉を開き、身を隠す。

「あれどうなってるんですか？」

「見間違いないかなければあれは私の作ったもの。武装も見た感じそのまま。言いづらいんだけど、警備プログラムも組み込んであったからそれが動いてるのかも」

(あれが警備ってレベルかよ？ 銃仕込むって物騒すぎる警備だな、

オイ！」

総矢は心の中で文句を言いながら対策を考える。その間もロボットはゆっくりと総矢たちに向かって歩を進めている。

「でも、開発者の私には攻撃を加えないようにプログラムしたはずだから……」

扉の陰から体を出そうとした玲子を止める。

「リスクが大き過ぎます。それに場所が悪い。ここは一本道ですよ。さっきは何とかうまく避けられましたけど、いざっていう時に逃げるにいくですよ。せめて上に出ましよう」

だが、総矢の提案もそう簡単なものではない。一本道で、背を向けて銃弾を避けながらエレベーターまで走り抜けるのは正直厳しい。

「……アレ？　そう言えば明らかに異常事態なはずなのに誰かが来る気配も無いわね」

「そう言えばそうですね。銃の音なんて相当響き渡ってるはずなのに……どうということですかね？」

「相手があの子だけなら問題ないね」

玲子は総矢の手を引き離し、扉の陰から歩み寄るロボットの正面に立った。

「あゝ、あゝ。分かるかな？」

「バ……」

総矢は手を離してしまったことを後悔した。再び手を伸ばし、扉へと引き戻そうとした瞬間に銃弾が放たれる音が聞こえる。銃弾が咄嗟に避けた玲子の髪と、伸ばした総矢の腕を掠めた。

「いつつ！」

「ダメみたいだね。少し荒っぱい事しなきゃ止まらなそう」

玲子は冷静だった。体勢を立て直し、立ち上がる。歩み寄るロボットに自らも歩み寄る。

「ちよ！　危ない！」

「へーキ！　そこから出ないで」

玲子は放たれる銃撃をテンポ良く避けながらロボットへ近づく。

ロボットに取り付けられていた銃からは一定時間ごとに一発ずつ放たれていた。銃撃に一定の間隔があることを知っていたとしてもそれを避けるのはそう簡単ではない、ハズなのだが玲子は余裕の表情で近づき続けている。総矢は死角で起きている出来事を、能力を使うことで何とか把握していた。

「よしっ！」

玲子がロボットから放たれた銃弾を自身の銃を盾にして弾くと同じ時に左腕部の付け根に銃口を向ける。麻酔銃ではなく、実弾が装填されたものだ。引き金を引き、大きな音と共にロボットの左腕が垂れ下がり、停止した。

「ふうっ、何とかなった。コレなら修理も少しで済みそう。もういいよ」

陰から出てきた総矢に対し、振り返りながら声をかける。

「武装ってそれだけなんですか？」

「そうだけど。別にこの子で戦闘するつもりなんて……」

言いかけた瞬間、ロボットの右腕部から鋭い刃物が現れた。ロボットに背を向けたままの玲子に向かってその先端を突き出した。

調査？ - 撃破 -

「危ないっ！」

総矢は飛び出し、廊下の壁に向かって玲子を突き飛ばすと同時にロボットを反対側の壁へと蹴り飛ばした。だが、ロボットは総矢の想像をはるかに超えた重みであったために、殆ど動かなかった。そのため十分に玲子と引き離すことが出来なかった。

「う、くっ」

玲子の右の太股に刃物は突き立てられ、床を赤く染めた。総矢が慌てて玲子の足から刃物を引き抜こうとしたが、それを玲子が止めた。

「先にあつちを何とかして！ 右腕の連結部に一発打てば止まるはず！」

総矢に銃を手渡し、ロボットを指差す。総矢は銃を受け取り、立ち上がる。転送装置で棒を取り出す間にも、ロボットは迫ってきている。銃撃時とは異なり、走って。

「早く撃って！」

玲子の言葉が耳に入るが、銃のセンスが無いのを知っている総矢は、直接打ち込まなければならなかった。そのためには

「一撃は受けなきゃならない！」

縦に勢いよく振り下ろされるロボットの刃物を棒で受け止める。ロボットを蹴り飛ばせなかったことから、総矢は攻撃の重さを覚悟できていた。だからこそ、その一撃を受け止められた。右手で精一杯棒を握り、左前腕でも棒を支える。当然全力だ。

「うぐ……こ、これで……」

重みに耐えながら左手に持った銃をロボットの右腕接合部に向け、引き金を引いた。途端に全身を襲っていた重みが緩む。すぐにロボットの腕を振り払い、今度は両足の間接部を撃った。

「ちよっと！ 何してるの？」

「右腕に柏木さんが知らない武装があつたんですよ。足にも何かあるかもしれないと思って、念のためですよ」

ロボットは身動きが取れなくなり、その場で動くことは出来なくなつたが、システム自体が停止した訳ではない。足を引きずりながら近づいた玲子がロボットを覗き込む。

(……あれ？ これ私のじゃない……)

無言で覗き込む玲子を無理矢理ロボットから引き離し、総矢は手当てを始めた。

「何してるんですか？ さつさと手当てをしないと……」

「あ、うん……ありがとう」

玲子が転送装置で取り出した包帯で応急処置のみを施した。総矢が包帯を巻いている間、玲子は動けなくなったロボットをじつと見つめていた。

(構造は殆ど私が作ったものと同じ。ただ、戦闘機能が追加されていたことが気になる……でもおそらく試作機の段階みだし、セキユリティの嚴重性から情報は外に出てないと考えてもいい。なら地下^{こく}さえ破壊すれば……そのためにも、私も破棄しないと)

玲子は歯を食い縛つた。痛みと勘違いした総矢は慌てて包帯を緩めようとする。

「あ、すみません。きついですか？」

「あ、違うの……ただ、そのロボットだけど」

玲子の言葉が途切れ、一瞬沈黙が生まれる。

「私の作ったものじゃないの。おそらく私のを元に新たにココで作られた戦闘ロボット」

「新たに？」

「武装を追加している点、表面材質が私の作ったものより硬い点、その2点から攻撃、防御共に性能を上げていることからほぼ間違いない」

「設計図とそのデータを完全に消す必要がありますね」

総矢の意見も玲子と同じものだった。だが、その意見には僅かな

ずれがあることには気付いていなかった。

「手当てアリガト。とにかく今は進むよ」

「肩貸しますよ。それともお姫様抱っこがいいですか？」

「冗談混じりに言った総矢を冷たく突き返す。」

「キモい。自分で歩ける。そもそも私が油断したのが原因なんだから」

「時には人に頼ることも必要ですよ。どうせそうやってずっと一人で探し回っていたんじゃないですか？　今は俺と手を組んでるんですから、頼ってもいいんですよ」

総矢はため息をつき、強引に玲子に肩を貸した。玲子は総矢から顔を逸らしたが、僅かに口元が動く。ハッキリ見えはしなかったが、玲子が嬉しそうな顔をしている事は容易に想像できた。

調査？ - 撃破 - (後書き)

だらだら書き連ねてしまいました。『調査』はもういつその事まとめて投稿してみようかとも考えています。書き終えたらになります
が・・・

リアルですが、面接が迫って慌てています。
色々な意味で泣きそう。

調査？ - 無人 -

総矢はロボットが出てきた部屋の扉を押し開け、中を覗く。

「どう？ 中はどうなってる？」

「誰も……いないですね。やっぱり」

扉のところから覗き込んだ範囲、総矢の能力が届く範囲には動くものはなかった。当然誰もいないからといって気は抜けない。警戒しながら二人はゆっくり中に入る。

「え……これは？」

思いもよらないものが総矢の視界に入った。ロボットだ。総矢達がついさつき行動不能に追いやったロボットと同じものが直立状態のまま何体も並べられている。向きが悪く、覗いただけでは何か分からなかったが、部屋に入ることですべて初めて内部が何かを知った。

「実機って、コレのことだったのか」

総矢の呟きを玲子は横目で少しだけ見る。視線を一番近くにあったロボットに移して近づく。

「さっきのとも、微妙に違うみたいね。銃が更に無理矢理追加されてる……これで戦争でもするつもりだったのかな？ ……でもコレさっきのより腕のラインが美しくない」

脇のPCからシステムを閲覧しながら文句を言っている。その間に総矢は部屋の更に奥へと踏み入った。奥に進むと、機械の陰に液体がこぼれているのが目に入った。

（何だ？ オイルか？ こんな地下下って状況でオイル漏れってヤバイだろ）

総矢はやれやれ、と思いつつながらオイル漏れと思われる場所へと近づく。近づくにつれ、異様な臭いを感じ、同時にそれがオイルでないことが分かった。

「……っ！」

何人もの人間が折り重なるようにしてその場で死んでいた。総矢

が初めにオイルと思ったものは人間から流れ出ていた赤い液体だった。思わず顔を背け、目を閉じる。

(どうしてこんな……?)

玲子の下に戻った総矢は奥にあったものを簡単に説明した。

「それだけ？ まあもうこの部屋に用は無いね。次を早く調べるよ」

「それだけですか？ もっと何か言うことは無いんですか？」

「何かを言ったところでその人達は生き返らないでしょ？ それに、私はこれに関った人間は全て消すつもりでいるからその手間が省けたという点では寧ろありがたく思ってるよ」

玲子は無表情でそう言い切った。総矢はそれがどうしても納得いかなかった。

「そんな言い方」

「私は、こんな兵器を目的とするようなものを作り出すやつらを許さない、絶対」

「だからと言って殺す必要があるんですか？」

「なら逆に聞くけど作られた兵器で何の罪も無い人間が大勢死ぬのを許せというの？」

「兵器を壊して研究員を拘束すれば……」

「欲しがる人間は必ずいる。いずれは誰かに伝わり、広まり、そしてまた誰かが作ることになるよ」

「それはただの憶測でしょう？」

「人間はそういう生き物。だから私は私が作ったあの子も壊す。全部を壊すの」

総矢はもう反論できずにいた。玲子は後ろを向いた。気付かれなためだったが、目にうつすら浮かんだ涙を総矢は見逃さなかった。「あなたが何を言おうともこの地下は潰す」

「……確かに、この部屋の兵器として存在するものは流石にあってはいけない。でも……」

総矢は玲子から目を逸らし、言葉を濁した。

「とにかく、ここは破壊。コレをこことあそこの柱と、あとそっち

の柱にもセットして」

転送装置で取り出したのは爆弾だ。

「破壊って物理的にですか？」

「もちろんデータの方もよ。データは私がやる。だからその間にそれのセットお願い」

先程の涙はどこへ行ったのか明るく総矢に告げ、玲子はPCに再び向かい、ディスクを取り出していた。

調査？ - 無人 - (後書き)

梅雨ですね。 ああ、梅雨ですね。

調査？ - 破壊の準備 -

「清正さんといい爆発物なんて危険なものを素人に取り扱わせるなよな、怖えつての……」

総矢は小声で文句を言いながら支持された柱に手渡された爆弾を設置した。

（だが、どうやって説得する？ さっきの調子じゃここにいる人間全員を殺しかねないぞ）

新たな問題に総矢は頭を抱えていた。そうそついい考えが思い浮かぶわけでもなく、言われた箇所へと爆発物をセットし、総矢はすぐに玲子の下へと戻った。玲子はとても嬉しそうな顔をしている。

「終わった、みたいですね」

「まあね。この部屋はおしまい。それじゃ次行くよ」

「さっきの続きですけど、奪還が目的って本当は嘘だったんですね」

「まあ、ね。今更って感じもするかもしれないけど。盗られたデータと研究成果は消去するわ。こんな形にされたらもう残すわけには……」

玲子自身が一番納得出来ずにいた。それでも必死で自分に言い聞かせている。

「次の部屋、行きましょう」

総矢は玲子の顔を見ることなく肩を貸し、歩き始めた。地下に降りてきたエレベーターに戻るまでに、通路の左右には合計四つの部屋があった。三部屋にはただただPCと資料らしき書類ばかりが置かれたものとなっていた。だが、最後に調べたエレベーターに最も近い部屋に入る。注意深く部屋の中央に置かれた見覚えのあるものの周りをじっくり眺めながら一周し、立ち止まった。

「見つけた。今度こそ。うん、間違いない」

それだけを口にしたただただボーっと突っ立っている。

「また誰もいない、か」

総矢は人が全くないことがとてつもなく不気味に思えた。

（さつき倒れていたので全員か？ ん？ 何か忘れていているような…
…何だ？）

必死に思考を巡らせていた総矢を気にかけることは無く、玲子は自身が作成したロボットへと歩み寄り、転送装置を起動させる。取り出したのはこれまでに全ての部屋に取り付けてきた、先程のものと同じ爆弾だ。

「ごめんね、ごめんね……」

自身が製作したロボットには、全て玲子自身が破壊の準備を行った。涙が機器の表面を濡らした。部屋を出た二人は、再度全ての部屋を調べてから地上に戻るためエレベーターに乗った。エレベーターに乗った時には、玲子は吹っ切れていたのか非常にいい笑顔になっていた。

「よっし、これでやっと帰れる。布団で寝るのは久し振り」

「え？ まさかずっと風呂とかにも……」

「し、失礼なこと言わないでくれる？ ここには社員用のシャワー設備とかあるから……」

慌てて玲子は弁解する。

「でも、下着とかは流石に……」

「ま、まだ2日目だから（あ、いや3日目か）」

狭いエレベーターの中で玲子から距離をとろうと総矢は後ずさる。

「ちよつと？ その反応は失礼だと思うけど？ そんなに臭くないって、ホラ」

と言いながらエレベーターの隅の総矢に詰め寄る。体が近い。

「い、いや。あのですね、これは決してそういうつもりじゃ」

（近い近い近い！ 別のことが気になるっての！ その角度は駄目だって！）

総矢を見上げる玲子の顔のすぐ下に目が行ってしまふ。服装は決して露出が高いわけではないが、僅かに見える首元の鎖骨に思わず体が硬直する。

「どしたの？」

ビクツとして総やは視線を逸らす。

「何でもないです。においも気になりませんから少し離れ……」

チン、という音と共にエレベーターの扉が開く。一階に到着した。だが、

「あら、生きのびタのがイるの？ ってことは、アレは壊しちゃったのかしら？ クククカククカ」

聞き覚えのある声に二人は動きを止めた。だが、表情は記憶に無い不気味なものだった。

調査？ - 破壊の準備 - (後書き)

デュワッ！

「この人は誰かに操られている。傷つける訳には！」

能力を解除しただけで総矢の頭痛は消えた。

(原因はやはりこの人の思考。直接ではないのに俺にまでこれ程の影響が出るなんて……早く何とかしないと彼女自身も危険なはずだ)

銃を総矢に向け、女性は躊躇い無く発砲した。体を屈ませるが、銃弾は左腕を掠める。

「ぐっ……」

だが、総矢は左腕を庇うことなく女性に正面から突っ込んだ。女性はまだ一度総矢に向けて銃を構えた。だが、銃弾は狙いを大きく外れて天井にめり込んだ。

「……？」

女性は何が起こったのか理解できていなかった。総矢に意識を集中させていた間に、玲子が素早く狙いを銃に定め、女性の銃を撃っていた。

「悪いね」

玲子は立て続けに二発の銃弾を女性の右手の銃に撃ち込む。衝撃で手から銃が弾き飛ばされる。その間に接近した総矢が女性の両腕を掴み、床に押し倒す。痛みを感じていないのか、女性は笑い続けている。

「操られているんだったね。それならコレで」

玲子が錠剤を取り出し、強引に女性の口の中へ押し込んだ。数秒間暴れようとすると女性を二人は必死で押さえた。だが、それが終わると急に動きが止まった。

「え、え、え？　ちょ、ちょっと？　ここ、これ……何ですか？」

暴れる動きが治まった直後、悲鳴にも似た声で女性は尋ねた。

「ふう、落ち着いたね。総矢、もういいわ」

玲子の言葉通りに総矢達は女性から離れた。座ったまま下がり、女性は距離を取る。

「心配しないで。別に危害を加えるつもりは無いよ。それより体の調子はどう？」

「え……？　べ、別に何もありませんけど？」

怯えながらも女性は答えた。総矢が一步前に出て、尋ねる。

「今何をしていたのか、とかさっき俺たちに会った事を覚えていますか？」

総矢の問いかけに首を傾げる。

「エレベーターで会ったのは覚えているけど、1階に着いた記憶は無いです。気が付いたらあなたたちが私に覆いかぶさって……」

「エレベーターに乗る前には何をしていたんですか？」

「エレベーターに乗る前ですか？　確か……え？　あれ？　ちょっと待って下さい」

頭を抱え、必死に思い出そうとした。だが、考えても考えても答えが見つからない。

「私、どうしちやっただのかしら。ごめんなさい、全然思い出せないわ。でも下に行けば」

言いかけの言葉を遮り、エレベーターへ向かおうとした女性を強引に止める。

「あなたは記憶を失っている間、催眠術か何かで操られていました」
そこから総矢は地下で見たもの、負った傷等詳しく説明した。総矢が一通り話した後、女性は憤慨し、総矢の頬を強く叩いた。

「はあ？　人が死んだなんて冗談でも言っていない事とイケない事があるでしょう！」

「俺だつてそう思いたいですよ。でも事実なんですよ！」
「いい加減に」

再度女性が手を振り上げた。その時、エレベーターの扉が大きな音と共に破壊された。

調査？ - 目標 -

『モクヒヨウホソク。シヨブン開始』

現れたのは玲子が作ったオリジナルのロボットだ。玲子もつい先程目にしたものを見間違えるほど抜けてはいない。『目標捕捉』の音声と同時に、総矢の目の前の女性に銃口を向けた。

「危ないっ！」

女性の肩を抱き、咄嗟に机の陰に隠れる。二発の銃声が響く。ロボットが二人を狙っている間に、玲子はロボットの背後を取るために傷ついた足を引きずりながらも回り込む。だが、

「っ！ ガハッ、ゴホッゴホー！」

うっかり床で眠っていた男性の腹部を思い切り踏んでしまった。

異常な苦しみ方をしながら男性は目覚めた。

「な、なんだ？」

起き上がると玲子が人を殺せるんじゃないかというくらい冷たい目で一言告げた。

「邪・魔！」

男性は完全に固まって玲子の駆けていく先へと視線だけをただただ移す。だが、玲子が走る先にいたロボットを見て驚愕した。銃撃を繰り返すロボットが目に入る。女性を抱えながらも総矢は銃撃を紙一重で避け、物陰に隠れ、を繰り返し、耐え忍んでいた。

「ちよつとは、落ち着きなさい！」

左腕部の銃に向かって、床に転がっていた金属片を投げつける。衝撃を感知したロボットはその方向へと向き直る。互いに銃を構えて発砲する。

「柏木さん！」

「大丈夫！」

玲子に銃弾は当たらず、逆に玲子の銃弾はロボットの構えた銃に当たっていた。ロボットの体勢が僅かに崩れる。だが、すぐに再度

銃を玲子に向けなおす。

「くそっ！ 外した！」

玲子はすぐに陰に隠れた。

（何を狙ったんだ？）

総矢は疑問に思いながら陰に隠れ、女性を抱えている。女性を庇い続ける総矢を見て、玲子は振り返って叫ぶ。

「総矢！ 私がコイツを引き付けておくからその間にその男にその女預けて！」

女性を庇い続ける総矢は戦闘の役には立てていない。機能を停止させるためには機動力の欠けた玲子だけでは力不足であることは総矢にもすぐ分かった。

「おい、そのの！ 今のうちにこっちに！」

総矢は女性を抱えながら入り口に向かって走る。男性は慌てておぼつかない足取りで総矢の向かう先へと駆けていく。

「ひ、ひいい。これは一体？」

「説明は後です。この人連れて外に出て！」

驚きと恐怖で足のすくんで動けなくなった女性を託し、総矢はロボットに向かう。総矢は棒を構えて正面から突っ込もうとした。だが、ロボットは狙いを玲子でも総矢でもなく、外へ逃げようとする二人へと定める。

「まずいつ！ おいつ！」

総矢の叫び声に反応した男が振り返る。男が振り返ると同時に銃声が響く。避けられない事を総矢は分かっていた。分かっていたからこそ目を閉じ、その瞬間を見る事を自然と避けた。

「へぶっ……」

男の鈍い悲鳴にもならない声と、倒れる音が総矢達の耳に届く。当然目は向けられない。

「痛っ。って何ですか、あなたは……」

銃弾が当たり、絶命したはずの男の声が聞こえる。

「おい、俺から逃げられると思ってるのか？ いいからさっさと吐

け。てめえらの……」

倒れている男の胸倉を掴み、睨み付ける煉。先程の男の悲鳴は惨いものではなく、煉が入り口から飛び出してきた男に驚き、反射的に蹴りを入れた際のものであった。

「火口さん！」

総矢の声に反応し、振り向いた際には既に男と煉にそれぞれ銃弾が放たれていた。

「チツ！」

煉は掌を前に突き出し、炎の壁を創り出す。銃弾は炎に飲み込まれ、一瞬で消滅した。煉の後頭部によって倒れていた二人には何が起きていたか分からなかった。熱気を感じた時には既に煉の炎は消えていた。遠目で見ていた玲子は驚き、動きが固まった。

（え？ 今の何？ あの人、何をしたの？）

「おい、話は後で聞くからな」

煉はそう言つて二人を追い出し、扉を閉じる。その間、総矢は注意を引くために、攻撃していた。玲子に気付いた煉は、動揺することなく叫ぶ。

「話は後だ！ アレを止めるんだろ？」

「あ、うん……分かつてる」

慌てて玲子は銃を構えた。煉は掌に炎を灯しながら駆け出す。

調査？ ・目標・（後書き）

もう夏ですね。暑い

調査？ - 機能停止 -

総矢！」

叫び声に反応した総矢が、すかさずロボットから距離を取る。と同時に煉が炎を投げつける。炎は球のままボディに直撃し、広がった炎がロボットの全身を包み込む。

「ダメ！ 避けて！」

玲子が叫ぶ。煉の炎は確かに直撃したが、ロボットを燃やし尽くすには至らない。炎の中から煉に向けて数発の銃弾が放たれる。距離があるため、避けるには問題ない。

「あつぶね……っつーか炎が効かねーのか？」

「その子は耐熱仕様！ 外からの熱はその子に殆ど効果が無いから炎じゃダメ！」

玲子の言葉を聞いて煉はニヤリと笑った。正義の味方の笑顔ではない。

「いいねえ……じゃあ全力でやれるってことじゃねえか！」

煉がロボットに向かって突っ込んだ。ロボットは再び煉に向かって銃撃を行う。時より物陰から玲子がロボットに対し銃を撃って煉をサポートしていたが、煉は銃弾を避けるので精一杯だった。だが、煉に狙いが絞られていたため、総矢には考える余裕が生まれた。

（柏木さんは製作者だから耐性も動きもある程度予測出来るのか……そうか、それなら！）

総矢は能力を発動させ、ロボットに突っ込んだ。総矢の能力は「人の思考を読み取る」事である。当然機械相手に効果があるわけではない。それは地下での事から、総矢自身も把握している。

「クソッ、近付きさえ出来れば……総矢？」

「柏木さん！ 俺のサポートをお願いします。火口さんは隙を見て突っ込んで下さい！」

「何？ 策でもあるの？」

総矢が笑いながら頷く。

（能力の使用を制限、対象をその空間ではなく1人に絞る事で体力消費を抑えるっ！）

棒を構え、総矢はロボットの正面から突っ込んだ。

「何やってんだバカ！ 正面から突っ込むな！」

右側に回りこんでいた煉の静止を無視して更に地面を蹴る力を強める。

（あの火口って人の方が上手く避けていたのに、どうするつもり？

……マズいつ！）

銃口が総矢の額に向けられる直前に玲子が気付いた。玲子が慌てて銃を構える。だがそのタイミングで銃を撃つても間に合うはずが無い。煉もそれに気付くと慌てて炎を放つ。

「今かつ！」

総矢は銃弾が放たれると同時に体を捻り、完璧なタイミングで回避する。玲子は呆気にとられたが、狙いを定め直したロボットを見て再び緊張が走る。

（次が来る！ あの体勢だと狙いは外側に少し流れる。切り返さないとい！）

だが、次の瞬間に総矢は玲子が思い描いたとおりの動きで再び銃弾を避ける。

（あれ？ 今のタイミングといい、まさか……それなら！）

その後も総矢は完璧なタイミングで避け続けた。

（なるほど。そういう考え。それなら……よし、今！）

玲子は総矢の動きの意味を理解し、銃を構えて狙いを定める。それを察してか総矢が懐へと飛び込む。だがその先には完全にその動きを待っていたロボットが待ち受けていた。それでも総矢は迷わず突っ込む。

（それでいい！ コレでこっちの、勝ちだ！）

真後ろから玲子が放った銃弾はギリギリのタイミングで避けた総矢の頬を掠め、銃撃直前の銃口へと吸い込まれた。一際大きい爆発

音が響く。よろめいたその瞬間を総矢は見逃さなかった。

「これでっ！」

気合を入れた総矢の一撃がロボットの右腕を破壊した。だが、右腕の破損を完全に無視し、ロボットは爆発で高熱を帯びた左腕で総矢に掴みかかった。

「俺の炎とどっちが熱いと思ってんだ？」

得意げな顔で間に割り込み、炎を灯した左手で煉が左腕を受け止めた。

「ついでに中から燃えちまえよ」

破損した左腕内部へ炎を一気に送り込む。外部がいくら耐熱仕様であっても内部まではそうはいかない。ロボット内は入り込んだ炎は内部機能を全て燃やしつくす。ロボットは二度と動くことなくその場に崩れ落ちた。

調査？ - 機能停止 - (後書き)

自宅PCにトラブルが生じたため、投稿が普段より遅れました。すみません。

因みにまだ問題は解決していません・・・

調査？ - 尋問 -

「ふうつ。終わった〜！」

総矢は安心し、その場に大の字になって寝転んだ。

「総矢、お前うまくやるじゃねえか」

「能力を使っただけですよ」

「機械相手でも使えるのか？ 随分便利だな。でも最後のアレはそれじゃ説明が……」

煉の疑問に答えたのは玲子だった。

「いいえ。総矢が読んだのは私の考え、だよな？」

「そうです。火口さんをサポートしているときの柏木さんの動きを見て気付きました」

「へえ……いや、その前になんでアンタはアレの動きが分かったんだ？」

疑いの眼差しを向けられた玲子に代わり総矢が事情をある程度説明した。無論、能力について話した事も説明していた。状況を把握した煉は、複雑な顔をしながら頷いた。

「ふう、そうか。あ、そうだ。ちよつとここで待つてる」

そう言い残し、煉はどこかへと走り去っていった。

「よし、それじゃ……」

玲子が何かを取り出し、スイッチを押す。辺りが激しく揺れる。

振動しながら所々地面が歪む。地下空間の中心は建物の真下ではなく、丁度総矢達がいた建物のすぐ外だった。

「やばっ……ここちよつと危ない」

「いきなりやらないで下さい！ 心の準備が、うわっ！」

振動が落ち着くと、二人は立ち上がる。玲子が唐突に総矢に話しかけた。

「もう一仕事手伝ってもらえるかな？」

「……さっきの人達ですね？」

玲子が黙って頷く。二人の会話を黙って聞いていた煉が口を開く。
「状況はイマイチ分かんねえけど、とにかくこの2人を連れてくればよかつたんだよね？」

煉が二人の襟を後ろから持ち上げた状態のまま戻ってきていた。
煉の行動の速さに二人は言葉が出ない。

「この短時間に何があった？ さっきの地響きとこの地面関係あるだろ？」

「えと、ここの地下にある研究施設を爆破しました」

総矢の簡潔な答えに煉は驚きもせず、軽く頷いていた。青くなっていたのは二人の研究員だ。

「ちよ、ちよっと待つてください！ それじゃ地下の俺達の同僚は？」

「あんたを眠らせた間に私達地下に言ったけど全員殺されていたよ。さっきのも真つ先にあんた達を狙ってたって事からも分かると思うけど研究員が標的だったみたいだね」

女性はエレベーターから出てきたロボットが真つ先に自分に銃を向けてきた事を思い出し、再び体を震わせる。地下で同僚が殺された事もそこから容易に想像できた。

「待てよ！ まだ試運転すらできない状況だったんだぞ？ それがあんな暴走したのは、お前達が妙なプログラム入れた事が原因じゃないのか！？ 第一……」

男は納得出来ない様子で反論を続けようとしたが、玲子が手で男の口を塞ぎ、強引に話を断ち切る。

「総矢！ 今のこいつの言葉は本当？」

「『試運転すらできない』ってのですね？ 確かに嘘ではないです。総矢は能力で確認した内容を玲子に伝えた。口封じをする必要がなくなつたことに総矢は一安心した。

「そう、それと他にココの事を知ってる人間に心当たりは？ それから……」

玲子は男の口を塞いだまま二人にいくつか問いかけた。総矢は全

ての答えを読み取って玲子に話した。

「今の質問に該当する部分は大丈夫です。核心部分についての情報も無いのは残念ですが、少なくとも知っている情報から何をどうするかと出来るレベルではないです」

それを聞いた玲子は安心したような顔つきになり、大きく深呼吸した。

「次は俺からの質問だ。情報収集のために乗り込んできた連中に何をしたかを教えろ」

煉の質問を聞いた二人の研究員は恐怖で体を震わせている。質問したときの煉は総矢でさえ恐ろしく感じる気迫があった。男の襟元を掴み、顔を近づけて睨みつける。

「……答えろ！」

「お、おお俺は、っ詳しいことは知らない、ただ警備室へ連れてかれてそこから社外のどこかへ連れて行かれるって噂しかっ……」

「てめえは知らねえのか？」

「ど、どこか外部に連れて行かれるとしか……」

疑わしい返答に苛立ちながら煉は叫ぶ。

「総矢！」

「本当です。噂程度の情報しかありません」

「そうか。2人共もういい。総矢、警備室行くぞ！」

「え？ あ、ハイ」

腰が抜けて立てなくなった研究員の二人を残して三人は走り出した。

調査？ - 尋問 - (後書き)

3連投稿 その？

調査？ - 脱出 -

「私も付いていっていいよね？ その原因の一端は私にもあるわけだし」

「協力するってんなら文句はねえよ」

工場地域入り口付近の警備室に辿り着いた。煉は総矢の静止を振り切って扉を開けた。警備室の中には大柄の男が二人いた。

「なんだ、どうした？ 何があった？」

特に慌てる様子も無く、二人は近寄ってきた。だが、総矢達の様子を見てすぐに社員ではない事を理解したらしく態度が豹変した。

男達は荒事に慣れていることもあり、警報装置を作動させる事も無く、警防を構えて殴りかかって来た。

「ハハハツ！ 久々の獲物だ！ 今日は付いている、女までいやがるしな！」

「うわ、台詞が三流の悪役だね……」

男達が返り討ちにあったのは言うまでもない。それも一分も経たずに。

「で、ココに連れてこられた人間は何処へ連れてかれるんだ？」

「……」

「総矢」

「はいはい。でも俺だって結構疲れてるんですよ」

「昨日教えた能力のコントロールが完璧ならそんなに疲れねえ。出来ないお前が悪い」

「そんな理不尽な……」

「そんなのどうでもいいから早くして」

「それも理不尽ですね……くそつ。結果だけ先に言いますが、ダメです。有益な情報はないです。それと今すぐココから離れます」

「情報がねえだと？ どういうことだ？」

「詳しくは後で話します。それより、少し急いだ方がいいです。す

ぐに交代の人間が来ます。取りあえず脱出します」

総矢は警備室の中心に電子爆弾とタイマーをセットしながら二人に告げた。

「脱出方法は？」

「俺の持つてるもので何とかありますよ」

タイマーセットを終え、二人の警備員をスプレーで眠らせると警備室を後にした。そのまま三人が向かったのは工場施設の入り口だった。向かう途中で総矢は得意げに話し始めた。

「簡単に説明します。警備室とココの設備はリンクしていてどちらかに何かトラブルがあると物理的に閉鎖されます。その上、片方には記録が残るシステムになっています。まず記録を避けるために警備室と入り口の門を電子爆弾でシステムをダウンさせます」

総矢は、警備室で拝借したヘルメットを二人に渡す。

「上手くいけば物理的な閉鎖自体が阻止できますが、上手くいかなければこの小型爆弾を使って強行突破します。閉鎖が生じた状態では門に注目が集まるはずですよ。そんな中火口さんが炎を使うわけにもいかないのよ。あと、極力顔を隠すためにヘルメットは深くかぶって下さい」

煉と玲子はただただその話を聞いていた。

「それで、門から出るのは後何分後？」

「タイマーは3分で設定したので、あと1分ちよつとですよ」

「で、外へ出たらどうするんだ？」

「……」

「総矢？」

「……ダツシユでお願いします」

総矢の回答に煉も玲子も呆れた。

「結局最後は自力かよ」

「向こうが車とか使ったら間違いなく追いつかれるよ？ 出てからもしばらく見晴らしい上に人込みも無いし……ったくしょうがないな、出た後は私が何とかするよ」

玲子の策を聞いている暇は既に無かった。総矢は腕時計を見ながら門へと歩み寄る。

(……………3……………2……………1……………よし)

電子爆弾を起動させる。警備室の物も同タイミングで起動していたが、門では地面から現れた分厚い壁によって封鎖された。

「下がって下さい！」

総矢はすぐに爆弾を壁に向かって投げた。爆音が鳴り響き、壁の一角が崩れた。

「よっしゃ、そこから出るぞ！」

真っ先に外へ出たのは玲子だった。煉と総矢もそれに続く。壁を通り過ぎたところで総矢達が見たのは、今まさに車に乗り込もうとする玲子の姿だった。

「ほら、早く乗った乗った！」

二人を呼び寄せる。玲子は、二人が完全に乗り切る前に車を走り出させた。

「オ、オイ！ あつぶねえな……………」

「いででで、まだ乗ってな……………」

煉は車内に足をかけた状態だったが、総矢はドアを開けて今まさに乗り込もうという体勢だった。そのため総矢は一人後部のドアに捕まり、引きずられた。

「あ、ゴメン」

悪びれる様子も無く謝罪の言葉を口にする。強引に総矢が乗り込んだ後、車はスピードを上げ、工場施設から離れていった。

調査？ - 脱出 - (後書き)

3連投稿 その？

調査終了

「で、何であいつらが知らねーんだ？」

車内で唐突に煉が口を開いた。

「あそこの人達はただの雇われ警備員です。一時的に拘束して、引取りに来た業者に引き渡すだけが仕事。引渡し相手についても、十分な情報を持っていませんでした。あそこの研究員の方々も噂程度にしか知らないようでしたから誰が知っているのか、という事もよく分かりません」

煉はしばらく考えていたが、総矢は言葉を続けてその思考を遮る。「もちろん上層部の方々を少々『説得』すれば話を聞けると思いますが、大事になると思います。流石にそれは避けたほうがいいと思います。ちなみに引渡し相手は不明ですけど、毎回警備室についている固定の直通連絡で毎回引き渡し時に異なるパスワードを決めて確認していました」

更に都合がいい事に、警備員の一人がその連絡先を調べた事があった。工場内部である事は間違いなかったが、結局連絡先は見つけられなかった。その話を終えると、総矢は煉に潜入時からの一部始終を報告した。次いで玲子も詳しく事情を説明する。

「盗まれたって言ったけど、おそらくそれは政府の指示。証拠は無いけど条件はそろってるしね。その上アレを兵器転用のために提供したって情報を流出させたのも政府。多分研究員の女性を操ってあそこから持ち出そうとしたのも同じ組織」

玲子はそれを防ぐために持っていたものの大半を破棄していた。「父も祖父もきつと私と同じ事を同じ事をした。人を傷つけ、不幸にするためのものに成り下がるくらいなら無い方がずっといいって教えられてきたから」

総矢は返答に困り、黙って聞いていた。

「話は変わるけど、どこまで乗せていけばいいのかな？」

沈黙を破った質問だが、再び社内が静まる。煉は腕組みをして硬く目を閉じ、唸っている。

「ねえ、聞いている？」

「……まあ仕方ねえんだが、ちよつとこの後時間くれるか？」

「デートのならお断りだけど？」

玲子の回答に煉はため息をついた。

「違えよ、真面目な話だ」

煉の真剣な表情を横目で見て簡単に答えた。

「アンタ達に関しては何も言いやしないから安心して。今回は色々世話になったし。というか今度改めて礼はするよ」

「その言葉だけで信用していいもんか悩んだ結果がさっきのお誘いだ」

「無理。今日は流石に帰りたから。明日でいいかな？ というか私も当事者なんだから人に話したらイイ事無いつてのは分かっているつもり。それでも信用できないなら、ホラ」

玲子は名詞を取り出し、助手席の煉に差し出した。

「名詞？ ……あ？ ……分かった。信用する」

「で？ こつちからの連絡は総矢経由でも構わない？」

「平気だ。礼は期待してるからな」

名詞を受け取ってから煉が妙に嬉しそうだっただのが総矢は気になったが、特に話に割り込む事はしなかった。その後、総矢と煉はレイルの店の近くで車から降り、無事に帰宅した。煉は終始笑顔で総矢の肩を何度も叩いた。

「お前には感謝してるからな」

当然ながら玲子について尋ねたが、煉は「知らなくていい事、あの人は凄い人だ」としか語らなかつた。能力を使う事も考えたが、疲れが溜まっていた事と、煉は必要であれば教えてくれるという自信もあり、それは実行しなかつた。

「あ、ちよつと俺寄るところあるんで先に戻って下さい」

「ん？ ああ、分かった。じゃ先に戻ってるぞ」
総矢は煉に別れを告げ、レイルの店へと向かった。

調査終了（後書き）

3連投稿 その？

強引ではありますが「先ず『調査』は終了です。

完全に夏です。暑す。

進展？ - 呼び出し -

「いらつしゃいま……あつ、総矢さん！ こんにちは」

「お、来たか」

見慣れた二人が総矢を出迎えた。他に客は一人もいなかった。真つ直ぐにカウンター席に向かう。

「相変わらず人が少ないみたいですね」

「うるせーよ、お前も容赦なく言うようになってきやがって」

「じゃあその分総矢さんが沢山注文して下さいね」

「沢山、は無理だな。取りあえずコーヒー、ホットので」

総矢の注文に不満そうな顔を向ける優衣。気圧された総矢は顔を引きつらせる。

「……じゃ、じゃあサンドイツチも……」

「分かりました！ 少々お待ちください！」

待っていた言葉を聞いた途端、優衣は嬉しそうに返事をする。

「優衣ちゃん、練習だ。サンドイツチだけじゃなくコーヒーもやってみな」

レイルに言われた言葉に驚いてはいたが、それよりもすぐに嬉しそうな顔に変わり、「はい」と元気よく返事をしてから作業を開始した。

「あの、客に練習って……」

苦笑いしながら文句を口にしようとしたが、レイルは総矢に手を差し出す。

「ID貸しな。今回の件でアイツからの礼だそうだ。さっき連絡もらってたな」

「礼、ですか？」

促されるままIDを差し出す。

「どうせ自分で話してないだろうから説明するが、アイツは相当なお偉いさんと繋がりのある人間なんだよ。アイツの父親は国そのも

のを動かせるような地位にいた存在だった。それによる繋がりもあるが、それだけじゃなくアイツ自身に周りが認めるものを持っているってのもあるが」

「回りくどいですよ、もっとハッキリ言っして下さい」

総矢はレイルの話を遮り、簡潔な答えを要求する。

「半永久式発電装置、自立可動ロボット、それと世には出回ってないもので言うとお前も持つてる転送装置。他にもあるが、現在必要不可欠とされる物の多くはアイツの祖父が原案を、父親とアイツ自身が形にした。用は作り出したって事だ」

「それだけにこの国にとつても相当な重要人物ってことですね？」

レイルは視線だけ総矢に向け、頷いた。

「よし、これでお前のIDレベルは『2』だ。いや、正確には『2.5』と言うべきか。ポイントとしては十分すぎる程だな」

「ありがたいです。というかそう言えばココの店って何でそんな事が出来るんです？」

その問いかけに、レイルは呆れた表情を向ける。

「い、今更聞くなよ。そりやお前……」

「お待たせしました」

答える前に優衣が皿とカップを手に、二人に近付く。

「ありがと、それじゃいただきます」

「ほお、手際いいじゃねえか」

優衣のいるところで真剣な話をしないことはいつの間にか暗黙の了解となっていた。総矢が食べる様子を嬉しそうに眺めている。

「えと、うん。うまいよ」

視線に気付いた総矢がそう言うのと優衣は更に笑顔を輝かせる。突然、総矢の携帯が鳴った。着信は煉からのものだった。

「どうしたんですか？」

「今すぐ戻って来い！ 詳しい事はこっちに来てから話す！」

強い口調と焦った様子から、不安が掻き立てられる。総矢は残ったサンドイッチを強引に口に押し込み、「すみません、今日はこれ

で」と一言告げて店から駆け出していった。店内に残されたレイルと優衣はその様子に驚いていた。

「……あ、総矢さんお金払ってないです」

「次来たとき3倍払ってもらうしかねーな」

進展？ - 呼び出し - (後書き)

先週休んでしまい、申し訳ありません。

来週、再来週は投稿できるかどうか分からないので間が開くやもしれません。

ご容赦下さい。

進展？ - 着信 -

清正たちのアジトはレイルの店からすぐ近くだった事もあり、総矢はすぐに到着した。

「来たか、総矢」

入り口のところで清正、煉、みことの三人が待っていた。様子がおかしい。

「何があつたんですか？」

「仲間が殺された」

総矢は固まった。文字通り瞬きもせず、呼吸すらできずにいた。清正が続ける。

「俺も直接見たわけじゃない。生き残っていた1人から聞いたんだが、俺と大塚さんがいない時に何者かがココに侵入したらしい。抵抗する間も無くそいつが暴れ回って下から順にフロアにいた仲間を……」

清正の言葉が詰まる。煉が横から口を挟む。

「帰りにお前から聞いた、『通信の監視』ってのが原因でその連絡先だったココを標的にした可能性が高い。俺達はこれからもう一度あの工場へ向かう、お前も来い」

三人に会った瞬間、おかしいと感じた原因が分かった。怒りで表情が険しい事もあるが、何より全員、周りが見えなくなっている。普段冷静な清正までがここまで怒りを顕にしているのがその原因の一部であつた。

「ちょっと待って下さい！ 少し冷静に……」

「は？ 何言つてんの？ 仲間がやられたのよ！ こんな理不尽な事、絶対に許しちゃいけない！ やつた奴は徹底的に苦しめなきゃ気が済まない！」

他の二人もみことを止めるつもりはなかった。

「同感だ。直接やった人間、指示した人間、どちらも許す気は無い」

「ああ、構わねえだろ。そうしなきゃ気が収まらなねえよ」

(ダメだ、聞く気が無い。どう説得したら……?)

総矢は必死で考えを巡らせる。とにかくこの状態の三人を行かせると、手当たり次第暴れ、怪我人がでる程度では済まない事は目に見えていた。清正が怒りで冷静さを失い、頭が十分に働いていない事を期待し、誘導を試みる。

「分かりました。俺が行きます。ただ、4人も行く必要はないと思います」

総矢は玲子と煉を順に見た。

「何それ？ 私達は必要ないって？ 私は今すぐ行かなきゃ気が収まら」

「人数に関係なく、俺が行けば情報は十分に得られます。それに今の皆さんが全員で行ったら間違いなく状況が良くない方向へ傾きます。あんな事があつたばかりで警備は嚴重になっている上に、火口さんは能力を使用していて、戦力が少し欠けていることもあります」

「てめえよりよっぽどマシだ。まだ3時間はぶっ続けで戦える！」

煉の反論を無視して話を続ける。

「怒りのままに暴れてしまったら、無関係な人にも被害が及ぶかもしれないですよ？」

「……言いたい事はそれだけか？」

沈黙の後に口を開いたのは清正だった。

「関係無い被害が及ぶ？ あそこにいる奴らは全員加害者だ。止めるつもりも無い！」

「それをやったら向こうと同じじゃないですか！」

「先に手を出したのは奴らだ！ 受けた分は返す！」

「そんなこ」

電話の着信が言い争いを遮る。清正の携帯だ。発信元の名前を見て清正の表情が強張る。

「清正？ 誰からの着信だ？ いい加減早く出……」

後ろから覗き込んだ煉も目を丸くしていた。発信元は煉も死亡を

確認した仲間の一人だ。

「もし、もし……」

『やっと出ていただけましたか？』

携帯から聞こえる音声は、人間の肉声ではない。声を変換させているために、妙に高い。

「お前は誰だ？ どうしてその携帯を持っている？」

話しながら清正は煉に目で合図する。煉は黙って頷き何かを取り出した。

『今日拾った物なのでご連絡を差し上げたのですが』

「拾っ……まさかお前」

『本日そちらにお伺いした内の1人です。もちろん携帯を拾うために伺った訳ではありませんが』

「今どこにいる？ 答えろ！ 今すぐ潰しに行つてやるよ」

『ハッ……言うとは思っていないだろう？ 逆探知までしっかりやつてるくせに』

そついい終わると通話が切れた。清正は携帯を握り締め、歯を食いしばる。

「煉、場所は？」

「逆探知はできた。場所は近いぞ、あそこだ！」

煉が指差した先に大きな建物が見える。当然総矢達を見ている人間は確認できない。

「行くぞ」

総矢が止める間も無く三人は駆け出していた。

（しまった。油断した）

慌てて総矢も後を追った。

煉が指差した建物は駅からそれ程離れてもいないところにあつた七階建てのオフィスビルだった。暗くなつた空に反して、いくつかのフロアからは電灯の明かりが漏れている。総矢は見失うことなく三人を追い続けてビルの中へと駆け込んでいった。既に勤務時間が終わっている事もあり、中にいる人間は完全にはゼロではない状況ではあつたものかなり少ない。エレベーターの前で全員が立ち止まる。

「下から順に行く。総矢は入り口で出てくる人間を片っ端から調べろ」

清正の指示にすぐさまみことが付け加える。

「見つけたらすぐに連絡ね。私たちが殺るから手は出さないですよ」

「煉と大塚さんは偶数階を、俺は奇数階を調べる、いいな？」

煉の体力を考え、分散は即座に決められる。異論は無く、すぐに三人は調査を開始した。その間に、総矢は能力をONにしていた。

（俺にできるのは状況把握くらいだな。能力対象をこの三人に限定すれば、この建物を調べるまでくらいは何とかなる……よな？）

「ヤツはどこ？ ぶつ殺してやるわ」

『絶対許さねえ』

『ココで必ず仕留める』

（よし、いけるな。にしても全員殺意しかないな。電話があつてからココをすぐに離れた可能性だつてあるはずなのに、それすら考えられていない）

総矢の想像通りに三人が順にフロアを調べながら上を目指すが、当然それらしき人物は発見されない。同時にビルそのものから出てくる人間もない。調べていくうちに清正の頭に疑問が浮かぶ。

『妙だな。電灯がついている部屋もあつたはずなのに誰もいない？』

（そう言えば、出てくる人間もだな。……まさか畏か！ 誘い込ま

れた！)

総矢はすぐさま携帯を取り出し、清正へ連絡する。建物から出る人間もいなければ建物内部にいる人間の気配すらない。その状況を認識した清正は即座に総矢と同じ結論にたどり着き、エレベーターに向かって走り出す。

『煉達にすぐにココから出るよう連絡してくれ！ それからお前は建物から離れて路地にでも潜んでろ！』

通話が終了すると同時に即座に煉に連絡した。

「畏の可能性が高いです！ すぐに外へ出てください」

『畏だと？ そうか、誰もいないのは……分かった。大塚には俺から伝える。切るぞ』

総矢はビルの向かい側の通りにある細い路地に入り、遠目から様子を伺う。その間も変わらず建物から出てくる人間は一人もいなかった。

(一度外に出るのは分かるが、俺に隠れるよう指示したのはどういう意図だ?)

総矢の疑問にはすぐに答えが出た。突如ビルの警報装置が作動した。大きく鳴り響くアラームがビルの入口周辺にすぐさま人の山を作り上げた。あと一分離れるのが遅ければ、総矢も巻き込まれていた。

『これじゃ迂闊に出られないな。これだけの騒ぎだ。警備員、いや下手すると警察に取調べを受けかねない。流石にそれは避けたいな』
清正の苦々しい表情が目には浮かぶ。と、マナーモードに切り替えた携帯が振動する。

『総矢、聞かなくても分かると思うが俺達はもう少しココに潜む。外で何かあったら俺達に連絡をくれ。いいな』

「分かりました。あ、今警察が正面にきました。サイレンの音から消防もすぐ来ます」

『本当か？ 何でこういう都合の良くないときばかり手際がいいんだ、クソツ！ 一旦切るぞ。何も無くても1時間後に連絡をくれ。』

じゃあな』

一方的に通話を終了させられる。

（合流したみたいだな。三人はまとまって行動する。それなら能力使用は1人でいい。長くなりそうだから制限しないと、もう四階まで上がったのか）

煉とみことを対象から外し、清正にのみ絞る。その直後、轟音と共に四階の窓ガラスが割れ、炎が噴出した。野次馬の上にガラスの破片が降り注ぎ、悲鳴が聞こえる。

進展？ - 畏 - (後書き)

タイトルで丸分かりつすね・・・

来週は確実に投稿できません。投稿可能となるのは早くとも来週の火曜日以降です。申し訳ありません、ご了承下さい。

進展？ - 攻撃 -

「なっ……」

思わず言葉を失った。炎の主は、煉でもみことでもなかった。

『くそっ！ いきなりか！ だがなんとか全員分間に合った』

清正が咄嗟に全員を水で包み、難を逃れていた。爆炎が収まり、三人は水の中から出る。

「2人とも無事か？」

「清正、悪いな」

「ありがとう、助かったわ」

（よかった、無事みたいだな。それにしても今の爆発は）

「上だな」

唐突に煉が口にした。突然の発言に清正とみことは顔を見合わせる。

「おそらく屋上だ。警報を鳴らして俺達を中に留まらせた。狙いは間違いなく俺達だな」

「他は分かるが、屋上って根拠は何だ？」

「勘」

言いきり、煉は階段に向かって走り出した。清正とみことは何も言えず、煉の後を追った。階段を駆け上がりながら清正は考え続けた。
「いた。」

『爆発物を予め用意していたのかことは間違いなさそうだ。俺達を誘い込んだってのも頷ける。他の階を見る限り爆破はさつき俺達がいた階だけ。つまり俺達の動きを相手は把握しているはず』

上っている間、何も仕掛けが作動する気配もない。総矢も同様の疑問を感じていた。

（犯人が上にいて、仕掛けてこないってことは俺達に何かを仕掛ける必要すら無いってことか？ それとも何か別の目的が？）

階段を駆け上がる音だけが建物内に響き渡る。そうするうちに屋

上に出る扉の目の前に辿り着いていた。

「着いたぞ」

迷いなく扉を開けた。扉を開けて正面に一人の人影が見える。夜景に照らされ、三人に背を向けているために顔は確認できない。だが、服装から性別は判断できる。

「女か？」

煉の問いかけに黙ってゆっくりと振り返る。短めのスカートが僅かに浮かび上がる。耳元に当てていた携帯を上着のポケットに押し込む。

「いらつしゃい。あの爆発でも無事だったのね」

電話と同様に声は機械的なものに変換されていた。

「その声……やはりお前が電話の主か？ 仲間を殺したのもお前か？」

清正の問いかけに言葉では答えず、薄く笑った。口元のみが見える仮面を着けたふざけた格好にみことは我慢ならなかった。

「間違いないわね！ それなら容赦はしないわ！」

みことが炎球を投げつけた。女は身軽に跳ね、炎を避ける。だが、着地時をみことの炎球が再び襲いかかる。それでも女は余裕な笑みを浮かべている。誰もが直撃を確信していた。だが、足が着いた瞬間に女は加速した。細く、華奢に見える足では到底不可能な程に。

「えっ？」

思わずみことは声を出してしまった。突然の事に驚き煉と清正も一瞬固まった。その隙を逃さず、女が反撃を繰り出す。

「痛つてえ！」

「ぐっ、何だ？」

煉と清正は瞬間的な痛みには悲鳴を上げた。誰もが攻撃を把握できずにいた。

「何？ 2人ともどうしたの？」

相変わらず黙ったまま笑みを浮かべている。炎球ではなく、炎を女性の周囲に展開させる。

「何とか言いなさいよ！ このっ！」

みことは女を睨み、炎で取り囲んだ。そのつもりではあったが、またも突然の加速により避けられる。と同時に鋭い痛みがみことをも襲う。痛みに耐えながらみことは炎を繰り返す。

「何なのよ！ コイツッ！」

更に苛立ち、攻撃が荒くなる。何故か先程から、みことよりも煉と清正に対して執拗に攻撃を繰り返している。その為、二人は能力も満足に使用できない状況に苦しんでいた。

「落ち着け！ ……それじゃ無駄撃ちだ。うぐっ！」

頭に血の上ったみことを止めたのは清正の一言だった。攻撃を止め、様子を窺う。

「さっきからコレって何？ 瞬間的で大したダメージはないけど、狙いがずれるし集中も遮られて厄介すぎる！ コイツも能力者？」

みことは呼吸が荒くなりつつあった。対して、相手の女は依然として余裕の笑みを浮かべている。清正は顔を歪めながら考えを口にする。

「能力者だ。その能力は、この感じ……電気だな」

進展？ - 攻撃 - (後書き)

遅くなりました。遊びまわってきました。
最近夏が終わりに近づいている気がします。

進展？ - 逃走 -

女は口を開け、驚いた。だがすぐに先程以上に嬉しそうに口の両端を上げる。その動きだけで『正解』を意味することは判断できる。「流石ね。といてもアレだけ受ければ分かっちゃうか。まあ分かっちゃうたならいいか」

女が手を向けると同時に煉は再び苦しみ出した。

「おかしいわね。さっきより強めにやってるのにどうしてそっちは平気なの？」

清正は大して痛がる様子もなく立ち上がる。

「知らないのか？ 純粹な水ってのは電気をほとんど通さないんだよ」

清正の体は薄い水の膜で覆われていた。

「お前と同じだ。お前は電気を体に纏わせて電氣的な刺激を与えて普段よりも強靱な脚力で戦っている。だが俺にはそんな付加能力はない。ただ単に電撃を防ぐだけだが、それで充分だ」

得意げに語り、清正は煉にも水の膜を生成する。

「俺と煉を優先的に攻撃していたってことは、厄介者をさっさと片付けようって魂胆だな。ということはどうやら俺達について詳しいようだな」

女性の口元から初めて笑みが消えた。先程以上の加速で一気に清正に接近する。みことは危機を感じ、自分達を炎の壁で囲った。が、炎壁の中一帯に放たれた電撃がみことの体を硬直させる。

「いつっ！」

僅かに炎が揺らいたが、途切れるほどではない。先程と比較しても殆ど攻撃を受けてはいない。

「狙いは悪くない。だがな」

清正がみことの体にも水の膜を張っていた。

「って、お前は自分だけさっさと守りやがって。まあ助かったが」

「感謝するわ。これなら十分戦える！」

みことが左手で炎壁を維持しながら、右手に圧縮させた炎を構える。清正は煉とみことの掌には水の膜が張られていない。そのために炎は自在に操る事が出来ていた。

「さて、これだけ痛めつけられたんだ。俺もやらせてもらっぞ」

煉も身構えた。三人は背を合わせ、みことが炎壁を解除すると同時に女の位置を確かめる。だが、屋上には誰もいない。風が開いたままの扉を揺らし、乾いた音だけを響かせている。

「逃げたの？」

「なんだと？」

「追っぞ！ 急げっ！」

その情報は総矢も同時に把握していた。総矢は細い路地から出て駆け出した。

（外に出る可能性も、ある。それなら……くそっ！ もう能力が限界だ！）

総矢は能力に使用できる体力の限界はすでに把握している。途中で眠りに着くわけにもいかず、総矢は能力をOFFにした。建物の裏手には人だかりは出来ていなかった。爆発の影響が大きく出ていたのは大通りに面していた入口側だけだった。総矢は再び身を隠す。

（相手は当然あの正面から出てくることはない。ということは裏の……来た！）

二階の窓が静かに開くのを気付いた。注意深く周囲を確認してはいるが、総矢が監視している事は気付いていない。躊躇いなく窓から飛び降り、静かに着地する。

（このままじゃ上の3人は間に合わない。能力も使えない状況じゃ危険だが、引き留めるか）

総矢は何食わぬ顔で堂々と女のいる通りに姿を現す。着地後に屈みこんでいた女性も警戒心から素早く反応した。総矢に向き直る前にすぐさま仮面を外して持っていたハンドバッグにしまう。

「どうしたんですか？ 大丈夫ですか？」

総矢は屈みこんでいたところを見て、心配した男性　を装った。

「あ、いえ。ちよつと小銭を落としてしまっただけです」

「気分が悪いのかと思いましたがよ。ここは人通りも少なし、女性一人じゃ危険ですよ」

歩み寄るうちに互いに顔が徐々に鮮明になる。だが、女の立ち位置は街灯によつて生まれる陰で総矢からは見難い。女の放つ雰囲気から、総矢は奇妙な感覚に陥った。

（ん……？　何だ？　電気の影響か？）

先に総矢の顔を認識した女は別の反応を示す。怯えるような、驚くような、そんな表情だ。

「え？　ウソ……だって……」

女は体を翻し、走り出す。総矢は慌てて手を伸ばす。

「え、ちよつと？　何も逃げなくても」

総矢の手は届かず、不格好に手を伸ばす態勢になった。すぐに後を追って走り出すが、角を曲がった直後に姿が確認できなくなっていた。総矢の携帯が鳴る。

進展？ - 回収 -

「総矢！ 外に誰か出てきてないか？」

「水口さん。それが、今逃げられました。引き留めようとしたんですが」

「クソツ……仕方ないか。俺達もこれから外に出る。安全に出られる出口はあるか？」

「大通りと逆側の窓の二階からなら。今サイレンの音が止まったの分かりますよね？ 消防が到着しました。急いで下さい」

「ああ。お前は念のためもう1度近くに隠れてろ」

通話を終え、総矢は再び路地に身を潜める。一分もしない内に先程の窓に人影が現れ、開けっぱなしの窓から三人が次々に出てきた。それを確認した総矢は路地から出て歩み寄る。

「総矢、奴はどっちへ向かった？」

「あの角を曲がった所で見失いました」

「……使えないわね」

「聞こえてますよ。能力使われたら俺だって追いつける訳ないじゃないですか」

「よし、分かれて探すぞ！」

(俺はもうこれ以上は能力を使えないし、役には立てそうにはない) 煉の一言に総矢は顔を曇らせる。だが、清正は頷くことなく視線を総矢の後ろに向ける。

「待て。その前に、だ」

暗い中でもハッキリと認識できるほど派手なシャツを着た男が立っていた。細身の男は無表情のまま総矢達を見ている。

「あの女、結局1人も仕留めてないじゃねえか。爆破で仕留められなかったのは仕方ないとして、自分の能力で誰かを殺す覚悟なんてまだないみたいだな」

肩でため息をつきながら、不満げにそう口にした。煉が声を荒げ

る。

「さっきの奴の仲間だな」

「当たり前。用件は分かるか？」

「私達を完全に潰す事かしらね？」

男は答えずに歯を見せる。すぐさま清正とみことが身構える。そのやり取りを行ってる間に煉が総矢に目で訴えかける。

（能力使えって事ですか？ もう限界なんですよ、ってそんな睨まなくても……分かりましたよ、後は頼みますからね。こうなりやもう……一気に頭ん中、全部見せてもらおうぞ！）

総矢は能力を発動させた。これまでに無い程全力で男の頭を覗き込む。朦朧とする意識の中、体をふらつかせながら読み取る思考を頭に刻みつける。

（組織……調査……能力者、新人……命令……処分対象……あ、もう無理……）

総矢の意識はその場で途絶え、冷えたコンクリートの上に倒れ込んだ。

「どうした、総矢？」

「ちよつ、何やってんのよ！」

「2人はあいつをどうにかしてくれ。総矢は俺が何とかする」

煉が気を失った総矢を担いで立ち上がった。男は左手で自分の頭に触れ自身が感じた妙な感覚確かめるために思考を巡らせる。

（今の感覚は何だ？ それに今、アイツ何をした？ 前触れなく突然倒れた。気を失ったとはいえ表情は自然、呼吸が乱れた様子もない……そうか、だからアイツだけ）

煉は相手を二人に任せ、その場から離れようと背を向ける。

「ちよつと待て。その男は我々が回収ささえてもらう」

「何を言ってる」

言葉を遮る突風が煉を襲う。予測不能な強風に態勢を崩して煉は総矢から手を離れた。

「やべつ、すまん総……は？」

総矢は地面に横たわることなく宙に浮いていた。その体が突風に
あおられ、空高く上昇した。

「ハイ回収、と。お前らは死んでいいから」

男は右腕を大きく水平に振った。清正はいち早くそれに反応し、
男に向かって水流を放出した。水流が上下に割れる。

（やはりっ！）

総矢に目を取られていたみことの頭を掴み、地面に押さえつけた。
と同時に立ち上がるうとする煉を制止する。

「煉っ！」

瞬時に理解し、煉も体勢を低く保つ。

「おおお、すごいな。こりゃああいつじゃ仕留めきれねえ訳だ。咄
嗟の判断力、それに合わせた対応の早さ……いいねえ、やっばこっ
じゃねえと楽しくねえよな！」

進展？ - 回収 - (後書き)

最近のゲリラ豪雨は特にヤバイですね。
ゲリラ豪雨に限らず危険な地域もあるようですが。

進展？ - 相打ち -

縦横無尽に右手を振り回す。今度は清正が分厚い水壁を作り出す。水壁が裂けるのを目視し、清正は素早く移動し、安全な立ち位置に落ち着く。みことと煉も同様に安全な位置を見極める。

「『かまいたち』みたいなものか。ってことは」

「『風』が自在に操れる……ってことね」

冷静に分析する清正達に男は興奮している。

「最っ高だよお前ら！ 弱えやつらをいくら髑つても面白くねえかな！ そこそそやねえと退屈しちまうからな、今日の昼間見てえのはもう勘弁なんだよ！」

自信の体を僅かに浮かせ、清正に向かって突進する。

「お前がやったのかつ！」

鬼の形相で清正が叫ぶ。水壁の一部が圧縮されて弾丸の如く射出される。

「仕事だからな。だが奴らは所詮クズな弱者共だろうがつ！」

水弾を避けると同時に風で軌道を僅かに変えつつ、尚も男は接近する。

「ぶざけやがつて！ ぶつ潰す！」

「許さない！ あんた達は生きてちゃいけない！」

煉とみことの炎が男を包み込む。

「このまま蒸し焼きよ！」

圧縮し、更に高温にした炎をみことが放つ。

「あゝあゝ、駄目だなこの程度じゃ。まだまだ未発達なのか、あるいは限界が低いのか」

男の涼しい声が炎の中から聞こえる。

「届かねえよ。こんなんじゃ足りねえってんだよ！」

男の叫びに同調し、炎が散った。瞬時に炎が消され、無傷で宙に浮く男が二人を見下すように言い放つ。

「炎なんざ俺には効かねーよ。この程度簡単に振り払えるレベルじゃねーか。期待はずれだな」

だが、直後に気がついた。自分の目の前に『二人』しかいない。「能力に頼りすぎたクズが！ 人の仲間見下してるんじゃないよ！」炎で視界を遮っている間に背後に回り込んだ清正が口を開く。清正は自らが噴出した水の勢いで男の背後まで飛び上がった。指先から高圧縮した水を吹き出しながら男の左腕に向かって左手を振り降ろす。肘から先が男の体を離れ宙に舞う。痛みに顔を歪ませながらも残った右腕で反撃を繰り返す。

「てえなっ！ このっ！」
水平に振るった男の腕の先から、目に見えない風の刃が清正の左前腕部を切断した。

「クソッ！」
男は切り離された自身の腕を空中で掴み、すぐさま清正から距離を取る。

（迂闊だった……まさか片腕取られるとはな、左……手？ しまった！）

男が慌てて振り向くと、総矢は地面に向かって落下していくところだった。落下地点に先回りした清正が水のクッションで総矢を受け止める。

「煉。頼む」
慌てて駆け寄る煉が総矢を抱える。

「チッ！ これじゃあの女と同じで失敗じゃねえか。覚えておけよこの野郎！」

捨て台詞を吐き、男は飛び去って行った。

「この、待ちなさい！」
「よせ！ 今追うのは危険だ。仲間がいる風な話し方だ。今の状態ではまともに戦えない」

「いいから余裕ぶってる場合じゃねえだろ、病院だ、病院！」
出血に耐えられず、清正は膝を着く。清正の左腕からの大量の出

血に目を奪われ、みことは硬直していた。

「大塚！ 今なら正面の通りに出れば救急隊がいるはずだ！ 呼んで来い！」

煉の叫び声が響き渡った。駆けつけた救急隊員による応急処置が施され、清正はすぐに中央病院へと搬送された。怪我の原因については、煉が咄嗟に爆風から逃げて窓から飛び降りようとしたが、飛び降りる直前に飛んできた金属片が何かによって切断された。という少々苦しい言い訳をしていた。

進展？ - 相打ち - (後書き)

太った気がします。ダイエット検討中ナウ

肘から腕って上腕って言っんですね。いざ文章表記となると結構難しいです。もともと肩から肘を『一の腕』、肘から手首にかけてを『二の腕』って呼んでいたらしいです。余計にややこしい事になりそうなのでこれからも日常生活では『コロ』と言っようにします。

進展？ - 左腕 -

九月五日の夕方、顔に痛みを感じて総矢は目を覚ました。目を覚ますと右頬を引つ張られていた。

「お久しぶりですね、崎見総矢君」

「先生、医者が患者にそういうことするっていいんですか？」

「外傷無し、CTにも異常は見られませんでした。健康体の君が幸せそうな寝顔でゆっくり休むことで私の仕事を増やしていると考えると不満に感じてね」

「す、すいません。……っっていうか患者の心のケアはしなくていいんですか？」

総矢は反論した直後に冷たい視線を向けられ何も言えなくなっていた。

「話は変わりますが君の友人ですよ？ 片腕を失って運ばれてきたのは」

「そうですね。俺の知り合いです。あの、その人の傷の具合は？」

「命に別状はないですよ。切断された腕があれば繋げられた可能性もありましたが……傷自体はもう塞いであります。また何か厄介事に首を突っ込んでいるみたいですね」

「そう、ですね……」

「それにしても驚きましたよ。大塚さんと一緒にいることには流石に驚きました」

みことと再会し、命の心配が無くなった事を矢口に伝えていなかったために矢口は総矢が死体で運ばれてきたと勘違いしていたそうだ。『情報屋』と『能力』に関しては触れないまま、総矢は事情を説明した。

「なるほど、危ないところを彼らに救われ、行動を共にするようになった訳ですか。すると彼の腕は大塚さんが原因で？」

「いえ、昨夜は別の不審者に襲われて……」

「不審者？ どういう訳かは分かりませんが、その犯人の刃物は恐ろしいですね。あそこまで綺麗に骨まで切断された状態の腕は初めてです」

迷った末、総矢は『能力』について話した。だが、清正や煉については本人の許可を得るべきと判断し、話したのは男の『風的能力』についてのみだ。

「何とか反撃して彼に手傷を負わせて撃退しました。昨夜、ここに俺の知り合い以外に急患で運ばれた、あるいは緊急手術を受けた方って知りませんか？」

総矢は少しでもその男について繋がる情報が無いか矢口に尋ねる。「昨夜、この病院に運ばれてきたのは君達だけです。私も当直医だったのでそれは確かです。他の病院にも問い合わせてはみます。何か分かりましたらこちらから連絡します」

総矢と会話の中で記憶や体調不良などの問題も無いと判断され、矢口は病室から出て行った。

「あ、もう大丈夫なのですぐに退院です。まあ今日は構いませんが、明日、早めに病室開けてくださいね」

最後の一言に総矢は苦笑いするしかなかった。居心地が悪くなり、総矢は清正の病室へと足を運ぶ。点滴が繋がれ、僅かに変色した左腕の包帯が出血の激しさを物語っている。

結局その日、清正は目を覚まさなかった。病室に戻った総矢は見舞いに来ていた煉から、気を失った後に起きた出来事を一通り聞いた。

「ん？ ココは……？」

「あ、水谷さん。気が付きましたか。ココは中央病院です」

ベッドの脇で椅子に腰掛けた総矢が答える。総矢の後ろに見える窓の外の景色が暗いことから、時間帯が昼間ではない事だけは分かる。

「総矢か。ああ、俺はどのくらい眠っていた？」

「今日は9月6日、時刻は午後7時です。一応看護師に連絡入れて

おきます」

部屋の近くを偶然通り掛かった看護師に状況を伝えた後、総矢は気がついて間もない清正に順を追って説明した。病院に搬送された清正は出血が酷く、かなり危険であった事。処置が終わってから二日近く眠っていた事。その間に煉がみことの能力を鍛えていた事。総矢も同様にあの後運ばれた事を付け加えた。

「俺もそのまま半日以上寝てた訳ですけどね。……水谷さん、本当にすみませんでした。俺のせいでの、左腕……」

清正が包帯を巻かれたままの左腕に視線を移す。左右に釣り合いの取れない長さの腕を見て、目を閉じ静かに答える。

「気にするな。俺の腕よりお前の方が戦力になると判断しただけだ。それにな、能力自体は使える」

総矢の目の前で水を操る。左手の動きに合わせて水が空中を漂う。「とは言えこれでは繊細なコントロールがイメージしにくい、か。

総矢、煉を呼んでくれ」

「ああ、それならもうすぐ」
話をしていると同時に煉が現れた。

「清正、起きたか。大方は総矢から聞いているな」

「ああ、それよりもだ。俺は」

「腕のことだろ？ 分かっている。頼りになりそうな人間に連絡は入れてある」

煉と清正の会話に全く付いていけない総矢はその場で黙っているより他ならなかった。

「総矢、お前のおかげでこの前貰った名刺の人間に連絡したんだ」

「柏木さんに？ どうして？」

「俺の義手を作るためだ。煉、完成予定は？」

「明日の昼までには仕上げると言ってくれた」

（どれだけ早いんだよ。不良品じゃないだろうな……）

総矢は一人不安を胸に抱いていたが、煉と清正は心配をしていない様子だった。

「悪かったな。左腕、回収できればくつつく可能性あったかもしれないのに」

「済んだ事だ。その分お前が仕事してくれよ」

苦笑いしながら煉は病室から出ていった。

進展？ - 左腕 - (後書き)

話の中で日付を書いたのが久し振りです。

しよっちゅう何時が何時か忘れそうになります。

因みに簡単に纏めます。

工場潜入は9 / 4 (日中)

襲撃受けて反撃に行ったのは9 / 4 (夜)

病院搬送が9 / 4 (深夜)

書いた期間は半年以上・・・アレ？

進展？ - 聞き込み -

矢口が入れ替わりに入ってきた。

「お目覚めのようですね。気分はいかがですか？」

「落ち着いてはいます。これは少しシヨックですが」

矢口は薄く笑った後、簡単な問診が行われた。問診が終わり、矢口が総矢に話を振る。

「そういえば少し会わないうちに、少し変わったみたいですが水口さんのおかげですか？」

「かもしれないですね」

「ああ、いい方向に変わったかどうかは分からないが」
矢口は目を丸くして答える。

「そうですね？ 以前に比べ、目に活力がありますよ。体の回復も明らかに早いですし」

「『頼れる仲間』ができて、精神的に楽になったからかもしれないですね」

総矢の言葉に今度は清正が目を丸くする。

「お前……よくもまあ恥ずかしげもなくそんなことが言えるな」

「そこは触れなくてもええですか」

「何にせよ心に余裕があることはいい事です。さて、水谷さんは明日に再度検査を行います。話は以上です。それでは」

立ち上がり、矢口は部屋から出て行った。直後に清正は総矢に尋ねる。

「以前からの知り合いか？」

「ええ。何度かお世話になってて」

「ま、いいや。ちょっと考えたいことがあるから1人にしてくれ」

総矢は清正に追い出された。既に自分の病室を持たない総矢はそのまま病院を出た。

「で、追い出されて来たのがここか。俺の貴重な睡眠時間を削りやがって」

レイルは不満そうな顔を向ける。

「閉店してるからって鍵も掛けずにそのまま店で寝るのは流石にまじですって」

「うるせー黙れ、この食い逃げ犯」

「あれは緊急で仕方なく」

「犯人は皆そう言う」

次々に繰り出されるレイルの言葉に総矢は反論できずに苦笑いするしかない。

「で、何だ？ 話があるからわざわざ閉店後になってまで来たんだろ？」

「助かります」

事の経緯をレイルに話す。

「……って訳なんです。その男を捜したいんですが……」

「なるほど。風を自在に操る『能力』か……『能力』については心当たりが無い訳じゃない」

「本当ですか？」

「ああ、俺自身が目にした訳ではないんだが、ここの『名簿』の間から超能力者相手に戦ったって話を聞いたことがある。そいつが戦った相手は風じゃなくて炎を自在に操っていたらしいが」

「炎ですか……それで？ その超能力者はどうなったんです？」

「知らね。戦った本人も炎で足止めされてその間に逃げられちまつたらしいからな」

「大体3年前の話だ。詳しくは聞いてないがこの近くでの話らしい。俺が知ってるのはそれだけだ」

「3年前ですか……そんなに前だと」

「ま、今ではあてにならないよな。誰から聞いたかもうる覚えだしな」

総矢はうな垂れた。

「仕方ないってことはわかってますけど、やっぱりテンション下がりますね」

「文句言うな。さて、今度こそ俺は寝る。帰れ」

レイルに店から追い出された。やむ終えず外に出た総矢は、襲撃を受けた『情報屋』のアジトに向かう。

（呼び出された時は中まで見ている余裕が無かったからな。確認しておいて損は無いはず）

総矢は入り口に辿り着いた。入り口のガラス戸は無残に砕かれ、金属製のフレームも完全に折れ曲がっていた。

（酷いな……この壊し方、人間が生身で武器使っただけじゃ無理そうだな。車で突っ込んだレベルだな。車もタダでは済まないだろうが）

次いで一階を見て回る。至る所の壁が抉られ、血液が付着している箇所もかなり目に付く。上階も同様であった。犯人の目的は、人であろうが物であろうがとにかく『破壊』であることは明白だ。

「無茶苦茶だ……ここまでやる必要があったのか……？」

総矢がいたフロアに階段を歩く音が響き渡る。音に反応し、総矢は身構えた。

進展？ - 聞き込み - (後書き)

急に秋になった気がします。

台風の前線で一気に気温が変化した気がします。

進展？ - 仮宿での特訓 -

下階から上ってきたみことが総矢に声を掛ける。

「酷いでしょ。でも、ここに死体があったときはもつと酷かった。皆苦しみに悶えている表情だったわ。死因の殆どが失血死。存分に苦しめてから殺されたのよ」

「その……死体は？」

総矢は戸惑いながらみことに尋ねる。

「清正さんが能力で血を洗い流して、今は地下にいるわ」

「警察には？ 何か手がかりを見つけて」

「警察にできるのは犯人を檻の中に入れることだけ。でもここ見て分かるでしょ？」

「この破壊は能力者によるもの。たとえ捕まったとしてもまた破壊して出てくる」

総矢の言葉に頷き、みことは付け加える。

「そう。それに目撃者は殺す。脱獄で更に多くの人間が死ぬわ。一

昨日のあの男ならそうするはず」

「一昨日の奴……そうだ、清正さんも目が覚めたし、明日能力で知った時のこと話します」

「ああ、あの時突然倒れたのはそういう事ね。火口さんが手がかりを探すよりトレーニングを優先した理由がやっと分かったわ」

総矢はみことに連れられ、煉とみことが仮宿にしているアパートの一室に向かう。その間にみことは煉に連絡を取る。

「火口さん、崎見総矢を見つけた。これから連れて帰るわ」

『おう、分かった。それじゃ後で……そうだ、こっち来る間、総矢に能力を使わせ続ける』

アパートの一室で待っていたのは小さな炎で黙々と能力の訓練を続ける煉だった。煉の言いつけ通り、総矢は能力をONにしたままで

いた。

「来たか。始めるぞ。2人とも準備をしろ」

「この部屋暑いし、汗臭いわよ。能力強化に夢中になって換気すらしないってどういうこと？」

「みことが不満そうに言いながら窓を開ける。煉は総矢に駆け寄り、耳打ちする。」

「昨日もそうだったんだが、あいつ物凄く小言が多いんだよ」

「まあ綺麗好きなのはいいんじゃないんですか？ 少なくとも汚れを気にしないよりは」

煉は口を開けて硬直している。表情があまりにも不自然だ。

（あれ？ ひよっとして俺変な事言ったか？ それにしても火口さんの顔すげえな……）」

「ほら、ポーっとしてないで。始めるんでしょ？」

みことは総矢の横に並び、煉に声を掛ける。

「それじゃまず大塚、昨日もやったが全力の炎を掌サイズまで圧縮それを5分間維持。で、総矢は……」

「能力ONにしたままですから。言わずとも分かりますよ」

煉は薄く笑って頭の中で内容をイメージする。

（能力の持続時間の延長。確かに重要ではありますが、その方法はちよつと……）」

煉の考えた総矢の特訓は正に命がけのものであった。

「これが1番手っ取り早い。長期間あれば命をかけるまでも無いかもしれないが、今は」

「徹底的に集中する必要がある。効率良く能力を伸ばすには自身の命をかけるほどに精神を研ぎ澄ます必要があるって訳ですね」

煉が立ち上がり、炎を右手に灯す。

「始めるぞ」

「わ、分かりました」

煉に促され、総矢が立ち上がる。煉の炎が拳となり正面から総矢に向かって伸びる。攻撃を把握していたからこそ上半身を右に捻っ

て避ける事ができた。連続して数発の炎の拳を繰り返して続ける。

（まだ余裕がある。いける。体がついていける範囲だ）

「いいぞ、その調子だ。もっと頭と体の反応速度を早めろ」

横ではみことが苦勞しながらもようやく両手で握れる程度までの大きさまで炎を縮めていた。深く深呼吸し、目を閉じて集中することで一気に片手で握れる大きさまで縮める。その様子に総矢への攻撃を一時的に止め、みことに視線を移す。

（縮める時間が短縮されている。こっちもいい調子だな）

「ハア、ハア……やべっ、もう結構やば」

呟いた瞬間、総矢に向かって炎が伸びる。伸びた部分が総矢の右肩を掠めて焦がす。

（あつぶね！）

「気を抜くな、死ぬぞ。……よし、1分休憩したら再開だ」

総矢は能力をOFFにする。数回繰り返した頃には普段以上に体力と精神力が大きく削られてることに気付く。

（極限状態と気を抜いた状態を瞬時に切り替えるのは厳しい。だが休憩はしなければ持たない……想像した以上にこの特訓、辛いな）

「再開だ」

煉の一言で再び炎による攻撃を避け続ける。その間もみことは圧縮と変形の訓練を繰り返していた。総矢はその後も数度、繰り返した。休憩に入ると同時に体力の限界が近付き、総矢は膝を着いた。十分に回復する間もなく、1分間が過ぎる。

「再開だ」

煉が手を緩めない事も理解出来ていた。死なないために総矢は全力で避け、耐え続ける。何度も繰り返す内に、総矢は意識があるまま、体が完全に動かなくなり、その場に倒れた。うつ伏せのまま動かない総矢の首を煉が横に向ける。

「あれ？ 何ですかこれ？ 能力も使えない上に、体が全く動かないんですけど」

「だが意識はハッキリしてるな。OKだ。その状態に到達出来ただ

けで上出来だ。今日はそのまま休め。起きたら元通りになってるはずだ」

終了を告げられ、気が抜けた総矢はすぐに眠りに落ちた。

進展？ - 仮宿での特訓 - (後書き)

秋ですね。

私が四季の中で一番好きなのは

どれか良く分かりません。

進展？ - 情報整理 -

翌日、九月八日。煉に叩き起こされて総矢は目を覚ます。動かなくなっていた体は目を覚ました時には普段以上に軽く感じる。

「これ……」

「体が軽いだろ。試しに能力で俺の思考読んでみな」

黙って頷き、総矢は煉の思考を読み取る。能力のONへの切替が自然に出来る。

(アレ？ 切替が軽い)

「限界まで能力使ったおかげで体が慣れたんだ。今までは限界になった時、体が勝手に休息状態に切替わってたんだが昨日はそれが出来ない状態に追込んで鍛えたんだ。話はこれくらいにして行くぞ」
三人が清正の病室へ到着した時には既に依頼を受けた柏木玲子が出た。

「来たね。三人が来る前に矢口先生の協力で、根元部分の接合は完了したよ」

清正の左前腕部には金属部品が数点埋め込まれていた。

「で、後は先端を取り付けて軽く調整。だね」

転送装置で機械の腕を取り出し、清正に装着させる。腕の外見は機構部分まで見える造りだ。

「はい取り付け完了。それじゃ腕の捻り、手首の動き、指先の曲がり具合を確認して」

言われた通り、腕の動きを何度も動かして慎重に確かめる。生身の右手と比較しながら動き易さを細かく確認する。

「ひねりに異常は無い。手首と指の動きが少し重い、様な気がするんだが」

「手首と指だね。ちょっと待って……うわ、パラメータずれてる。すぐ直すよ……これでどう？」

取り出した機材でさっさと調整を行った。

「ああ、自然な感じがする。しつくりくる」

「そう。じゃ、私の仕事は一先ずここまでだけど、問題があったらまた連絡して。この前の恩もあるし無料でメンテナ^ンスくらいは請け負うから。徹夜で眠いから今日はもう電話に出れないと思うけど許してね」

さつさと片付けて玲子は病室を後にした。病室に残った四人に張り詰めた空気が流れる。

「清正、能力は？」

「問題ない程度には使える。心配するな」

「ならいい。話を進めるぞ。清正、最初に説明するがこの前の先頭の直前に総矢に能力を使わせた結果、総矢は倒れた」

「それで？」

「俺たちが把握してるのはここまでだ。総矢、話してくれ」

煉に促され、総矢は読み取った記憶のかけらを整理する。深呼吸した後、総矢は話し始めた。

「まず、彼のあの風の能力についてですが。あの人の能力は人工的に身に付けられました」

三人の表情が強張る。清正が尋ねる。

「人工的に？」

「はい。彼は、彼らはある組織の一員です。その組織は多くの人間を集めて、篩いにかけて能力者を生み出しています。先に会った女性^性は新人、つまりは能力者になりたてです」

「『その篩いにかける』っていうのは？ 一体何をして能力を身に付けたの？」

みことが思わず声を荒げる。

「身に付けさせるのが火の能力であれば生きたまま炎の中に、風の能力ならば竜巻の中に放り込み、水であれば溺れさせる。大多数はそれで命を落とします。ですが、極稀に生き残る者がいます。低い確率でその生き残りの中に能力者が誕生しているって方法です」

静まり返った中、煉が口を開く。

「その方法で今まで何人の能力者を生まれたか分かるか？」

「組織で彼が言われた事が事実ならば彼が6人目です」

清正が重い口調で話す。

「その分、犠牲者は相当な数になってそうだな……」

総矢は口にするのを躊躇い、目を横に逸らす事しか出来ずにいた。

「すまん、続けてくれ。まだ入手した情報はあるだろうか？」

「この前、あの建物を襲撃したのはその組織からの命令です。命令内容は『情報屋を壊滅させること』、そしてその命令での処分対象、言い換えれば標的は『能力者以外』でした」

総矢の一言に空気が更に重たくなる。矛盾に気づいたみこが慌てて尋ねる。

「ちょ、ちょっと待って。でもそれじゃおかしくない？ 女が逃げた後、『1人も始末出来てない』って言ってたじゃない。私達は標的じゃないんでしょう？」

「その組織の最終的な狙いは『情報屋』の完全消滅。向こうは情報屋に能力者がいるのは把握していました。能力者を殺すのは手間がかかるかと判断し、最初にそうでない者を全て殺すことで俺達を誘い出し、罠にはめたんです」

「あの女が俺達を罠で殺すつもりだったが、失敗したわけだな」

「だが彼女の引き際の良さは見事だった。俺達に能力をある程度引き出させて既に分析しているだろうな」

「私達の能力を引き出させる事が目的だったの？」

総矢が頷き、続きを話す。

「その後現れた男に再び与えられた命令が、残りの能力者の『処分』でした。結果的には一昨日の2人は共に命令を実行できなかった訳ですが。これが最後の情報ですが、彼らが拠点にしていたのはこの病院から西に行った所にある多目的実験場です」

進展？ - 能力の出力 -

総矢の言葉に三人が耳を疑った。全員が驚き表情が強張っていた中、清正が言葉を搾り出す。

「本当、なのか？ …… あそこは政府の管理施設だぞ？」

「奴らと政府が絡んでいるかどうかはともかく、場所は間違いありません」

総矢の言葉に再び沈黙になる。

「……とにかく、私達の次の目的地は多目的実験場^{そし}ね。徹底的に壊してやるわ」

「バカか、最終的に関係者全員を始末しなきゃならねーから調べ上げるのが先だ」

「やるべきことを話すのは後だ。ここから先はおそらく能力者同士の潰し合いになるはず」

清正の言葉に全員が頷く。

「そういう訳だ。下手に分かれて乗り込むのは危険だ。この前のように罠に対処することも考えて襲撃は俺の退院に合わせる、異論は無いな」

「そうだな。それで退院はいつだ？」

煉の疑問に答えたのは扉を開けて現れた矢口だった。

「退院ですか？ 水谷さんの退院でしたら明日の再検査の結果次第です。おそらく明後日には退院できると思いますよ」

「……そんなに早く？」

驚き、全員が声を合わせて尋ねる。

「ええ、細胞の再生は完了しています。義手との接合部に関しても今のところ問題ありません。あ、退院とは言いましたが、暫くは通院してもらいますよ」

「そ、そうですか」

清正が自分の左腕に視線を移し、回復の早さに驚いていた。その

後、矢口は簡単な明日の検査についての説明を行い、病室から出ていった。

「予想より早い退院で良かったわ」

「ああ、これなら明後日の夜には行けそうだ」

煉とみことが嬉々としていた。清正が全員に予定を告げる。

「よし、出発は明後日、9月10日の午後9時にいつもの場所に集合だ」

清正の提案に全員が頷く。頷いた直後、煉が返す。

「実験場に向かう事に関してはいいが、明後日まで奴らが動いてこないって可能性は0じゃねーぞ」

「俺の心配か？ お前に心配されるほど弱ってないぞ。なんなら今戦り合ってみるか？」

新たな右義手で煉を軽く挑発する。清正が嬉しそうに指を動かす様子を見て、煉が溜息を吐きながら頭を掻く。

「はあ、分かった分かった。それなら俺はこいつ等の訓練に専念させてもらうからな」

「自分の身位自分で守れる。心配すんな。お前達も気をつける。それじゃ集合には遅れるなよ」

「ああ、2人とも行くぞ」

煉に促され、3人は病院を後にした。

病院を出た後、人気の無い場所にある廃屋に連れられ、総矢とみことは能力の訓練をひたすら続けた。煉の指導の成果は朝に体感した事からも分かっていたが、物凄いものだった。その日の内にみこととは目で見て分かるほどの成長を遂げていた。

「……できた」

両手の中に青い炎球を灯しながら、みことが呟く。

「もう出来たか。よし、その炎でこれを燃やしてみな」

煉がみことの足元に巨大な瓦礫を置いた。頷き、炎を置かれた瓦礫に向かって放つ。放たれた青い炎球は瓦礫を瞬時に溶かし、蒸発

させる。それだけでは収まらず、置いた地面に円い穴を空け、地面を溶かして進み続けている。数秒程で音が鳴り止み、炎が消滅したことを確認する。

「嘘……こんなに威力が上がったの？」

「そう。能力なんて使い次第でいくらでも強くなる。圧縮をすればするほど高温になるが、その分コントロールは難しくなる。お前は今まで圧縮が不完全だったからここまでの威力が出せずにいただけだ。ちよつと見てろ」

そう言うつと煉は右手に巨大な炎を灯す。それを徐々に圧縮し、ピ―玉ほどの大きさまで縮めた。その球は炎と言うより、

「……太陽だ」

思わず総矢が口にした。自慢げに笑う煉の顔からは凄まじい疲労が窺えた。口元だけ笑い、煉は地面に向かってその球を放つ。音も立てずに球体は地面を掘り進む。穴からは光が漏れ、存在を主張し続けている。総矢達は呆然とその様子を見ているしかなかった。数十秒後、穴から漏れていた光が消えた。

「今の結構本気だぞ……体力の消費が半端じゃないから使い所を間違えるとどうしようもなくなるから気をつける。一撃必殺なんて使い勝手が悪いからな」

煉はその場に腰を降ろして話を続ける。肩で息をしている。

「……ハア……だから2人とも自分で能力と体力のバランスを考えて使えよ」

「ええ、分かったわ」

「重々承知してますから、前みたいに無理矢理使わせるような事しないで下さいね」

総矢の反論に煉は苦笑いしていた。

「ま、まああの時はフォロ―出来ると思ったからそうしたんだ。後の事を考えるのも重要だが臨機応変に対応する事も……と、とにかく今日は終わりだ」

三人は仮宿のアパートへと向かう。小声で煉が疑問を口にする。

「総矢、お前の能力って『人の思考を読み取る』でいいんだよな？」

「今更何ですか？ 相手の動きが分かるのは予知とかではなく次の行動が読めるからです」

「そう、だよな……」

その問答の後、煉は一切口を開く事は無かった。

進展？ - 作戦会議その1 -

翌日、9月9日。昨日と同じ廃屋。総矢達の訓練は午前中で終了した。

「明日に備えて、つて事だ。大塚は威力もコントロールもかなり上がったし、総矢の持続時間も十分かどうかは分からねえが伸びている。後は体を休める」

煉は二人に背を向け、歩き始めた。

「どこ行くの？ 単独行動は危険よ」

「立ちションだ。先帰ってる」

手で総矢達が離れるよう促し陰に向かう。総矢は能力で煉の本当の目的を把握していた。総矢は周囲に誰もいない事を確認してから、煉の元を離れる。

「火口さん、自分1人で鍛錬するつもりね？」

「え？ 分かってたんですか？」

「分かるわよ。目つきが鋭かったじゃない。それに、見られたくないから私達を遠ざけようとしたんでしょ」

総矢はその観察力に感心していた。

「少し離れて来るのを待ちませんか？」

「いいわよ。後でどこかでゆっくりコーヒーでも飲みたいわね」

「喫茶店で良ければ。俺がよく行くところでしたら案内しますよ」

「ねえ。話変わるけどさ、あんたはどうするつもりなの？」

「どうって？ 何がです？」

「私達は許すつもりはないし、徹底的に潰す。関わった奴らは消す。そのために動いているわ。でもあんたはどこか私達とは違う。実験場に行つて何をしたいの？ 奴らをどうするの？」

真つ直ぐなみことの視線に耐えられず、総矢は目を逸らす。

「……行つてみないと分かりません」

「言つて思った。でもね、先に言っておくけど躊躇したら死ぬわよ。」

それはあんたじゃないかもしれない。あんたの周囲にいる人間かもしれない。それだけは頭に入れておいて」

「誰も殺したり、殺されたりしないのが理想なんですけどね」

「どう頑張ってもそれは無理」

総矢にもそれは分かっていた。その返事をする事無く、互いに言葉を発することは無くなった。無言のまま時間が流れ、足音が聞こえる。

「どうやら気を使わせちまったみたいだな」

煉が何とも言えない顔をしながら現れた。

「じゃ、コーヒ―は火口さんの驕りね」

「分かった分かった」

「それじゃ行きますか」

「へい。いらっしやい……？　へえ、客連れて来るとは感心だ」

戸を開けると、やる気の無い店主の挨拶が聞こえる。

「じゃあ」

「安くはしねえぞ」

総矢の発言を先読みし、値切り交渉を拒否した。総矢達は大人しく奥のテーブル席へと腰掛ける。盆に水を乗せた優衣が席へと近づく。

「ご注文はお決まりですか？」

全員がブラックを注文し、優衣がカウンターへと戻る。その少女に聞こえない程度にみこことが話しかける。

「よく来るのはあの子が目的ね？　このロリコン」

総矢が水を嘔き、咳き込む。その様子を見て煉も心配そうに尋ねる。

「大丈夫か？　凶星だからってそんなに動揺するなよ」

「ち、違います！」

「そつなの？　本当に？」

みこことの妙な視線に困り、総矢は黙り込む。

(何で毎回この流れなんだ?)

「それは置いておいて、客が少ないのは好都合だな。いろいろ話が
出来そうだな」

煉が唐突に真面目な話を始めた。

「大塚の能力を知っているのは俺達、それとあそこの医者だけで間
違いないな?」

「そのハズよ。あんたの方が病院に長くいたんだし、補足があった
ら言つて?」

「少なくとも俺が話したのは矢口先生だけです。知られていたとし
てもごく一部です」

煉は頷き、今度は総矢に視線を移す。

「お前の能力の事を知っているのは?」

「え」と、話したのは情報屋の皆さんと柏木さん、それとその店
主です」

煉とみことが揃ってレイルに顔を向ける。新聞を広げ、客商売を
しているとは思えない程寛ぎ、煉達には気付かない。みことは総矢
に矢継ぎ早に質問をぶつける。

「え? なんであの人に教えたの? というより教える必要あつた
の?」

そんなみことを無視して、煉は納得してから尋ねる。

「……へえ。総矢、誰からここのこと聞いたんだ?」

「え? 矢口先生です。目が覚めた俺が家族のこと調べるならまず
ここに行けと言われたんです」

「へえ。あの医者もなかなか良く知ってるじゃねえか」

総矢の回答に感心する煉。その横でみことが不満そうに口を開く。

「ねえ。一体何の話? 説明は?」

「ここは……」

総矢が簡単に説明する。表立ってではなく動いている人間が集う
場所であり、自分がここに登録されている人間であること、能力を
使って仕事をしてきたことを。次いで煉が、店については知ってい

だが、清正が不用意に深く関わるのは好ましくないと判断したために仲間内にも話してはいなかった事を説明した。

「なるほどね。あんたが持ってたそれもここで貰ったんだ」

みことが総矢の転送装置を指で付いている間に煉が再び話を進める。

「話を戻すぞ。この前の襲撃で『能力者以外の人間だけ』が最初の標的だった。つまり、相手は俺達が能力を持っていることを知っている」

進展？ - 作戦会議その1 - (後書き)

各話毎の文字数が増えてる気が……orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5904m/>

Seeker -探求者-

2011年10月23日23時51分発行